

目垣を乗り越こして木戸口から庭中に亂れ入る。其数は約一ダース許り、すらりと主人の前に並んだ。大抵は上衣もちよつ着もつて居らん。白シャツの腕をまくつて、腕組をしたのがある。綿ネルの洗ひざらしを申し譯に背中丈へ乗せて居るのがある。さうかと思ふと白の帆布綿に黒い縁をとつて胸の真中に花文字を、同じ色に縫ひつけた洒落者もある。いづれも一騎當千の猛將と見えて、丹波の國は笹山から昨夜着立して御座ると云はぬ許に、黒く逞しく筋肉が發達して居る。中學杯へ入れて學問をさせるのは惜しいものだ。漁師か船頭にしたら定めし國家の爲めになるだらうと思はれる位である。彼等は申し合せた如く、素足に股引を高くまくつて、近火の手傳にでも行きさうな風體に見える。彼等は主人の前にならんだぎり黙然として一言も發しない。主人も口を開かない。少時らくの間雙方共睨めくらをして居るなかに一寸殺氣がある。

「貴様等はぬすつとうか」と主人は尋問した。大氣燄である。奥齒で噛み潰した癩癩玉が炎となつて鼻の穴から抜けるので、小鼻が、いちぢるしく怒つて見える。越後獅子の鼻は人間が怒つた時の恰好を形どつて作つたものであらう。それでなくてはあんなに恐しく出来るものではない。

「いえ泥棒ではありません。落雲館の生徒です」

就て一言する必要がある、敵は主人が昨日の權幕を見て此様子では今日も必ず自身で出馬するに相違ないと察した。其時萬一逃げ損じて大僧がつかまつては事面倒になる。こゝは一年生か二年生位な小供を玉拾ひにやつて危険を避けるに越した事はない。よし主人が小供をつらまへて愚圖愚圖理窟を捏ね廻したつて、落雲館の名譽には關係しない、こんなものを大人氣もなく相手にする主人の恥辱になる許りだ。敵の考はかうであつた。是が普通の人間の考で至極尤もな所である。但敵は相手が普通の人間でないと云ふ事を勘定のうちに入れるのを忘れた許りである。主人に此位の常識があれば昨日だつて飛び出しはしない。逆上は普通の人間を、普通の人間の程度以上に釣るし上げて、常識のあるものに、非常識を興へる者である。女だの、小供だの、車引きだの、馬子だのと、そんな見境ひのあるうちは、未だ逆上を以て人に誇るに足らん。主人の如く相手にならぬ中學一年生を生捕つて戦争の人質とする程の了見でなくては逆上家の仲間入りは出来ないのである。可哀さうなのは捕虜である。單に上級生の命令によつて玉拾ひなる雑兵の役を勤めた所、運わるく非常識の敵將、逆上の天才に追ひ詰められて、垣越える間もあらばこそ、庭前に引き据ゑられた。かうなると敵軍は安閑と味方の恥辱を見て居る譯に行かない。我も我もと四つ

「えゝ」
主人は奥の方を顧みながら、おいこらくと云ふ。
埼玉生れの御三が襖をあけて、へえと顔を出す。
「落雲館へ行つて誰か連れてこい」
「誰を連れて参ります」
「誰でもいいから連れてこい」
下女は「へえ」と答へたが、あまり庭前の光景が妙なものと、使の趣が判然しないのと、さつきからの事件の發展が馬鹿々々しいので、立ちもせず、坐りもせずにやゝ笑つて居る。主人は是でも大戦争をして居る積りである。逆上の敏腕を大に振つて居る積りである。然る所自分の召し使たる當然此方の肩を持つべきものが、眞面目な態度を以て事に臨まんのみか、用を言ひつけるのを聞きながらにやゝ笑つて居る。益逆上せざるを得ない。
「誰でも構はんから呼んで来いと云ふのに、わからんか。校長でも幹事でも教頭でも……」
「あの校長さんを……」下女は校長と云ふ言葉丈しか知らないのである。

「うそをつけ。落雲館の生徒が無断で人の庭宅に侵入する奴があるか」
「然し此通りちやんと學校の徽章のついて居る帽子を被つて居ます」
「にせものだらう。落雲館の生徒なら何故むやみに侵入した」
「ボールが飛び込んだものですから」
「なぜボールを飛び込ました」
「つい飛び込んだんです」
「怪しからん奴だ」
「以後注意しますから、今度丈許して下さい」
「どこの何者かわからん奴が垣を越えて邸内に闖入するのを、さう容易く許されると思ふか」
「夫でも落雲館の生徒に違ないんですから」
「落雲館の生徒なら何年生だ」
「三年生です」
「屹度さうか」

「校長でも、幹事でも教頭でもと云つて居るのにわからんか」

「誰も居りませんでしたら小使でもよろしう御座いますか」

「馬鹿を云へ。小使杯に何が分かるものか」

こゝに至つて下女も已を得んと心得たものか、「へえ」と云つて出て行つた。使の主意は矢張り飲み込めないのである。小使でも引張つて來はせんかと心配して居ると、豈計らんや例の倫理の先生が表門から乗り込んで來た。平然と座に就くを待ち受けた主人は直ちに談判にとりかゝる。

「只今邸内に此者共が亂入致して……」と忠臣藏の様な古風な言葉を使つたが「本當に御校の生徒でせうか」と少々皮肉に語尾を切つた。

倫理の先生は別段驚いた様子もなく、平氣で庭前にならんで居る勇士を一通り見廻はした上、もとの如く腫を主人の方にかへして、下の如く答へた。

「左様みんな學校の生徒であります。こんな事のない様に始終訓戒を加へて置きますが……どうも困つたもので……何故君等は垣杯を乗り越すのか」

さすがに生徒は生徒である、倫理の先生に向つては一言もないと見えて何とも云ふものはない。

大人しく庭の隅にかたまつて羊の群が雪に逢つた様に控えて居る。

「丸が這入るのも仕方がないでせう。かうして學校の隣りに住んで居る以上は、時々ボールも飛んで來ませう。然し……あまり亂暴ですからな。假令垣を乗り越えるにしても知れない様に、そつと拾つて行くなら、まだ勘辨の仕様もあります……」

「御尤もで、よく注意は致しますが何分多人数の事……よく是から注意をせんといかんぜ。もしボールが飛んだら表から廻つて、御斷りをして取らなければいかん。いゝか。——廣い學校の事ですからどうも世話ばかりやけて仕方がないです。で運動は教育上必要なものでありますから、どうも之を禁ずる譯には參りかねるので。之を許すといひ御迷惑になる様な事が出來ますが、是は是非御容赦を願ひたいと思ひます。其代り向後は屹度表門から廻つて御斷りを致した上で取らせますから」

「いや、さう事が分かればよろしいです。球はいくら御投げになつても差支はないです。表からきて一寸斷はつて下されば構ひません。では此生徒はあなたに御引き渡しますから御連れ歸りを願ひます。いやわざ／＼御呼び立て申して恐縮です」と主人は例に因つて例の如く龍頭蛇

退之の文を読むごとに薔薇の水で手を清めたと云ふ位だから、吾輩の文に對してもせめて自腹で雑誌を買つて来て、友人の御餘りを借りて間に合はすと云ふ不始末丈はない事に致したい。是から述べるのは、吾輩自ら餘瀾と號するのだけれど、餘瀾ならどうせつまらんに極つてゐる、讀まんでもよからう杯と思ふと飛んだ後悔をする。是非仕舞迄精讀しなくてはいかん。

大事件のあつた翌日、吾輩は一寸散歩がしたくなつたから表へ出た。すると向ふ横町へ曲がらうと云ふ角で金田の日那と鈴木藤さんがしきりに立ちながら話をして居る。金田君は車で自宅へ歸る所、鈴木君は金田君の留守を訪問して引き返す途中で兩人がばつたりと出逢つたのである。近來は金田の邸内も珍らしくなくなつたから、滅多にあちらの方角へは足が向かなかつたが、かう御目に懸つて見ると、何となく御懐かしい。鈴木にも久々だから餘所ながら拜顔の榮を得て置かう。かう決心してのそく、御兩君の佇立して居らるゝ傍近く歩み寄つて見ると、自然兩君の談話が耳に入る。是は吾輩の罪ではない。先方が話して居るのがわるいのだ。金田君は探偵さへ付けて主人の動靜を窮がふ位の程度の良心を有して居る男だから、吾輩が偶然君の談話を拜聴したつて怒らるゝ氣遣はあるまい。もし怒られたら君は公平と云ふ意味を御承知ないのである。とに

尾の挨拶をする。倫理の先生は丹波の笹山を連れて表門から落雲館へ引き上げる。吾輩の所謂大事件は是でひと先づ落着を告げた。何のそれが大事件かと笑ふなら、笑ふがいゝ。そんな人には大事件でない迄だ。吾輩は主人の大事件を寫したので、そんな人の大事件を記したのではない。尻が切れて強弩の末勢だ杯と悪口するものがあるなら、是が主人の特色である事を記憶して貰ひたい。主人が滑稽文の材料になるのも亦此特色に存する事を記憶して貰ひたい。十四五の小供を相手にするのは馬鹿だと云ふなら吾輩も馬鹿に相違ないと同意する。だから大町桂月は主人をつらまへて未だ稚氣を免がれずと云ふて居る。

吾輩は既に小事件を敍し了り、今又大事件を述べ了つたから、是より大事件の後に起る餘瀾を描き出だして、全篇の結びを付ける積りである。凡て吾輩のかく事は、口から出任せのいゝ加減と思ふ讀者もあるかも知れないが決してそんな輕率な猫ではない。一字一句の裏に宇宙の一大哲理を包含するは無論の事、其一字一句が層々連續すると首尾相應じ前後相照らして、瑣談織話と思つてうっかりと讀んで居たものが忽然豹變して容易ならざる法語となるんだから、決して寝ころんだり、足を出して五行ごと一度に讀むのだなど云ふ無禮を演じてはいけない。柳宗元は韓

かく吾輩は兩君の談話を聞いたのである。聞きたくて聴いたのではない。聞きたくもないのに談話の方で吾輩の耳の中へ飛び込んで来たのである。

「只今御宅へ伺ひました所で、丁度よい所で御目にかゝりました」と藤さんは鄭寧に頭をびよこつかせる。

「うむ、さうかへ。實は此間から、君に一寸逢ひたいと思つて居たがね。それはよかつた」

「へえ、それは好都合で御座いました。何か御用で」

「いや何、大した事でもないのさ。どうでもいゝんだが、君でないと出来ない事なんだ」

「私に出来る事なら何でもやりませう。どんな事で」

「えゝ、さう……」と考へて居る。

「何なら、御都合のとき出直して伺ひませう。いつが宜しう、御座いますか」

「なあに、そんな大した事ぢやあ無いのさ。——それぢや折角だから頼まうか」

「どうか御遠慮なく……」

「あの變人ね。そら君の舊友さ。苦沙彌とか何とか云ふぢやないか」

「えゝ、苦沙彌がどうかしましたか」

「いえ、どうもせんがね。あの事件以來胸糞がわるくつてね」

「御尤で、全く苦沙彌は剛慢ですから……少しは自分の社會上の地位を考へて居るといゝので

すけれども、丸で一人天下ですから」

「そこさ。金に頭はさげん、實業家なんぞ——とか何とか、色々小生意氣な事を云ふから、そんなら實業家の腕前を見せてやらう、と思つてね。此間から大分弱らして居るんだが、矢つ張り頑張つて居るんだ。どうも剛情な奴だ。驚ろいたよ」

「どうも損得と云ふ觀念の乏しい奴ですから無暗に瘦我慢を張るんでせう。昔からあゝ云ふ癖のある男で、つまり自分の損になる事に氣が付かないんですから度し難いです」

「あはゝゝほんとに度し難い。色々手を易へ品を易へてやつて見るんだがね。とう／＼仕舞に學校の生徒にやらしした」

「そいつは妙案ですな。利目が御座いましたか」

「これにやあ、奴も大分困つた様だ。もう遠からず落城するに極つてゐる」

「そりや結構です。いくら威張つても多勢に無勢ですからな」

「さうさ、一人ぢやあ仕方がねえ。それで大分弱つた様だが、まあどんな様子か君に行つて見て来てもらはふと云ふのさ」

「はあ、そうですか。なに譯はありません。すぐ行つて見ませう。容子は歸りがけに御報知を致す事にして。面白いでせう、あの頑固なのが意氣銷沈して居る所は、屹度見物ですよ」

「あゝ、それぢや歸りに御寄り、待つてゐるから」

「それでは御免蒙ります」

おや今度も亦魂膽だ、成程實業家の勢力はえらいものだ、石炭の燃殻の様な主人を逆上させるのも、苦悶の結果主人の頭が蠅滑りの難所となるのも、其頭がイスキラスと同様の運命に陥るのも皆實業家の勢力である。地球が地軸を廻轉するのは何の作用かわからないが、世の中を動かすものは慥かに金である。此金の功力を心得て、此金の威光を自由に發揮するものは實業家諸君を置いて外に一人もない。太陽が無事に東から出て、無事に西へ入るのも全く實業家の御蔭である。今迄はわからずやの窮措大の家に養はれて實業家の御利益を知らなかつたのは、我ながら不覺

である。それにしても冥頑不靈の主人も今度は少し悟らすばなるまい。是でも冥頑不靈で押し通す了見だと危ない。主人の尤も貴重する命があぶない。彼は鈴木君に逢つてどんな挨拶をするのか知らん。其様で彼の悟り具合も自から分明になる。愚圖々々しては居られん、猫だつて主人の事だから大に心配になる。早々鈴木君をすり抜けて御先へ歸宅する。

鈴木君は不相變調子のいゝ男である。今日は金田の事などはおくびにも出さない、連りに當り障りのない世間話を面白さうにして居る。

「君少し顔色が悪い様だぜ、どうかしやせんか」

「別にどこも何ともないさ」

「でも蒼いぜ、用心せんといかんよ。時候がわるいからね。よるは安眠が出来るかね」

「うん」

「何か心配でもありやしないか、僕に出来る事なら何でもするぜ。遠慮なく云ひ給へ」

「心配つて、何を？」

「いえ、なければいゝが、もしあればと云ふ事さ。心配が一番毒だからな。世の中は笑つて面

うでない。

「一寸ボールが這入りましたから、取らして下さい」

下女は臺所から「はい」と答へる。書生は裏手へ廻る。鈴木は妙な顔をして何だか聞かぬ。

「裏の書生がボールを庭へ投げ込んだんだ」

「裏の書生？裏に書生が居るのかい」

「落雲館と云ふ學校さ」

「あゝさうか、學校か。随分騒々しいだらうね」

「騒々しいの何のつて。碌々勉強も出来やしない。僕が文部大臣なら早速閉鎖を命じてやる」

「ハ、大分怒たね。何か癪に障る事でも有るのかい」

「あるのないのつて、朝から晩迄癪に障り續けた」

「そんなに癪に障るなら越せばいゝぢやないか」

「誰が越すもんか、失敬千萬な」

「僕に怒つたつて仕方がない。なあに小供だあね。打ちやつて置けばいゝさ」

白く暮すのが得だよ。どうも君はあまり陰氣過ぎる様だ」

「笑ふのも毒だからな。無暗に笑ふと死ぬ事があるぜ」

「冗談云つちやいけな。笑ふ門には福来るさ」

「昔し希臘にクリシッパスと云ふ哲學者があつたが、君は知るまい」

「知らない。それがどうしたのさ」

「其男が笑ひ過ぎて死んだんだ」

「へえー、そいつは不思議だね。然しそりや昔の事だから……」

「昔しだつて今だつて變りがあるものか。驢馬が銀の井から無花果を食ふのを見て、可笑しくつて堪らなかつて無暗に笑つたんだ。所がどうしても笑ひがとまらない。とう／＼笑ひ死に、死んだんだあね」

「はゝゝ然しそんなに留め度もなく笑はなかつてもいゝさ。少し笑ふ——適宜に、——さうするといゝ心持ちだ」

鈴木君がしきりに主人の動靜を研究して居ると、表の門ががら／＼とあく、客來かと思ふとさ

中を轉がつて行くのが骨が折れて損だよ。丸いものはごろ／＼どこへでも苦なしに行けるが四角なもののはころがるに骨が折れる許りぢやない、轉がるたびに角がすれて痛いものだ。どうせ自分一人の世の中ぢやなし、さう自分の思ふ様に人はならないさ。まあ何だね。どうしても金のあるものに、たてを突いちや損だね。只神經許り痛めて、からだは悪くなる、人は褒めてくれず。向ふは平氣なものさ。坐つて人を使ひさへすれば濟むんだから。多勢に無勢どうせ、叶はないのは知れて居るさ。頑固もいゝが、立て通す積りで居るうちに、自分の勉強に障つたり、毎日の業務に煩を及ぼしたり、とゞの詰りが骨折り損の草臥儲けだからね」

「御免なさい。今一寸ボールが飛びましたから、裏口へ廻つて、取つてもいゝですか」

「そら又來たぜ」と鈴木君は笑つて居る。

「失敬な」と主人は眞赤になつて居る。

鈴木君はもう大概訪問の意を果したと思つたから、それぢや失敬ちと來玉へと歸つて行く。入れ代つてやつて來たのが甘木先生である。逆上家が自分で逆上家だと名乗る者は昔しから例が少くない、是は少々變だなと覺つた時は逆上の峠はもう越して居る。主人の逆上は昨日の大事

「君はよからうが僕はよくない。昨日は教師を呼びつけて談判してやつた」

「それは面白かつたね。恐れ入つたらう」

「うん」

此時又門口をあけて、「一寸ボールが這入りましたから取らして下さい」と云ふ聲がする。

「いや大分來るぢやないか、又ボールだぜ君」

「うん、表から來る様に契約したんだ」

「成程それであんなにくるんだね。さうーか、分つた」

「何が分つたんだい」

「なに、ボールを取りにくる原因がさ」

「今日は是で十六返目だ」

「君うるさくないか。來ない様にしたらいゝぢやないか」

「來ない様にするつたつて、來るから仕方がないさ」

「仕方がないと云へば夫迄だが、さう頑固にして居ないでもよからう。人間は角があると世の

甘木先生も驚ろいたが、そこは温厚の長者だから、別段激した様子もなく、
 「利かん事もないです」と穩かに答へた。
 「私の胃病なんか、いくら薬を飲んでも同じ事ですぜ」
 「決して、そんな事はない」
 「ないですか。少しは善くなりますかな」と自分の胃の事を人に聞いて見る。
 「さう急には、癒りません、だんく利きます。今でももとより大分よくなつて居ます」
 「さうですか」
 「矢張り肝癪が起りますか」
 「起りますとも、夢に迄肝癪を起します」
 「運動でも、少しなさつたらいいでせう」
 「運動すると、猶肝癪が起ります」
 「甘木先生もあきれ返つたものと見えて、
 「どれ一つ拜見しませうか」と診察を始める。診察を終るのを待ちかねた主人は、突然大きな

の際に最高度に達したのであるが、談判も龍頭蛇尾たるに係らず、どうかかうか始末がついたの
 で其晩書齋でつくづく考へて見ると少し變だと氣が付いた。尤落雲館が變なのか、自分が變な
 のか疑を存する餘地は充分あるが、何しろ變に違ひない。いくら中學校の隣に居を構へたつて、斯
 の如く年が年中肝癪を起しつゞけはちと變だと氣が付いた。變であつて見ればどうかしなければ
 ならん。どうするつたつて仕方がない、矢張り醫者の薬でも飲んで肝癪の源に賄賂でも使つて慰
 撫するより外に道はない。かう覺つたから平生かゝりつけの甘木先生を迎へて診察を受けて見様
 と云ふ量見を起したのである。賢か愚か、其邊は別問題として、兎に角自分の逆上に氣が付いた
 丈は殊勝の志、奇特の心得と云はなければならん。甘木先生は例の如くにこくと落付き拂つ
 て、「如何です」と云ふ。醫者は大抵如何ですと云ふに極まつてる。吾輩は「如何です」と云はな
 い醫者はどうも信用を置く氣にならん。
 「先生どうも駄目ですよ」
 「え、何そんな事があるのですか」
 「一體醫者の薬は利くものでせうか」

聲を出して、

「先生、先達て催眠術のかいてある本を讀んだら、催眠術を應用して手癖のわるいんだの、色な病氣だのを直す事が出来る」と書いてあつたですが、本當でせうか」と聞く。

「え、さう云ふ療法もあります」

「今でもやるんですか」

「え、」

「催眠術をかけるのは六づかしいものでせうか」

「なに譯はありません。私などもよく懸けます」

「先生もやるんですか」

「え、一つやつて見ませうか。誰でも懸らなければならん理窟のものです。あなたさへ善ければ懸けて見ませう」

「そいつは面白い、一つ懸けて下さい。私もとうから懸かつて見たいと思つたんです。然し懸かりきりで眼が覺めない」と困るな」

「なに大丈夫です。それぢや遣りませう」

相談は忽ち一決して、主人は愈催眠術を懸けらるゝ事となつた。吾輩は今迄こんな事を見た事がないから心ひそかに喜んで其結果を座敷の隅から拜見する。先生はまづ、主人の眼からかけ始めた。其方法を見て居ると、兩眼の上瞼を上から下へと撫で、主人が既に眼を眠つて居るにも係らず、しきりに同じ方向へくせを付けたがつて居る。しばらくすると先生は主人に向つて「かうやつて、瞼を撫で、居ると、だん／＼眼が重たくなるでせう」と聞いた。主人は「成程重くなりますな」と答へる。先生は猶同じ様に撫でおろし、撫でおろし「だん／＼重くなりますよ、ようござんすか」と云ふ。主人も其氣になつたものか、何とも云はずに黙つて居る。同じ摩擦法は又三四分繰り返される。最後に甘木先生は「さあもう開きませぬ」と云はれた。可哀想に主人の眼はとう／＼潰れて仕舞つた。「もう開かんですか」「え、もうあきませぬ」主人は黙然として目を眠つて居る。吾輩は主人がもう盲目になつたものと思ひ込んで仕舞つた。しばらくして先生は「あけるなら開いて御覽なさい。到底あけないから」と云はれる。「さうですか」と云ふが早いか主人は普通の通り兩眼を開いて居た。主人はにや／＼笑ひながら「懸かりませぬな」

と云ふと甘木先生も同じく笑ひながら「え、懸りません」と云ふ。催眠術は遂に不成功に了る。甘木先生も歸る。

其次に來たのが——主人のうちへ此位客の來た事はない。交際の少ない主人の家にしては丸で嘘の様である。然し來たに相違ない。しかも珍客が來た。吾輩が此珍客の事を一言でも記述するのは單に珍客であるが爲ではない。吾輩は先刻申す通り大事件の餘瀾を描きつゝある。而して此珍客は此餘瀾を描くに方つて逸すべからざる材料である。何と云ふ名前か知らん、只顔の長い上に、山羊の様な髯を生やして居る四十前後の男と云へばよからう。迷亭の美學者たるに對して、吾輩は此男を哲學者と呼ぶ積りである。なぜ哲學者と云ふと、何も迷亭の様に自分で振り散らすからではない、只主人と對話する時の様子を拜見して居ると如何にも哲學者らしく思はれるからである。是も昔の同窓と見えて兩人共應對振りは至極打ち解けた有様だ。

「うん迷亭か、あれは池に浮いてる金魚鯨の様にふわ／＼してゐるね。先達て友人を連れて一面識もない華族の門前を通行した時、一寸寄つて茶でも飲んで行かうと云つて引つ張り込んださうだが随分香氣だね」

「夫でどうしたい」

「どうしたか聞いても見なかつたが、——さうさ、まあ天稟の奇人だらう、其代り考も何もない全く金魚鯨だ。鈴木か、——あれがくるのかい、へえ、あれは理窟はわからんが世間的には利口な男だ。金時計は下げられるたちだ。然し奥行きがないから落ちつきがなくつて駄目だ。圓滑圓滑と云ふが、圓滑の意味も何もわかりはせんよ。迷亭が金魚鯨ならあれは藁で括つた蒟蒻だね。たゞわるく滑かてぶる／＼振へて居る許りだ」

主人は此奇警な比喻を聞いて、大に感心したものらしく、久し振りでハ、と笑つた。

「そんなら君は何だい」

「僕か、さうさな僕なんかは——まあ自然薯位な所だらう。長くなつて泥の中に埋つてるさ」

「君は始終泰然として氣樂な様だが、羨ましいな」

「なに普通の人間と同じ様にして居る許りさ。別に羨まれるに足る程の事もない。只難有い事に人を羨む氣も起らんから、夫れ丈いゝね」

「會計は近頃豊かゝね」

「なに同じ事さ。足るや足らずさ。然し食ふて居るから大丈夫。驚かないよ」
「僕是不愉快で、肝癢が起つて堪らん。どつちを向いても不平許りだ」
「不平もいゝさ。不平が起つたら起して仕舞へば當分はいゝ心持ちになれる。人間は色々だから、さう自分の様に人にもなれと勧めたつて、なれるものではない。箸は人と同じ様に持たんと飯が食ひにくい、自分の麵麩は自分の勝手に切るのが一番都合がいゝ様だ。上手な仕立屋で着物物をこしらへれば、着たてから、からだに合つたのを持つてくるが、下手の裁縫屋に誂へたら當分は我慢しないと駄目さ。然し世の中はうまくしたもので、着て居るうちには洋服の方で、こちらの骨格に合はしてくるから。今の世に合ふ様に上等な両親が手際よく生んでくれゝば、それが幸福なのさ。然し出来損なつたら世の中に合はないで我慢するか、又は世の中で合はせる迄辛抱するより外に道はなからう」

「然し僕なんか、いつ迄立つても合ひさうにないぜ、心細いね」

「あまり合はない脊廣を無理にきると綻びる。喧嘩をしたり、自殺をしたり騒動が起るんだね。然し君なんか只面白くないと云ふ丈で自殺は無論しやせず、喧嘩だつて遣つた事はあるまい。まああゝ方だよ」

「所が毎日喧嘩ばかりしてゐるさ。相手が出て來なくつても怒つて居れば喧嘩だらう」

「成程一人喧嘩だ。面白いや、いくらでもやるがいゝ」

「それがいやになつた」

「そんならよすさ」

「君の前だが自分の心がそんなに自由になるものぢやない」

「まあ全體何がそんなに不平なんだい」

主人は是に於て落雲館事件を始めとして、今戸焼の狸から、びん助、きしやご其ほかあらゆる不平を擧げて滔々と哲學者の前に述べ立てた。哲學者先生はだまつて聞いて居たが、漸く口を開いて、かやうに主人に説き出した。

「びん助やきしやごが何を云つたつて知らん顔をして居ればいゝぢやないか。どうせ下らんのだから。中學の生徒なんか構ふ價値があるものか。なに妨害になる。だつて談判しても、喧嘩をしても其妨害はとれんのぢやないか。僕はさう云ふ點になると西洋人より昔しの日本人の方が餘

程えらいと思ふ。西洋人のやり方は積極的積極的と云つて近頃大分流行るが、あれは大なる缺點を持つて居るよ。第一積極的と云つたつて際限がない話した。いつ迄積極的にやり通したつて、満足と云ふ域とか完全と云ふ境にいけるものぢやない。向に檜があるだらう。あれが目障りになるから取り拂ふ。と其向ふの下宿屋が又邪魔になる。下宿屋を退去させると、其次の家が癢に觸る。どこ迄行つても際限のない話しさ。西洋人の遣り口はみんな是さ。ナポレオンでも、アレキサンダーでも勝つて満足したものは一人もないんだよ。人が氣に喰はん、喧嘩をする、先方が閉口しない、法庭へ訴へる、法庭で勝つ、夫で落着と思ふのは間違さ。心の落着は死ぬ迄焦つたつて片付く事があるものか。寡人政治がいかなから、代議政體にする。代議政體がいかなから、又何かにしたくなる。川が生意氣だつて橋をかける、山が氣に喰はんと云つて隧道を掘る。交通が面倒だと云つて鐵道を布く。夫で永久満足が出来るものぢやない。去ればと云つて人間だものど迄積極的に我意を通す事が出来るものか。西洋の文明は積極的、進取的かも知れないがつまり不満足で一生をくらす人の作つた文明さ。日本の文明は自分以外の状態を變化させて満足を求めるのぢやない。西洋と大に違ふ所は、根本的に周囲の境遇は動かすべからざるものと云ふ一大假定の下に發達して居るのだ。親子の關係が面白くないと云つて歐洲人の様に此關係を改良して落ち付きをとらうとするのではない。親子の關係は在來の儘で到底動かす事が出来んものとして、其關係の下に安心を求むる手段を講ずるにある。夫婦君臣の間柄も其通り、武士町人の區別も其通り、自然其物を觀るのも其通り。——山があつて隣國へ行かれなければ、山を崩すと云ふ考を起す代りに隣國へ行かんでも困らないと云ふ工夫をする。山を越さなくとも満足だと云ふ心持ちを養成するのだ。それだから君見給へ。禪家でも儒家でも屹度根本的に此問題をつらまへる。いくら自分がえらくても世の中は到底意の如くなるものではない、落日を回らす事も、加茂川を逆に流す事も出来ない。只出来るものは自分の心丈だからね。心さへ自由にする修業をしたら、落雲館の生徒がいくら騒いでも平氣なものではないか、今戸焼の狸でも構はんで居られさうなものだ。びん助なんか愚な事を云つたら此馬鹿野郎と澄まして居れば仔細なからう。何でも昔の坊主は人に斬り付けられた時電光影裏に春風を斬るとか、何とか洒落れた事を云つたと云ふ話だぜ。心の修業がつんで消極の極に達するとこんな靈活な作用が出来るのぢやないかしらん。僕なんか、そんな六づかしい事は分らないが、とにかく西洋人風の積極主義許りがいとと思ふのは少々誤ま

程えらいと思ふ。西洋人のやり方は積極的積極的と云つて近頃大分流行るが、あれは大なる缺點を持つて居るよ。第一積極的と云つたつて際限がない話した。いつ迄積極的にやり通したつて、満足と云ふ域とか完全と云ふ境にいけるものぢやない。向に檜があるだらう。あれが目障りになるから取り拂ふ。と其向ふの下宿屋が又邪魔になる。下宿屋を退去させると、其次の家が癢に觸る。どこ迄行つても際限のない話しさ。西洋人の遣り口はみんな是さ。ナポレオンでも、アレキサンダーでも勝つて満足したものは一人もないんだよ。人が氣に喰はん、喧嘩をする、先方が閉口しない、法庭へ訴へる、法庭で勝つ、夫で落着と思ふのは間違さ。心の落着は死ぬ迄焦つたつて片付く事があるものか。寡人政治がいかなから、代議政體にする。代議政體がいかなから、又何かにしたくなる。川が生意氣だつて橋をかける、山が氣に喰はんと云つて隧道を掘る。交通が面倒だと云つて鐵道を布く。夫で永久満足が出来るものぢやない。去ればと云つて人間だものど迄積極的に我意を通す事が出来るものか。西洋の文明は積極的、進取的かも知れないがつまり不満足で一生をくらす人の作つた文明さ。日本の文明は自分以外の状態を變化させて満足を求めるのぢやない。西洋と大に違ふ所は、根本的に周囲の境遇は動かすべからざるものと云ふ一大假定の下に發達して居るのだ。親子の關係が面白くないと云つて歐洲人の様に此關係を改良して落ち付きをとらうとするのではない。親子の關係は在來の儘で到底動かす事が出来んものとして、其關係の下に安心を求むる手段を講ずるにある。夫婦君臣の間柄も其通り、武士町人の區別も其通り、自然其物を觀るのも其通り。——山があつて隣國へ行かれなければ、山を崩すと云ふ考を起す代りに隣國へ行かんでも困らないと云ふ工夫をする。山を越さなくとも満足だと云ふ心持ちを養成するのだ。それだから君見給へ。禪家でも儒家でも屹度根本的に此問題をつらまへる。いくら自分がえらくても世の中は到底意の如くなるものではない、落日を回らす事も、加茂川を逆に流す事も出来ない。只出来るものは自分の心丈だからね。心さへ自由にする修業をしたら、落雲館の生徒がいくら騒いでも平氣なものではないか、今戸焼の狸でも構はんで居られさうなものだ。びん助なんか愚な事を云つたら此馬鹿野郎と澄まして居れば仔細なからう。何でも昔の坊主は人に斬り付けられた時電光影裏に春風を斬るとか、何とか洒落れた事を云つたと云ふ話だぜ。心の修業がつんで消極の極に達するとこんな靈活な作用が出来るのぢやないかしらん。僕なんか、そんな六づかしい事は分らないが、とにかく西洋人風の積極主義許りがいとと思ふのは少々誤ま

主人は痘痕面である。御維新前はあばたも大分流行つたものださうだが日英同盟の今日から見ると、斯んな顔は聊か時候後れの感がある。あばたの衰退は人口の増殖と反比例して近き將來には全く其迹を絶つに至るだらうとは醫學上の統計から精密に割り出されたる結論であつて、吾輩の如き猫と雖も毫も疑を挟む餘地のない程の名論である。現今地球上にあばたつ面を有して生息して居る人間は何人位あるか知らんが、吾輩が交際の區域内に於て打算して見ると、猫には一匹もない。人間にはたつた一人ある。而して其一人が即ち主人である。甚だ氣の毒である。吾輩は主人の顔を見る度に考へる。まあ何の因果でこんな妙な顔をして臆面なく二十世紀の空氣を呼吸して居るのだらう。昔なら少しは幅も利いたか知らんが、あらゆるあばたが二の腕へ立ち退きを命ぜられた昨今、依然として鼻の頭や頬の上へ陣取つて頑として動かないのは自慢にならんのみか、却つてあばたの體面に關する譯だ。出来る事なら今のうち取り拂つたらよささうな

九

主人は分つたとも、分らないとも言はずに聞いて居た。珍客が歸つたあとで書齋へ這入つて書物も讀まずに何か考へて居た。鈴木藤さんは金と衆とに従へと主人に教へたのである。甘木先生は催眠術で神經を沈めると助言したのである。最後の珍客は消極的の修養で安心を得ると説法したのである。主人がいづれを擇ぶかは主人の隨意である。只此儘では通されぬに極まつて居る。

つて居る様だ。現に君がいくら積極主義に働いたつて、生徒が君をひやかしくくるのをどうする事も出来ないぢやないか。君の權力であの學校を閉鎖するか、又は先方が警察に訴へる丈のわるい事をやれば格別だが、さもない以上は、どんなに積極的に出たつたて勝つてつこないよ。もし積極的になるとすれば金の問題になる。多勢に無勢の問題になる。換言すると君が金持に頭を下げなければならんと云ふ事になる。衆を恃む小供に恐れ入らなければならんと云ふ事になる。君の様な貧乏人でしかもたつた一人で積極的に喧嘩をしようとするのが抑も君の不平の種さ。どうだ分つたかい」

ものだ。あばた自身だつて心細いに違ひない。夫とも黨勢不振の際、誓つて落日を中天に挽回せ
 ずんば已まずと云ふ意氣込みで、あんなに横風に顔一面を占領して居るのか知らん。さうすると
 このあばたは決して輕蔑の意を以て視るべきものでない。滔々たる流俗に抗する萬古不磨の穴の
 集合體であつて、大に吾人の尊敬に値する凸凹と云つて宜しい。只きたならしいのが缺點である。
 主人の小供のときに牛込の山伏町に淺田宗伯と云ふ漢法の名醫があつたが、此老人が病家を見
 舞ふときには必ずかごに乗つてそり／＼と參られたさうだ。所が宗伯老が亡くなられて其養子
 の代になつたら、かごが忽ち人力車に變じた。だから養子が死んで其又養子が跡を續いたら葛根
 湯がアンチピリンに化けるかも知れない。かごに乗つて東京市中を練りあるくのは宗伯老の當時
 ですら餘り見つともいゝものでは無かつた。こんな眞似をして澄して居たものは舊弊な亡者と、
 汽車へ積み込まれる豚と、宗伯老とのみであつた。
 主人のあばたも其の振はざる事に於ては宗伯老のかごと一般で、はたから見ると氣の毒な位だ
 が、漢法醫にも劣らざる頑固な主人は依然として孤城落日のあばたを天下に曝露しつゝ毎日登校
 してリードルを教へて居る。

かくの如き前世紀の紀念を満面に刻して教壇に立つ彼は、其生徒に對して授業以外に大なる訓
 戒を垂れつゝあるに相違ない。彼は「猿が手持つ」を反覆するよりも「あばたの顔面に及ぼす
 影響」と云ふ大問題を造作もなく解釋して、不言の間に其答案を生徒に與へつゝある。もし主人
 の様な人間が教師として存在しなくなつた曉には彼等生徒は此問題を研究する爲めに圖書館若く
 は博物館へ馳けつけて、吾人がミイラに因つて埃及人を髣髴すると同程度の勞力を費やさねばな
 らぬ。是點から見ると主人の痘痕も冥々の裡に妙な功德を施こして居る。
 尤も主人は此功德を施こす爲に顔一面に疱瘡を種々付けたのではない。是でも實は種々疱瘡を
 したのである。不幸にして腕に種々たと思つたのが、いつの間にか顔へ傳染して居たのである。
 其頃は小供の事で今の様に色氣もなにもなかつたものだから、痒い／＼と云ひながら無暗に顔中
 引き搔いたのださうだ。丁度噴火山が破裂してラヴが顔の上を流れた様なもので、親が生んでく
 れた顔を臺なしにして仕舞つた。主人は折々細君に向つて疱瘡をせぬうちは玉の様な男子であつ
 たと云つて居る。淺草の觀音様で西洋人が振り反つて見た位綺麗だつた杯と自慢する事さへある。
 成程さうかも知れない。たゞ誰も保證人の居ないのが残念である。

ものだ。あばた自身だつて心細いに違ひない。夫とも黨勢不振の際、誓つて落日を中天に挽回せ
 ずんば已まずと云ふ意氣込みで、あんなに横風に顔一面を占領して居るのか知らん。さうすると
 このあばたは決して輕蔑の意を以て視るべきものでない。滔々たる流俗に抗する萬古不磨の穴の
 集合體であつて、大に吾人の尊敬に値する凸凹と云つて宜しい。只きたならしいのが缺點である。
 主人の小供のときに牛込の山伏町に淺田宗伯と云ふ漢法の名醫があつたが、此老人が病家を見
 舞ふときには必ずかごに乗つてそり／＼と參られたさうだ。所が宗伯老が亡くなられて其養子
 の代になつたら、かごが忽ち人力車に變じた。だから養子が死んで其又養子が跡を續いたら葛根
 湯がアンチピリンに化けるかも知れない。かごに乗つて東京市中を練りあるくのは宗伯老の當時
 ですら餘り見つともいゝものでは無かつた。こんな眞似をして澄して居たものは舊弊な亡者と、
 汽車へ積み込まれる豚と、宗伯老とのみであつた。
 主人のあばたも其の振はざる事に於ては宗伯老のかごと一般で、はたから見ると氣の毒な位だ
 が、漢法醫にも劣らざる頑固な主人は依然として孤城落日のあばたを天下に曝露しつゝ毎日登校
 してリードルを教へて居る。

いくら功德になつても訓戒になつても、きたない者は矢つ張りきたないものだから、物心がついで以來と云ふもの主人は大にあばたに就て心配し出して、あらゆる手段を盡して此醜態を揉み潰さうとした。所が宗伯老のかごと違つて、いやになつたからと云ふてさう急に打ちやられるものではない。今だに歴然と残つて居る。此歴然が多少氣にかゝると見えて、主人は往來をあるく度毎にあばた面を勘定してあるくさうだ。今日何人あばたに出逢つて、其主は男か女か、其場所は小川町の勸工場であるか、上野の公園であるか、悉く彼の日記につけ込んである。彼はあばたに關する智識に於ては決して誰にも譲るまいと確信して居る。先達である洋行歸りの友人が来た折なぞは「君西洋人にはあばたがあるかな」と聞いた位だ。すると其友人が「さうだな」と首を曲げながら餘程考へたあとで「まあ滅多にないね」と云つたら、主人は「滅多になくつても、少しはあるかい」と念を入れて聞き返へした。友人は氣のない顔で「あつても乞食か立ん坊だよ。教育のある人にはない様だ」と答へたら、主人は「さうかなあ、日本とは少し違ふね」と云つた。哲學者の意見によつて落雲館との喧嘩を思ひ留つた主人は其後書齋に立て籠つてしきりに何か考へて居る。彼の忠告を容れて靜坐の裡に靈活なる精神を消極的に修養する積かも知れないが、

元來が氣の小さな人間の癖に、あゝ陰氣な懷手許りして居ては碌な結果の出様筈がない。夫より英書でも質に入れて藝者から喇叭節でも習つた方が遙かにましだと迄は氣が付いたが、あんな偏屈な男は到底猫の忠告杯を聴く氣遣はないから、まあ勝手にさせたらよからうと五六日は近寄りもせず暮らした。

今日はあれから丁度七日目である。禪家杯では一七日を限つて大悟して見せる杯と凄じい勢で結跏する連中もある事だから、うちの主人もどうかなたらう、死ぬか生きるか何とか片付いたらうと、のぞく椽側から書齋の入口迄來て室内の動靜を偵察に及んだ。

書齋は南向きの六疊で、日當りのいゝ所に大きな机が据ゑてある。只大きな机ではわかるまい。長さ六尺、幅三尺八寸高さ之に叶ふと云ふ大きな机である。無論出來合のものではない。近所の建具屋に談判して寢臺兼机として製造せしめたる稀代の品物である。何の故にこんな大きな机を新調して、又何の故に其上に寝て見様杯といふ了見を起したのか、本人に聞いて見ない事だから頗とわからない。ほんの一時の出來心で、かゝる難物を擔ぎ込んだのかも知れず、或はことによると一種の精神病者に於て吾人が屢見出す如く、縁もゆかりもない二個の觀念を連想して、

を分けるときにも此鏡を用ゐる。——主人の様な男が髪を分けるのかと聞く人もあるかも知れぬが、實際彼は他の事に無精なる丈其丈頭を叮嚀にする。吾輩が當家に参加してから今に至る迄主人は如何なる炎熱の日と雖五分刈に刈り込んだ事はない。必ず二寸位の長さにして、それを御大さうに左の方で分けるのみか、右の端を一寸跳ね返して澄して居る。是も精神病の徴候かも知れない。こんな氣取つた分け方は此机と一向調和しないと思ふが、敢て他人に害を及ぼす程の事でないから、誰も何とも云はない。本人も得意である。分け方のハイカラなのは措いて、なぜあんなに髪を長くするのかと思つたら實はかう云ふ譯である。彼のあばたは單に彼の顔を侵蝕せるのみならず、とくの昔に脳天迄食ひ込んで居るのださうだ。だから若し普通の人の様に五分刈や三分刈にすると、短かい毛の根本から何十となくあばたがあらはれてくる。いくら撫でも、さすつてもぼつ／＼がとれない。枯野に螢を放つた様なもので風流かも知れないが、細君の御意に入らんのは勿論の事である。髪さへ長くして置けば露見しないで済む所を、好んで自己の非を曝くにも當らぬ譯だ。ならう事なら顔迄毛を生やして、こつちのあばたも内済にしたい位な所だから、只で生える毛を錢を出して刈り込ませて、私は頭蓋骨の上迄天然痘にやられましたよと吹

机と寢臺を勝手に結び付けたものかも知れない。兎に角奇抜な考へである。只奇抜丈で役に立たないのが缺點である。吾輩は嘗て主人が此机の上へ晝寐をして寢返りをする拍子に椽側へ轉げ落ちたのを見た事がある。其以來此机は決して寢臺に轉用されない様である。机の前には薄つぺらなメリンスの座布團があつて、烟草の火で焼けた穴が三つ程かたまつて居る中から見える綿は薄黒い。此座布團の上へ後向きにかしこまつて居るのが主人である。鼠色によくれた兵兒帯をこま結びにむすんだ左右がだらりと足の裏へ垂れかゝつて居る。此帯へじやれ付いて、いきなり頭を張られたのは此間の事である。滅多に寄り付くべき帯ではない。まだ考へて居るのか下手の考と云ふ喻もあるのにと後ろから覗き込んで見ると、机の上でいやにびか／＼と光つたものがある。吾輩は思はず、續け様に二三度瞬をしたが、こいつは變だともまぶしいのを我慢して眠と光るものを見詰めてやつた。すると此光りは机の上で動いて居る鏡から出るものだと云ふ事が分つた。然し主人は何の爲めに書齋で鏡杯を振り舞はして居るのであらう。鏡と云へば風呂場にあるに極まつてゐる。現に吾輩は今朝風呂場で此鏡を見たのだ。此鏡ととくに云ふのは主人のうちには是より外に鏡はないからである。主人が毎朝顔を洗つたあとで髪

聴する必要はあるまい。——是が主人の髪を長くする理由で、髪を長くするのが、彼の髪をわけ
る原因で、其の原因が鏡を見る譯で、其鏡が風呂場にある所以で、而して其鏡が一つしかない
云ふ事實である。

風呂場にあるべき鏡が、しかも一つしかない鏡が書齋に来て居る以上は鏡が離魂病に罹つたの
か又は主人が風呂場から持つて来たに相違ない。持つて来たとすれば何の爲めに持つて来たのだ
らう。或は例の消極的修養に必要な道具かも知れない。昔し或る學者が何とかいふ智識を訪ふた
ら、和尚兩肌を抜いで鞭を磨して居られた。何をこしらへなさんと質問をしたら、なにさ今鏡を
造らうと思ふて一生懸命にやつて居る所ぢやと答へた。そこで學者は驚ろいて、なんぼ名僧でも
鞭を磨して鏡とする事は出来まいと云ふたら、和尚からくく笑ひながら左様か、夫れぢややめ
よ、いくら書物を読んでも道はわからぬのもそんなものぢやろと罵つたと云ふから、主人もそん
な事を聞き嚙つて風呂場から鏡でも持つて来て、したり顔に振り廻してゐるのかも知れない。大
分物騒になつて来たなと、そつと窺つて居る。

かくとも知らぬ主人は甚だ熱心なる容子を以て一張來の鏡を見詰めて居る。元來鏡といふもの

は氣味の悪いものである。深夜蠟燭を立て、廣い部屋の中で一人鏡を覗き込むには餘程の勇
氣が入るさうだ。吾輩杯は始めて當家の令嬢から鏡を顔の前へ押し付けられた時に、はつと仰天
して屋敷のまはりを三度駆け回つた位である。如何に白晝と雖ども、主人の様にかく一生懸命に
見詰めてゐる以上は自分で自分の顔が怖くなるに相違ない。只見てさへあまり氣味のいゝ顔ぢや
ない。稍あつて主人は「成程きたない顔だ」と獨り言を云つた。自己の醜を自白するのは中々見
上げたものだ。様子から云ふと慥に氣違の所作だが言ふことは眞理である。是がもう一歩進むと、
己れの醜惡な事が怖くなる。人間は吾身が怖ろしい惡黨であると云ふ事實を徹骨徹髓に感じた者
でないとは苦勞人とは云へない。苦勞人でないと到底解脱は出来ない。主人もこゝ迄来たらずでに
「おゝ怖い」とでも云ひさうなものであるが中々云はない。「成程きたない顔だ」と云つたあと
で、何を考へ出したか、ぶうつと頬つぺたを膨らました。さうしてふくれた頬つぺたを平手で二
三度叩いて見る。何のまじないだか分らない。此時吾輩は何だか此顔に似たものがあるらしいと
云ふ感じがした。よくよく考へて見ると夫れは御三の顔である。序でだから御三の顔を一寸紹介
するが、それはくふくれたものである。此間さる人が穴守稻荷から河豚の提灯をみやげに持つ

て来てくれたが、丁度あの河豚提灯の様にふくれて居る。あまりふくれ方が残酷なので眼は両方共紛失して居る。尤も河豚のふくれるのは萬遍なく眞丸にふくれるのだが、お三とくると、元來の骨格が多角性であつて、其骨格通りにふくれ上がるのだから、丸で水氣になやんで居る六角時計の様なものだ。御三が聞いたら嘸怒るだらうから、御三は此位にして又主人の方に歸るが、かくの如くあらん限りの空氣を以て頬つぺたをふくらませたる彼は前申す通り手のひらで頬つぺたを叩きながら「此位皮膚が緊張するとあばたも眼につかん」と又獨り語をいつた。

こんどは顔を横に向けて半面に光線を受けた所を鏡にうつして見る。「かうして見ると大變目立つ。矢つ張りまともに日の向いてる方が平に見える。奇體な物だなあ」と大分感心した様子であつた。それから右の手をうんと伸して、出来る丈鏡を遠距離に持つて行つて靜かに熟視してゐる。「此位離れるとそんなでもない。矢張り近過ぎるといかん。――顔許りぢやない何でもそんなものだ」と悟つた様なことを云ふ。次に鏡を急に横にした。さうして鼻の根を中心にして眼や額や眉を一度に此中心に向つてくしやく／＼とあつめた。見るからに不愉快な容貌が出来上つたと思つたら「いや是は駄目だ」と當人も氣がついたと見えて早々やめて仕舞つた。「なぜこんな

毒々しい顔だらう」と少々不審の體で鏡を眼を去る三寸許りの所へ引き寄せる。右の人指しゆびで小鼻を撫で、撫でた指の頭を机の上にあつた吸取り紙の上へ、うんと押しつける。吸ひ取られた鼻の膏が丸く紙の上へ浮き出した。色々な藝をやるものだ。それから主人は鼻の膏を塗抹した指頭を轉じてぐいと右眼の下瞼を裏返して、俗に云ふべつかんこうを見事にやつて退けた。あばたを研究して居るのか、鏡と睨め鏡をして居るのか其邊は少々不明である。氣の多い主人の事だから見て居るうちに色々になると見える。それどころではない。若し善意を以て蒞蕩問答的に解釋してやれば主人は見性自覺の方便として斯様に鏡を相手に色々な仕草を演じて居るのかも知れない。凡て人間の研究と云ふものは自己を研究するのである。天地と云ひ山川と云ひ日月と云ひ星辰と云ふも皆自己の異名に過ぎぬ。自己を描いて他に研究すべき事項は誰人にも見出し得ぬ譯だ。若し人間が自己以外に飛び出す事が出来たら、飛び出す途端に自己はなくなつて仕舞ふ。而も自己の研究は自己以外に誰もしてくれぬ者はない。いくら仕てやりたくても、貰ひたくても、出来ない相談である。夫だから古來の豪傑はみんな自力で豪傑になつた。人の御蔭で自己が分る位なら、自分の代理に牛肉を喰はして、堅いか柔かいか判断の出来る譯だ。朝に法を聴き、夕に

て来てくれたが、丁度あの河豚提灯の様にふくれて居る。あまりふくれ方が残酷なので眼は両方共紛失して居る。尤も河豚のふくれるのは萬遍なく眞丸にふくれるのだが、お三とくると、元來の骨格が多角性であつて、其骨格通りにふくれ上がるのだから、丸で水氣になやんで居る六角時計の様なものだ。御三が聞いたら嘸怒るだらうから、御三は此位にして又主人の方に歸るが、かくの如くあらん限りの空氣を以て頬つぺたをふくらませたる彼は前申す通り手のひらで頬つぺたを叩きながら「此位皮膚が緊張するとあばたも眼につかん」と又獨り語をいつた。

こんどは顔を横に向けて半面に光線を受けた所を鏡にうつして見る。「かうして見ると大變目立つ。矢つ張りまともに日の向いてる方が平に見える。奇體な物だなあ」と大分感心した様子であつた。それから右の手をうんと伸して、出来る丈鏡を遠距離に持つて行つて靜かに熟視してゐる。「此位離れるとそんなでもない。矢張り近過ぎるといかん。――顔許りぢやない何でもそんなものだ」と悟つた様なことを云ふ。次に鏡を急に横にした。さうして鼻の根を中心にして眼や額や眉を一度に此中心に向つてくしやく／＼とあつめた。見るからに不愉快な容貌が出来上つたと思つたら「いや是は駄目だ」と當人も氣がついたと見えて早々やめて仕舞つた。「なぜこんな

道を聴き、梧前燈下に書卷を手にするのは皆此自證を挑撥するの方便の具に過ぎぬ。人の説く法のうち、他の辯ずる道のうち、乃至は五車にあまる蠶紙堆裏に自己が存在する所以がない。あれば自己の幽霊である。尤もある場合に於て幽霊は無霊より優るかも知れない。影を追へば本體に逢着する時がないとも限らぬ。多くの影は大抵本體を離れぬものだ。此意味で主人が鏡をひねくつて居るなら大分話せる男だ。エピクテタス杯を鵝呑にして學者ぶるよりも遙かにまじだと思ふ。鏡は己惚の醸造器である如く、同時に自慢の消毒器である。もし浮華虚榮の念を以て之に對する時は是程愚物を煽動する道具はない。昔から増上慢を以て己を害したを戒ふた事蹟の三分の二は慥かに鏡の所作である。佛國革命の當時物好きな御醫者さんが改良首きり器械を發明して飛んだ罪をつくつた様に、始めて鏡をこしらへた人も定めし寐覺のわるい事だらう。然し自分に愛想の盡きかけた時、自我の萎縮した折は鏡を見る程樂になる事はない。妍醜瞭然だ。こんな顔でよくまあ人で候と反りかへつて今日迄暮らされたものだと氣がつくにきまつて居る。そこへ氣がついた時が人間の生涯中尤も難有い期節である。自分で自分の馬鹿を承知して居る程尊とく見え事はない。此自覺性馬鹿の前にはあらゆるえらがり屋が悉く頭を下げた恐れ入らねばならぬ。

當人は昂然として吾を輕侮嘲笑して居る積りでも、こちらから見ると其昂然たる所が恐れ入つて頭を下げ居る事になる。主人は鏡を見て己れの愚を悟る程の賢者ではあるまい。然し吾が顔に印せられる痘痕の銘位は公平に讀み得る男である。顔の醜いのを自認するのは心の賤しきを會得する楷梯にもならう。頼母しい男だ。是も哲學者から遣り込められた結果かも知れぬ。

斯様に考へながら猶様子をかゞつてゐると、夫とも知らぬ主人は思ふ存分あかんべえをしたあとで「大分充血して居る様だ。矢つ張り慢性結膜炎だ」と言ひながら、人さし指の横つらでぐいぐい充血した臉をこすり始めた。大方痒いのだらうけれども、只さへあんなに赤くなつて居るものを、かう擦つてはたまるまい。遠からぬうちに鹽鯛の眼玉の如く腐爛するにきまつてる。やがて眼を開いて鏡に向つた所を見ると、果せるかなどんよりとして北國の冬空の様になつて居た。尤も平常からあまり晴れくしい眼ではない。誇大な形容詞を用ゐると混沌として黒眼と白眼が割判しない位漠然として居る。彼の精神が朦朧として不得要領底に一貫して居る如く、彼の眼も曖々然昧々然として長へに眼窩の奥に漂ふて居る。是は胎毒の爲だとも云ふし、或は疱瘡の餘波だとも解釋されて、小さい時分はだいぶ柳の虫や赤蛙の厄介になつた事もあるさうだが、折角母

道を聴き、梧前燈下に書卷を手にするのは皆此自證を挑撥するの方便の具に過ぎぬ。人の説く法のうち、他の辯ずる道のうち、乃至は五車にあまる蠶紙堆裏に自己が存在する所以がない。あれば自己の幽霊である。尤もある場合に於て幽霊は無霊より優るかも知れない。影を追へば本體に逢着する時がないとも限らぬ。多くの影は大抵本體を離れぬものだ。此意味で主人が鏡をひねくつて居るなら大分話せる男だ。エピクテタス杯を鵝呑にして學者ぶるよりも遙かにまじだと思ふ。鏡は己惚の醸造器である如く、同時に自慢の消毒器である。もし浮華虚榮の念を以て之に對する時は是程愚物を煽動する道具はない。昔から増上慢を以て己を害したを戒ふた事蹟の三分の二は慥かに鏡の所作である。佛國革命の當時物好きな御醫者さんが改良首きり器械を發明して飛んだ罪をつくつた様に、始めて鏡をこしらへた人も定めし寐覺のわるい事だらう。然し自分に愛想の盡きかけた時、自我の萎縮した折は鏡を見る程樂になる事はない。妍醜瞭然だ。こんな顔でよくまあ人で候と反りかへつて今日迄暮らされたものだと氣がつくにきまつて居る。そこへ氣がついた時が人間の生涯中尤も難有い期節である。自分で自分の馬鹿を承知して居る程尊とく見え事はない。此自覺性馬鹿の前にはあらゆるえらがり屋が悉く頭を下げた恐れ入らねばならぬ。

親の丹精も、あるに其甲斐あらばこそ、今日迄生れた當時の儘でぼんやりして居る。吾輩ひそかに思ふに此状態は決して胎毒や痲瘡の爲ではない。彼の眼玉が斯様に晦澁濁濁の悲境に彷徨して居るのは、とりも直さず彼の頭腦が不透不明の實質から構成されてゐて、其作用が暗澹溟濛の極に達して居るから、自然とこれが形體の上にはあらはれて、知らぬ母親に入らぬ心配を掛けただらう。烟たつて火あるを知り、まなこ濁つて愚なるを證す。して見ると彼の眼は彼の心の象徴で、彼の心は天保錢の如く穴があいて居るから、彼の眼も亦天保錢と同じく、大きな割合に通用しないに違ない。

今度は髻をねぢり始めた。元來から行儀のよくない髻でみんな思ひ思ひの姿勢をとつて生えて居る。いくら個人主義が流行る世の中だつて、かう町々に我儘を盡くされては持主の迷惑は左こそと思ひやられる、主人もこゝに鑑みる所あつて近頃は大に訓練を興へて、出來得る限り系統的に按排する様に盡力して居る。其熱心の功果は空しからずして昨今漸く歩調が少しとふ様になつて來た。今迄は髻が生えて居つたのであるが、此頃は髻を生やして居るのだと自慢する位になつた。熱心は成效の度に應じて鼓舞せられるものであるから、吾が髻の前途有望なりと見てと

つた主人は朝な夕な、手がすいて居れば必ず髻に向つて鞭撻を加へる。彼のアムビションは獨逸皇帝陛下の様に、向上の念の熾な髻を蓄へるにある。それだから毛孔が横向であらうとも、下向であらうとも聊か頓着なく十把一とからげに握つては、上の方へ引つ張り上げる。髻も嘸かし難儀であらう、所有主たる主人すら時々は痛い事もある。がそこが訓練である。否でも應でもさかに扱き上げる。門外漢から見ると氣の知れない道樂の様であるが、當局者又は至當の事と心得て居る。教育者が徒らに生徒の本性を撓めて、僕の手柄を見給へと誇る様なもので毫も非難すべき理由はない。

主人が滿腔の熱誠を以て髻を訓練して居ると、臺所から多角性の御三が郵便が参りましたと、例の如く赤い手をぬつと書齋の中へ出した。右手に髻をつかみ、左手に鏡を持った主人は、其儘入口の方を振りかへる。八の字の尾に逆か立ちを命じた様な髻を見るや否や御多角はいきなり臺所へ引き戻して、ハ、ハ、ハ、と御釜の蓋へ身をもたして笑つた。主人は平氣なものである。悠々と鏡を卸して郵便を取り上げた。第一信は活版すりで何だかいかめしい文字が並べてある。讀んで見ると

拜啓 愈 御多祥 奉 賀 候 回顧 すれば 日露の 戦役は 連戦連勝の 勢に乗じて 平和克復を 告げ 吾忠勇義烈なる 將士は今や 過半萬歳聲裡に 凱歌を奏し 國民の 歡喜何ものか 之に若かん 曩に 宣 戦の大詔 煥發せらるゝや 義勇公に 奉じたる 將士は 久しく 萬里の 異境に 在りて 克く 寒暑の 苦難 を 忍び 一意 戰鬥に 従事し 命を 國家に 捧げたるの 至誠は 永く 銘して 忘るべからざる 所なり 而して 軍隊の 凱旋は 本月を 以て 殆んど 終了を 告げんとす 依つて 本會は 來る 二十五日 を 期し 本區内 一千有餘の 出征 將校 下士卒に 對し 本區民 一般を 代表し 以て 一大 凱旋祝賀會を 開催し 兼て 軍 人遺族を 慰藉せんが 爲め 熱誠之を 迎へ 聊 感謝の 微衷を表し 度就ては 各位の 御協賛を 仰ぎ 此 盛典を 舉行するの 幸を得ば 本會の 面目 不過之と 存候間 何卒 御贊成 奮つて 義捐あらんことを 只管 希望の 至に 堪へず 候 敬具

とあつて 差し出し 人は 華族様である。主人は 默讀一過の後 直ちに 封の中へ 卷き納めて 知らん顔を して居る。義捐杯は 恐らく しさうにない。先達て 東北凶作の 義捐金を 二圓とか 三圓とか 出して 逢ふ人毎に 義捐をとられた、とられたと 吹聴して 居る位である。義捐とある 以上は 差し出すもので、とられるものでないには 極つて 居る。泥棒にあつたのではあるまいし、とられたとは不

穩當である。然るにも 關せず、盜難に ても 罹つたかの 如くに 思つて 居るらしい 主人が 如何に 軍隊の 歡迎だと云つて、如何に 華族様の 勸誘だと云つて、強談で 持ちかけたらいざ 知らず、活版の 手紙 位で 金銭を出す 様な 人間とは 思はれない。主人から云へば 軍隊を 歡迎する前に 先づ 自分を 歡迎し たいのである。自分を 歡迎した 後なら 大抵のものは 歡迎し さいうであるが、自分が 朝夕に 差し支へ る間は、歡迎は 華族様に 任せて 置了見らしい。主人は 第二信を取り上げたが「ヤ、是も 活版だ」と云つた。

時下 秋冷の 候に 候處 貴家 益々 御隆盛の 段 奉賀上 候陳れば 本校儀も 御承知の 通り 一昨々 年 以來 二三 野心家の 爲めに 妨げられ 一時 其極に 達し 候得共 是れ 皆不肖 針作が 足らざる 所に 起因 すと 存じ 深く 自ら 警むる 所あり 臥薪嘗膽 其の 苦辛の 結果 漸く 茲に 獨力以て 我が 理想に 適する だけの 校舍 新築費を得るの 途を 講じ 候其は 別義にも 御座なく 別冊 裁縫 祕術 綱要と 命名せる 書 冊出版の 義に 御座候 本書は 不肖 針作が 多年 苦心 研究せる 工藝上の 原理 原則に 法と 眞に 肉を 裂き 血を 絞るの 思を 爲して 著述せるもの に 御座候 因つて 本書を 普く 一般の 家庭へ 製本 實費に 些少の 利潤を 附して 御購求を 願ひ 一面 斯道 發達の 一助となすと 同時に 又一面には 僅少の 利潤

を蓄積して校舎建築費に當つる心算に御座候依つては近頃何共恐縮の至りに存じ候へども本校建築費中へ御寄附被成下と御思召し茲に呈供仕候秘術綱要一部を御購求の上御侍女の方へなりとも御分與被成下候て御贊同の意を御表章被成下度伏して懇願仕候勿々敬具

大日本女子裁縫最高等大學院

校長 縫田 針作 九拜

とある。主人は此鄭重なる書面を、冷淡に丸めてぼんと屑籠の中へ抛り込んだ。折角の針作君の九拜も臥薪嘗膽も何の役にも立たなかつたのは氣の毒である。第三信にかゝる。第三信は頗る風變りの光彩を放つて居る。状袋が紅白のだんだらで、飴ん棒の看板の如くはなやかなる真中に珍野苦沙彌先生虎皮下と八分體で肉太に認めてある。中からお太さんが出るかどうだか受け合はな

いが表丈は頗る立派なものだ。
若し我を以て天地を律すれば一口にして西江の水を吸ひつくすべく、若し天地を以て我を律すれば我は則ち陌上の塵のみ。すべからく道へ、天地と我と什麼の交渉がある。……始め

すべし。海鼠を食へるものは親鸞の再來にして、河豚を喫せるものは日蓮の分身なり。苦沙彌先生の如きに至つては只干瓢の酢味噌を知るのみ。干瓢の酢味噌を食つて天下の士たるものは、われ未だ之を見ず。……
親友も汝を賣るべし。父母も汝に私あるべし。愛人も汝を棄つべし。富貴は固より頼みがたかるべし。爵祿は一朝にして失ふべし。汝の頭中に祕藏する學問には儼が生えるべし。汝何を恃まんとするか。天地の裡に何をたのまんとするか。神？
神は人間の苦しまぎれに捏造せる土偶のみ。人間のせつな糞の凝結せる臭骸のみ。恃むまじきを恃んで安しと云ふ。咄々、醉漢漫りに胡亂の言辭を弄して、蹣跚として墓に向ふ。油盡きて燈自ら滅す。業盡きて何物をか遺す。苦沙彌先生よろしく御茶でも上がれ。……
人を人と思はざれば畏るゝ所なし。人を人と思はざるものが、吾を吾と思はざる世を憤るは如何。權貴榮達の士は人を人と思はざるに於て得たるが如し。只他の吾を吾と思はぬ時に於て怫然として色を作す。任意に色を作し來れ。馬鹿野郎。……
吾の人を人と思ふとき、他の吾を吾と思はぬ時、不平家は發作的に天降る。此發作的活動

を名づけて革命といふ。革命は不平家の所爲にあらず。權貴榮達の士が好んで産する所なり。朝鮮に人參多し先生何が故に服せざる。

在巢鴨 天道公平再拜

針作君は九拜であつたが、此男は單に再拜丈である。寄附金の依頼でない丈に七拜程横風に構へて居る。寄附金の依頼ではないが其代り頗る分りにくいものだ。どこの雑誌へ出しても没書になる價値は充分あるのだから、頭腦の不透明を以て鳴る主人は必ず寸断々に引き裂いて仕舞ふだらうと思の外、打ち返し讀み直して居る。こんな手紙に意味があると考へて、飽く迄其意味を究めやうといふ決心かも知れない。凡そ天地の間にわからんものは澤山あるが意味をつけてつかないものは一つもない。どんなむづかしい文章でも解釋しやうとすれば容易に解釋の出来るものだ。人間は馬鹿であると云はうが、人間は利口であると云はうが手もなくわかる事だ。夫所ではない。人間は犬であると云つても豚であると云つても別に苦しむ程の命題ではない。山は低いと云つても構はん、宇宙は狭いと云つても差し支はない。烏が白くて小町が醜婦で苦沙彌先生が君子でも通らん事はない。だからこんな無意味な手紙でも何とか蚊とか蚊とか理窟さへつければどう

とも意味はとれる。ことに主人の様に知らぬ英語を無理矢理にこぢ附けて説明し通して來た男は猶更意味をつけたがるのである。天氣の悪いのに何故グード、モーニングですかと生徒に問はれて七日間考へたり、コロンバスと云ふ名は日本語で何と云ひますかと聞かれて三日三晩かゝつて答を工夫する位な男には、干瓢の酢味噌が天下の士であらうと、朝鮮の仁參を食つて革命を起さうと隨意な意味は隨處に湧き出る譯である。主人は暫らくしてグード、モーニング流に此難解の言句を呑み込んだと見えて「中々意味深長だ。何でも餘程哲理を研究した人に違ない。天晴な見識だ」と大變賞賛した。此一言でも主人の愚な所はよく分るが、翻つて考へて見ると聊か尤もな點もある。主人は何に寄らずわからぬものを難有がる癖を有して居る。是はあながち主人に限つた事でもなからう。分らぬ所には馬鹿に出來ないものが潜伏して、測るべからざる邊には何だか氣高い心持が起るものだ。夫だから俗人はわからぬ事をわかつた様に吹聴するにも係らず、學者はわかつた事をわからぬ様に講釋する。大學の講義でもわからん事を喋舌る人は評判がよくつてわかる事を説明する者は人望がないのでもよく知れる。主人が此手紙に敬服したのも意義が明瞭であるからではない。其主旨が那邊に存するか殆んど捕へ難いからである。急に海鼠が出て來

たり、せつな糞が出てくるからである。だから主人が此文章を尊敬する唯一の理由は、道家で道徳經を尊敬し、儒家で易經を尊敬し、禪家で臨濟録を尊敬すると一般で全く分らんからである。但し全然分らんでは氣が済まんから勝手な註釋をつけてわかつた顔丈はする。わからんものをわかつた積りで尊敬するのは昔から愉快なものである。——主人は恭しく八分體の名筆を巻き納めて、之を机上に置いた儘、懷手をして冥想到に沈んで居る。

所へ「頼む／＼」と支關から大きな聲で案内を乞ふ者がある。聲は迷亭の様だが、迷亭に似合はずしきりに案内を頼んで居る。主人は先から書齋のうちで其聲を聞いて居るのだが、懷手の儘毫も動かうとしない。取次に出るのは主人の役目でないといふ主義か、此主人は決して書齋から挨拶をした事がない。下女は先刻洗濯石鹼を買ひに出た。細君は憚りである。すると取次に出べきものは吾輩丈になる。吾輩だつて出るのはいやだ。すると客人は沓脱から敷臺へ飛び上がつて障子を開け放つてつか／＼上り込んで来た。主人も主人だが客も客だ。座敷の方へ行つたなと思ふと襖を二三度あけたり閉てたりして、今度は書齋の方へやつてくる。

「おい冗談ぢやない。何をして居るんだ、御客さんだよ」

「おや君か」

「おや君かもないもんだ。そこに居るなら何とか云へばいゝのに、丸で空家の様ぢやないか」

「うん、ちと考へ事があるもんだから」

「考へて居たつて通れ位は云へるだらう」

「云へん事もないさ」

「相變らず度胸がいゝね」

「先達から精神の修養を力めて居るんだもの」

「物好きだな。精神を修養して返事が出来なくなつた日には來客は御難だね。そんなに落ち付かれちや困るんだぜ。實は僕一人來たんぢやないよ。大變な御客さんを連れて來たんだよ。一寸出て逢つて呉れ給へ」

「誰を連れて來たんだい」

「誰でもいゝから一寸出て逢つてくれ玉へ。是非君に逢ひたいと云ふんだから」

「誰だい」

「誰でもいゝから立ち玉へ」

主人は懐手の儘ぬつと立ちながら「又人を擔ぐ積りだらう」と椽側へ出て何の氣もつかず客間へ這入り込んだ。すると六尺の床を正面に一個の老人が肅然と端坐して控へて居る。主人は思はず懐から両手を出してべたりと唐紙の傍へ尻を片づけて仕舞つた。是では老人と同じく西向きであるから雙方共挨拶の仕様がな。昔堅氣の人は禮義はやかましいものだ。

「さあどうぞあれへ」と床の間の方を指して主人を促がす。主人は兩三年前迄は座敷はどこへ坐つても構はんものと心得て居たのだが、其後ある人から床の間の講釋を聞いて、あれは上段の間の變化したもので、上使が坐はる所だと悟つて以來決して床の間へは寄りつかない男である。ことに見えず知らずの年長者が頑と構へて居るのだから上座所ではない。挨拶さへ碌には出来ない。一應頭をさげて

「さあどうぞあれへ」と向ふの云ふ通りを繰り返した。

「いや夫では御挨拶が出来かねますから、どうぞあれへ」

「いえ、夫では……どうぞあれへ」と主人はいゝ加減に先方の口上を眞似て居る。

「どうもさう、御謙遜では恐れ入る。却つて手前が痛み入る。どうか御遠慮なく、さあどうぞ」

「御謙遜では……恐れますから……どうか」主人は眞赤になつて口をもごご云はせて居る。

精神修養もあまり効果がない様である。迷亭君は襖の影から笑ひながら立見をして居たが、もういゝ時分だと思つて、後ろから主人の尻を押しやりながら

「まあ出玉へ。さう唐紙へくつついては僕が坐る所がない。遠慮せずに前へ出たまへ」と無理に割り込んでくる。主人は已を得ず前の方へすり出る。

「苦沙彌君是が毎々君に噂をする靜岡の伯父だよ。伯父さん是が苦沙彌君です」

「いや始めて御目にかゝります、毎度迷亭が出て御邪魔を致すさうで、いつか參上の上御高話を拜聴致さうと存じて居りました所、幸ひ今日は御近所を通行致したもので、御禮旁伺つた譯で、どうぞ御見知り置かれまして今後共宜しく」と昔し風な口上を淀みなく述べた。主人は交際の狭い、無口な人間である上に、こんな古風な爺さんとは殆んど出會つた事がないのだから、最初から多少場うての氣味で辟易して居た所へ、滔々と浴びせかけられたのだから、朝鮮仁參も飴ん棒の状袋もすつかり忘れて仕舞つて只苦し紛れに妙な返事をする。

あるのでわざ／＼静岡から出て来てね、今日一所に上野へ出掛けたんだが今其歸りがけなんだよ。夫だから此通り先日僕が白木屋へ注文したフロックコートを着て居るのさ」と注意する。成程フロックコートを着て居る。フロックコートは着て居るがすこしもからだに合はない。袖が長過ぎて、襟がおつ開いて、脊中へ池が出来て、腋の下が釣るし上がつて居る。いくら不恰好に作らうと云つたつて、かう迄念を入れて形を崩す譯にはゆかないだらう。其上白シャツと白襟が離れ離れになつて、仰むくと間から咽喉佛が見える。第一黒い襟飾りが襟に屬して居るのか、シャツに屬して居るのか判然しない。フロックはまだ我慢が出来るが白髪のチョン髷は甚だ奇観である。評判の鐵扇はどうかと目を注げると膝の横にちやんと引きつけて居る。主人は此時漸く本心に立ち返つて、精神修養の結果を存分に老人の服装に應用して少々驚いた。まさか迷亭の話程ではなからうと思つて居たが、逢つて見ると話以上である。もし自分のあばたが歴史的の研究の材料になるならば、此老人のチョン髷や鐵扇は慥かにそれ以上の價値がある。主人はどうかして此鐵扇の由来を聞いて見たいと思つたが、まさか、打ちつけに質問する譯には行かず、と云つて話を途切らすのも禮に缺けると思つて

「私も……私も……一寸伺がう筈でありました所……何分よろしく」と云ひ終つて頭を少々疊から上げて見ると老人は未だに平伏して居るので、はつと恐縮して又頭をびたりと着けた。老人は呼吸を計つて首をあげながら「私もとはこちらに屋敷も在つて、永らく御膝元でくらししたのですが、瓦解の折にあちらへ參つてから頓と出てこんのでな。今來て見ると丸で方角も分らん位で、——迷亭にでも伴つてあるいらはんと、とても用達も出来ません。滄桑の變とは申しながら、御入國以來三百年も、あの通り將軍家の……」と云ひかけると迷亭先生面倒だと心得て

「伯父さん將軍家も難有いかも知れませんが、明治の代も結構ですぜ。昔は赤十字なんてものもなかつたでせう」

「それはない。赤十字杯と稱するものは全くない。ことに宮様の御顔を拜むなど、云ふ事は明治の御代でなくては出来ぬ事だ。わしも長生きをした御蔭で此通り今日の總會にも出席するし、宮殿下の御聲もきくし、もう是で死んでもいゝ」

「まあ久し振りで東京見物をする丈でも得ですよ。苦沙彌君、伯父はね、今度赤十字の總會が

「可愛想に、あれだつて研究でさあ。あの球を磨り上げると立派な學者になれるんですからね」
「玉を磨りあげて立派な學者になれるなら、誰にでも出来る。わしにでも出来る。ビードロやの主人にでも出来る。あゝ云ふ事をする者を漢土では玉人と稱したもので至つて身分の軽いもの

うで……」

「伯父さん、そりや正成の甲割ですかね」

「いえ、是は誰のかわからん。然し時代は古い。建武時代の作かも知れない」

「建武時代かも知れないが、寒月君は弱つてゐましたぞ。苦沙彌君、今日歸りに丁度いゝ機會だから大學を通り抜ける序でに理科へ寄つて、物理の實驗室を見せて貰つた所がね。此甲割が鐵だものだから、磁力の器械が狂つて大騒ぎさ」

「いや、そんな筈はない。是は建武時代の鐵で、性のいゝ鐵だから決してそんな虞れはない」
「いくら性のいゝ鐵だつてさうはいきませんよ。現に寒月がさう云つたから仕方がないです」
「寒月といふのは、あのガラス球を磨つて居る男かい。今の若さに氣の毒な事だ。もう少し何かやる事がありさうなものだ」

「大分人が出ましたらう」と極めて尋常な問をかけた。

「いや非常な人で、それで其人が皆わしをじろく見るので——どうも近來は人間が物見高くなつた様でがすな。昔しはあんなではなかつたが」

「えゝ、左様、昔はそんなではなかつたですな」と老人らしい事を云ふ。是はあながち主人が知つ高振りをした譯ではない。但朦朧たる頭腦から好い加減に流れ出す言語と見れば差し支ない。「それにな。皆此甲割りへ目を着けるので」

「其鐵扇は大分重いもので御座いませう」

「苦沙彌君、一寸持つて見玉へ。中々重いよ。伯父さん持たして御覽なさい」

老人は重たさうに取り上げて「失禮ですが」と主人に渡す。京都の黒谷で參詣人が蓮生坊の太刀を戴く様なかたで、苦沙彌先生しばらく持つて居たが「成程」と云つた儘老人に返却した。

「みんなが之を鐵扇々と云ふが、之は甲割と稱へて鐵扇とは丸で別物で……」

「へえ、何にしたもので御座いませう」

「兎を割るので、——敵の目がくらむ所を撃ちとつたものでがす。楠正成時代から用ゐたや

だ」と云ひながら主人の方を向いて暗に賛成を求める。

「成程」と主人はかしこまつて居る。

「凡て今の世の學問は皆形而下の學で一寸結構な様だが、いざとなるとすこしも役には立ちません。昔はそれと違つて侍は皆命懸けの商買だから、いざと云ふ時に狼狽せぬ様に心の修業を致したもので、御承知でもあらつしやらうが中々玉を磨つたり針金を綱つたりする様な容易いものではなかつたのでがすよ」

「成程」と矢張りかしこまつて居る。

「伯父さん心の修業と云ふものは玉を磨る代りに懷手をして坐り込んで居るんでせう」

「夫だから困る。決してそんな造作のないものではない。孟子は求放心と云はれた位だ。邵康節は心要放と説いた事もある。又佛家では中峯和尚と云ふのが具不退轉と云ふ事を教へて居る。中々容易には分らん」

「到底分りつこありませんね。全體どうすればいいんです」

「御前は澤菴禪師の不動智神妙録といふものを讀んだ事があるかい」

「いゝえ、聞いた事ありません」

「心を何處に置かうぞ。敵の身の働に心を取らるゝなり。敵の太刀に心を取れば、敵の身の働に心を取らるゝなり。敵を切らんと思ふ所に心を取らるゝなり。我太刀に心を取らるゝなり。われ切られじと思ふ所に心を取らば、切られじと思ふ所に心を取らるゝなり。人の構に心を取らば、人の構に心を取らるゝなり。兎角心の置き所はないとある」

「よく忘れずに暗誦したものです。伯父さんも中々記憶がいゝ。長いぢやありませんか。苦沙彌君分つたかい」

「成程」と今度も成程で済まして仕舞つた。

「なあ、あなた、さうで御座りませう。心を何處に置かうぞ、敵の身の働に心を取れば、敵の働に心を取らるゝなり。敵の太刀に心を取れば……」

「伯父さん苦沙彌君はそんな事は、よく心得て居るんですよ。近頃は毎日書齋で精神の修養ばかりして居るんですから。客があつても取次に出ない位心を置き去りにして居るんだから大丈夫

ですよ」

「や、それは御奇特な事で——御前杯もちと御一所にやつたらよからう」

「へ、そんな暇はありませんよ。伯父さんは自分が楽なからだだもんだから、人も遊んでると思つて居らつしやるんでせう」

「實際遊んでるぢやないかの」

「所が閑中自から忙ありでね」

「さう、粗忽だから修業をせんといかないと云ふのよ、忙中自ら閑ありと云ふ成句はあるが、閑中自ら忙ありと云ふのは聞いた事がない。なあ苦沙彌さん」

「え、どうも聞きません様で」

「ハ、ハ、さうなつちやあ敵はない。時に伯父さんどうです。久し振りて東京の鰻でも食つちやあ。竹葉でも奢りませう。是から電車で行くとすぐです」

「鰻も結構だが、今日は是からすい原へ行く約束があるから、わしは是で御免を蒙らう
「あ、杉原ですか、あの爺さんも達者ですね」

「杉原ではない、すい原さ。御前はよく間違ばかり云つて困る。他人の姓名を取り違へるのは失禮だ。よく氣をつけんといけない」

「だつて杉原とかいてあるぢやありませんか」

「杉原と書いてすい原と讀むのさ」

「妙ですね」

「なに妙な事があるものか。名目讀みと云つて昔からある事さ。蚯蚓を和名でみ、すと云ふ。あれは目見すの名目よみで。蝦蟇の事をかいると云ふのと同じ事さ」

「へえ、驚ろいたな」

「蝦蟇を打ち殺すと仰向きにかへる。それを名目讀みにかいると云ふ。透垣をすい垣、莖立をく、立、皆同じ事だ。杉原をすぎ原など、云ふのは田舎もの、言葉さ。少し氣を付けないと人に笑はれる」

「ぢや、その、すい原へ是から行くんですか。困つたな」

「なに厭なら御前は行かんでもい。わし一人で行くから」

「一人で行けますか」

「あるいては六づかしい。車を雇つて頂いて、こゝから乗つて行かう」

主人は畏まつて直ちに御三を車屋へ走らせる。老人は長々と挨拶をしてチョン鬚頭へ山高帽をいたゞいて歸つて行く。迷亭はあとへ残る。

「あれが君の伯父さんか」

「あれが僕の伯父さんさ」

「成程」と再び座蒲團の上に坐つたなり懐手をして考へ込んで居る。

「ハ、豪傑だらう。僕もあゝ云ふ伯父さんを持つて仕合せなものさ。どこへ連れて行つてもあの通りなんだぜ。君驚ろいたらう」と迷亭君は主人を驚ろかした積りで大に喜んで居る。

「なにそんなに驚きやしない」

「あれで驚かなけりや、膽力の据つたもんだ」

「然しあの伯父さんは中々えらい所がある様だ。精神の修養を主張する所なぞは大に敬服して

いゝ」

「敬服していゝかね。君も今に六十位になると矢つ張りあの伯父見た様に、時候おくれになるかも知れないぜ。確かりして呉れ玉へ。時候おくれの廻り持ちなんか気が利かないよ」

「君はしきりに時候おくれを氣にするが、時と場合によると、時候おくれの方がえらいんだぜ。第一今の學問と云ふものは先へ先へと行く丈で、どこ迄行つたつて際限はありやしない。到底満足は得られやしない。そこへ行くと東洋流の學問は消極的で大に味がある。心其ものゝ修業をするのだから」と先達て哲學者から承はつた通りを自説の様に述べ立てる。

「えらい事になつて來たぜ。何だか八木獨仙君の様な事を云つてるね」

八木獨仙と云ふ名を聞いて主人ははつと驚ろいた。實は先達て臥龍窟を訪問して主人を説教に及んで悠然と立ち歸つた哲學者と云ふのが取も直さず此八木獨仙君であつて、今主人が鹿爪らしく述べ立てゝ居る議論は全く此八木獨仙君の受賣なのであるから、知らんと思つた迷亭が此先生の名を間不容髮の際に持ち出したのは暗に主人の一夜作りの假鼻を挫いた譯になる。

「君獨仙の説を聞いた事があるのか」と主人は劍呑だから念を推して見る。

「聞いたの、聞かないのつて、あの男の説ときたら、十年前學校に居た時分と今日と少しも變

りやしない」

「眞理はさう變るものぢやないから、變らない所が頼母しいかも知れない」

「まあそんな眞負があるから獨仙もあれで立ち行くだね。第一八木と云ふ名からして、よく出来るよ。あの髯が君全く山羊だからね。さうしてあれも寄宿舎時代からあの通りの恰好で生きて居たんだ。名前の獨仙杯も振つたものさ。昔し僕の所へ泊りがけに来て例の通り消極的の修養と云ふ議論をしてね。いつ迄立つても同じ事を繰り返して已めないから、僕が君もう寝やうぢやないかと云ふと、先生氣樂なものさ、いや僕は眠くないと澄し切つて、矢つ張り消極論をやるには迷惑したね。仕方がないから君は眠くなからうけれども、僕の方は大變眠いだから、どうか寝て呉れ玉へと頼むやうにして寝かした迄はよかつたが——其晩鼠が出て獨仙君の鼻のあたまで噛つてね。夜なかに大騒ぎさ。先生悟つた様な事を云ふけれども命は依然として惜しかつたと見えて、非常に心配するのさ。鼠の毒が總身にまはると大變だ、君どうかしてくれと責めるには閉口したね。夫れから仕方がないから臺所へ行つて紙片へ飯粒を貼つて胡魔化してやつたあね」

「どうして」

「是は舶來の膏藥で、近來獨逸の名醫が發明したので、印度人杯の毒蛇に噛まれた時に用ゐると即效があるんだから、是さへ貼つて置けば大丈夫だと云つてね」

「君は其時分から胡魔化す事に妙を得て居たんだね」

「……すると獨仙君はあゝ云ふ好人物だから、全くだと思つて安心してぐうぐう寐て仕舞つたのさ。あくる日起きて見ると膏藥の下から糸屑がぶらさがつて例の山羊髯に引つかゝつて居たのは滑稽だつたよ」

「然しあの時分より大分えらくなつた様だよ」

「君近頃逢つたのかい」

「一週間許り前に来て、長い間話しをして行つた」

「どうりで獨仙流の消極説を振り舞はすと思つた」

「實は其時大に感心して仕舞つたから、僕も大に奮發して修養をやらうと思つてる所なんだ」

「奮發は結構だがね。あんまり人の云ふ事を眞に受けると馬鹿を見るぜ。一體君は人の言ふ事を何でも蚊でも正直に受けるからいけない。獨仙も口丈は立派なものだがね、いざとなると御五

と同じものだよ。君九年前の大地震を知つてらう。あの時寄宿の二階から飛び降りて怪我をしたものは獨仙君丈なんだからな」

「あれには當人大分説がある様ぢやないか」

「さうさ、當人に云はせると頗る難有いものさ。禪の機鋒は峻峭なもので、所謂石火の機となると怖い位早く物に應ずる事が出来る。ほかのものが地震だと云つて狼狽へて居る所を自分丈は二階の窓から飛び下りた所に修業の效があらはれて嬉しいと云つて、跛を引きながらうれしがつて居た。負惜みの強い男だ。一體禪とか佛とか云つて騒ぎ立てる連中程あやしいのはないぜ」

「さうかな」と苦沙彌先生少々腰が弱くなる。

「此間來た時禪宗坊主の寐言見た様な事を何か云つてつたらう」

「うん電光影裏に春風をきるとか云ふ句を教へて行つたよ」

「其電光さ。あれが十年前からの御箱なんだから可笑いよ。無覺禪師の電光ときたら寄宿舎中誰も知らないものはない位だつた。夫に先生時々せき込むと間違へて電光影裏を逆さまに春風影裏に電光をきると云ふから面白い。今度ためして見玉へ。向で落ち付き拂つて述べたてゝ居る所

を、こつちで色々反對するんだね。するとすぐ顛倒して妙な事を云ふよ」

「君の様ないたづらものに逢つちや叶はない」

「どつちがいたづら者だか分りやしない。僕は禪坊主だの、悟つたのは大嫌だ。僕の近所に南藏院と云ふ寺があるが、あそこに八十許りの隠居が居る。それで此間の白雨の時寺内へ雷が落ちて隠居の居る庭先の松の木を割いて仕舞つた。所が和尚泰然として平氣だと云ふから、よく聞き合はせて見るとから聾なんだね。それぢや泰然たる譯さ。大概そんなものさ。獨仙も一人で悟つて居ればいゝのだが、稍ともすると人を誘ひ出すから悪い。現に獨仙の御蔭で二人ばかり氣狂にされてゐるからな」

「誰が」

「誰がつて。一人は理野陶然さ。獨仙の御蔭で大に禪學に凝り固まつて鎌倉へ出掛けて行つて、とうとう出先で氣狂になつて仕舞つた。圓覺寺の前に汽車の踏切りがあるだらう、あの踏切り内へ飛び込んでレールの上で座禪をするんだね。夫で向ふから來る汽車をとめて見せると云ふ大氣焔さ。尤も汽車の方で留つてくれたから一命丈はとりとめたが、其代り今度は火に入つて焼けず、

水に入つて溺れぬ金剛不壞のからだだと號して寺内の蓮池へ這入つてぶく／＼あるき廻つたもんだ

「死んだかい」

「其時も幸、道場の坊主が通りかゝつて助けてくれたが、其後東京へ歸つてから、とう／＼腹膜炎で死んで仕舞つた。死んだのは腹膜炎だが、腹膜炎になつた原因は僧堂で麥飯や萬年漬を食つたせいだから、詰る所は間接に獨仙が殺した様なものさ」

「無暗に熱中するのも善し悪ししだね」と主人は一寸氣味のわるいといふ顔付をする。

「本當にさ。獨仙にやられたものがもう一人同窓中にある」

「あぶないね。誰だい」

「立町老梅君さ。あの男も全く獨仙にそゝのかされて鰻が天上する様な事ばかり言つて居たが、とう／＼君本物になつて仕舞つた」

「本物たあ何だい」

「とう／＼鰻が天上して、豚が仙人になつたのさ」

「何の事だい、それは」

「八木が獨仙なら、立町は豚仙さ、あの位食ひ意地のきたない男はなかつたが、あの食意地と禪坊主のわる意地が併發したのだから助からない。始めは僕等も氣がつかなかつたが今から考へると妙な事ばかり並べて居たよ。僕のうち杯へ來て君あの松の木へカツレツが飛んできやしませんかの、僕の國では蒲鉾が板へ乗つて泳いで居ますのつて、頻りに警句を吐いたものさ。只吐いて居るうちはよかつたが君表のどぶへ金とんを掘りに行きませうと促がすに至つては僕も降参したね。夫から二三日すると遂に豚仙になつて巢鴨へ收容されて仕舞つた。元來豚なんぞが氣狂になる資格はないんだが、全く獨仙の御蔭であすこ迄漕ぎ付けたんだね。獨仙の勢力も中々えらいよ」

「へえ、今でも巢鴨に居るのかい」

「居るだんぢやない。自大狂で大氣焰を吐いて居る。近頃は立町老梅なんて名はつまらないと云ふので、自ら天道公平と號して、天道の權化を以て任じて居る。すさまじいものだよ。まあ一寸行つて見給へ」

「天道公平？」

「天道公平だよ。氣狂の癖にうまい名をつけたものだね。時々孔平とも書く事がある。夫で何でも世人が迷つてゐるから是非救つてやりたいと云ふので、無暗に友人や何かへ手紙を出すんだね。僕も四五通貰つたが、中には中々長い奴があつて不足税を二度許りとられたよ」

「夫ぢや僕の所へ来たのも老梅から来たんだ」

「君の所へも来たかい。そいつは妙だ。矢つ張り赤い状袋だらう」

「うん、真中が赤くて左右が白い。一風變つた状袋だ」

「あれはね、わざ／＼支那から取り寄せるのださうだよ。天の道は白なり、地の道は白なり、人は中間に在つて赤しと云ふ豚仙の格言を示したんだつて……」

「中々因縁のある状袋だね」

「氣狂丈に大に凝つたものさ。さうして氣狂になつても食意地丈は依然として存して居るものと見えて、毎回必ず食物の事がかいてあるから奇妙だ。君の所へも何とか云つて来たらう」

「うん、海鼠の事がかいてある」

「老梅は海鼠が好きだつたからね。尤もだ。夫から？」

「夫から河豚と朝鮮仁參か何か書いてある」

「河豚と朝鮮仁參の取り合せは旨いね。大方河豚を食つて中つたら朝鮮仁參を煎じて飲めども云ふ積りなんだらう」

「さうでもない様だ」

「さうでなくても構はないさ。どうせ氣狂なもの。夫れつきりかい」

「まだある。苦沙彌先生御茶でも上がれと云ふ句がある」

「アハ、御茶でも上がればきびし過ぎる。夫で大に君をやり込めた積りに違ない。大出来だ。天道公平君萬歳だ」と迷亭先生は面白がつて、大に笑ひ出す。主人は少からざる尊敬を以て反覆讀誦した書翰の差出人が金箔つきの狂人であると知つてから、最前の熱心と苦心が何だか無駄骨の様な氣がして腹立たしくもあり、又瘋癲病者の文章を左程心勞して翫味したかと思ふと恥づかしくもあり、最後に狂人の作に是程感服する以上は自分も多少神經に異状がありはせぬかとの疑念もあるので、立腹と、慚愧と、心配の合併した状態で何だか落ち付かない顔付をして控へて居

る。

折から表格子をあらゝかに開けて、重い靴の音が二た足程沓脱に響いたと思つたら「一寸頼みます、一寸頼みます」と大きな聲がする。主人の尻の重いに反して迷亭は又頗る氣輕な男であるから、御三の取次に出るのも待たず、通れと云ひながら隔ての間を二た足許りに飛び越えて玄關に躍り出した。人のうちへ案内も乞はずにつか／＼這入り込む所は迷惑の様だが、人のうちへ這入つた以上は書生同様取次を務めるから甚だ便利である。いくら迷亭でも御客さんには相違ない、其御客さんが玄關へ出張するのに主人たる苦沙彌先生が座敷へ構へ込んで動かん法はない。普通の男ならあとから引き續いて出陣すべき筈であるが、そこが苦沙彌先生である。平氣に座布団の上へ尻を落ち付けて居る。但し落ち付けて居るのは、落ち付けて居るのは、其趣は大分似て居るが、其實質は餘程違ふ。

玄關へ飛び出した迷亭は何かしきりに辯じて居たが、やがて奥の方を向いて「おい御主人一寸御足勞だが出てくれ玉へ。君でなくつちや、間に合はない」と大きな聲を出す。主人は已を得ず懐手の儘のそり／＼と出てくる。見ると迷亭君は一枚の名刺を握つた儘しやがんで挨拶をして

居る。頗る威嚴のない腰つきである。其名刺には警視廳刑事巡查吉田虎藏とある。虎藏君と並んで立つて居るのは二十五六の脊の高い、いなせな唐棧づくめの男である。妙な事に此男は主人と同じく懐手をした儘、無言で突立てゐる。何だか見た様な顔だと思つて能く／＼観察すると、見た様な所ぢやない。此間深夜御來訪になつて山の芋を持つて行かれた泥棒君である。おや今度は白晝公然と玄關から御出になつたな。

「おい此方は刑事巡查で先達での泥棒をつらまへたから、君に出頭しろと云ふんで、わざ／＼御出になつたんだよ」

主人は漸く刑事が踏み込んだ理由が分つたと見えて、頭をさげて泥棒の方を向いて鄭寧に御辭儀をした。泥棒の方が虎藏君より男振りがいゝので、こつちが刑事だと早合點をしたのだらう。泥棒も驚ろいたに相違ないが、まさか私が泥棒ですよと斷はる譯にも行かなかつたと見えて、澄まして立つて居る。矢張り懐手の儘である。尤も手錠をはめて居るのだから、出さうと云つても出る氣遣はない。通例のものなら此様子で大抵はわかる筈だが、この主人は當世の人間に似合はず、無暗に役人や警察を難有がる癖がある。御上の御威光となると非常に恐ろしいものと心得て居

る。尤も理論上から云ふと、巡查などは自分達が金を出して番人に雇つて置くのだ位の事は心得て居るのだが、實際に臨むといやにへえ／＼する。主人のおやぢは其昔場末の名主であつたから、上の者にびよこ／＼頭を下げて暮した習慣が、因果となつて斯様に子に酬つたのかも知れない。まことに氣の毒な至りである。

巡查は可笑しかつたと見えて、にや／＼笑ひながら「あしたね、午前九時迄に日本堤の分署迄来て下さい。——盗難品は何と何でしたかね」

「盗難品は……」と云ひかけたが、生憎先生大概忘れて居る。只覚えて居るのは多々良三平の山の芋丈である。山の芋扱はどうでも構はんと思つたが、盗難品は……と云ひかけてあとが出ないのは如何にも與太郎の様で體裁がわるい。人が盗まれたのならいざ知らず、自分が盗まれて置きながら、明瞭の答が出来んのは一人前ではない證據だと、思ひ切つて「盗難品は……山の芋一箱」とつけた。

泥棒は此時餘程可笑しかつたと見えて、下を向いて着物の襟へあごを入れた。迷亭はアハ、と笑ひながら「山の芋が餘程惜しかつたと見えるね」と云つた。巡查丈は存外眞面目である。

「山の芋は出ない様だが外の物件は大概戻つた様です。——まあ来て見たら分るでせう。夫でね、下げ渡したら請書が入るから、印形を忘れず持つて御出なさい。——九時迄に来なくつてはいかん。日本堤分署です。——淺草警察署の管轄内の日本堤分署です。——それぢや、左様なら」と獨りで辯じて歸つて行く。泥棒君も續いて門を出る。手が出せないの、門をしめる事が出来ないから開け放しの儘行つて仕舞つた。恐れ入りながらも不平と見えて、主人は頬をふくらして、びしやりと立て切つた。

「アハ、君は刑事を大變尊敬するね。つねにあゝ云ふ恭謙な態度を持つてるといゝ男だが、君は巡查丈に鄭寧なんだから困る」

「だつて折角知らせて来てくれたんぢやないか」

「知らせに来るつたつて、先は商賣だよ。當り前にあしらつてりや澤山だ」

「然し只の商賣ぢやない」

「無論只の商賣ぢやない。探偵と云ふいけすかない商賣さ。あたり前の商賣より下等だね」

「君そんな事を云ふと、ひどい目に逢ふぜ」

「ハ、夫れぢや刑事の悪口はやめにしやう。然し君刑事を尊敬するのは、まだしもだが、泥棒を尊敬するに至つては、驚かざるを得んよ」

「誰が泥棒を尊敬したい」

「君がしたのさ」

「僕が泥棒に近付きがあるもんか」

「あるもんかつて君は泥棒に御辭儀をしたぢやないか」

「いつ？」

「たつた今平身低頭したぢやないか」

「馬鹿あ云つてら、あれは刑事だね」

「刑事があんななりをするものか」

「刑事だからあんななりをするんぢやないか」

「頑固だな」

「君こそ頑固だ」

「まあ第一、刑事が人の所へ来てあんなに懐手なんかして、突立て居るものかね」

「刑事だつて懐手をしないと限るまい」

「さう猛烈にやつて来ては恐れ入るがね。君が御辭儀をする間あいつは始終あの儘で立つて居ただぜ」

「刑事だから其位の事はあるかも知れんさ」

「どうも自信家だな。いくら云つても聞かないね」

「聞かないさ。君は口先許りで泥棒だ泥棒だと云つてる丈で、其泥棒が這入る所を見届けた譯ぢやないんだから。たゞさう思つて獨りで強情を張つてゐるんだ」

「迷亭も是に於て到底濟度すべからざる男と斷念したものと見えて、例に似ず黙つて仕舞つた。主人は久し振りで迷亭を凹ましたと思つて大得意である。迷亭から見ると主人の價値は強情を張つた丈下落した積りであるが、主人から云ふと強情を張つた丈迷亭よりえらくなつたのである。世の中にはこんな頓珍漢な事はまゝある。強情さへ張り通せば勝つた氣で居るうちに、當人の人物としての相場は遙かに下落して仕舞ふ。不思議な事に頑固の本人は死ぬ迄自分は面目を施こし

「ハ、夫れぢや刑事の悪口はやめにしやう。然し君刑事を尊敬するのは、まだしもだが、泥棒を尊敬するに至つては、驚かざるを得んよ」

「誰が泥棒を尊敬したい」

「君がしたのさ」

「僕が泥棒に近付きがあるもんか」

「あるもんかつて君は泥棒に御辭儀をしたぢやないか」

「いつ？」

「たつた今平身低頭したぢやないか」

「馬鹿あ云つてら、あれは刑事だね」

「刑事があんななりをするものか」

「刑事だからあんななりをするんぢやないか」

「頑固だな」

「君こそ頑固だ」

た積りかなにかで、其時以後人が輕蔑して相手にして呉れないのだとは夢にも悟り得ない。幸福なものである。こんな幸福を豚的幸福と名づけるのださうだ。

「兎も角もあした行く積りかい」

「行くとも、九時迄に來いと云ふから、八時から出て行く」

「學校はどうする」

「休むさ。學校なんか」と擲きつける様に云つたのは壯なものだつた。

「えらい勢だね。休んでもいゝのかい」

「いゝとも僕の學校は月給だから、差し引かれる氣遣はない、大丈夫だ」と眞直に白狀して仕舞つた。するい事もするいが、單純なことも單純なものだ。

「君、行くのはいゝが路を知つてるかい」

「知るものか。車に乗つて行けば譯はないだらう」とぶん／＼して居る。

「静岡の伯父に譲らざる東京通なるには恐れ入る」

「いくらでも恐れ入るがいゝ」

「ハ、日本堤分署と云ふのはね、君只の所ぢやないよ。吉原だよ」

「何だ？」

「吉原だよ」

「あの遊廓のある吉原か？」

「さうさ、吉原と云やあ、東京に一つしかないやね。どうだ、行つて見る氣かい」と迷亭君又からかひかける。

主人は吉原と聞いて、そいつはと少々逡巡の體であつたが、忽ち思ひ返して「吉原だらうが、遊廓だらうが、一反行くと云つた以上は屹度行く」と入らざる所に力味で見せた。愚人は得てこんな所に意地を張るものだ。

迷亭君は「まあ面白からう、見て來玉へ」と云つたのみである。一波瀾を生じた刑事事件は是で一先づ落着を告げた。迷亭は夫から相變らず駄辯を弄して日暮れ方、あまり遅くなると伯父に怒られると云つて歸つて行つた。

迷亭が歸つてから、そこ／＼に晩飯を濟まして、又書齋へ引き揚げた主人は再び拱手して下の

様に考へ始めた。

「自分が感服して、大に見習はうとした八木獨仙君も迷亭の話によつて見ると、別段見習ふにも及ばない人間の様である。のみならず彼の唱道する所の説は何だか非常識で、迷亭の云ふ通り多少瘋癲的系統に屬しても居りさうだ。沉んや彼は歴乎とした二人の氣狂の子分を有して居る。甚だ危険である。滅多に近寄ると同系統内に引き摺り込まれさうである。自分が文章の上に於て驚嘆の餘、是こそ大見識を有して居る偉人に相違ないと思ひ込んだ天道公平事實名立町老梅は純然たる狂人であつて、現に巢鴨の病院に起居してゐる。迷亭の記述が棒大のざれ言にもせよ、彼が瘋癲院中に盛名を擡まゝにして天道の主宰を以て自ら任ずるは恐らく事實であらう。かう云ふ自分もことに因ると少々御座つて居るかも知れない。同氣相求め、同類相集まると云ふから、氣狂の説に感服する以上は——少なくとも其文章言辭に同情を表する以上は——自分も亦氣狂に縁の近い者であるだらう。よし同型中に鑄化せられんでも軒を比べて狂人と隣り合せに居を卜するとすれば、境の壁を一重打ち抜いていつの間にか同室内に膝を突き合せて談笑する事がないとも限らん。こいつは大變だ。成程考へて見ると此程中から自分の腦の作用は我ながら驚く位奇上に

妙を點じ變傍に珍を添へて居る。腦漿一勺の化學的變化は兎に角意志の動いて行爲となる所、發して言辭と化する邊には不思議にも中庸を失した點が多い。舌上に龍泉なく、腋下に清風を生ぜざるも、齒根に狂臭あり、筋頭に瘋味あるを奈何せん。愈大變だ。ことによるともう既に立派な患者になつて居るのではないかしらん。まだ幸に人を傷けたり、世間の邪魔になる事をし出かさんから矢張り町内を追拂はれずに、東京市民として存在して居るのではなからうか。こいつは消極の積極のと云ふ段ぢやない。先づ脈搏からして検査しなくてはならん。然し脈には變りはない様だ。頭は熱いかしらん。是も別に逆上の氣味でもない。然しどうも心配だ。」

「かう自分と氣狂ばかりを比較して類似の點ばかり勘定して居ては、どうしても氣狂の領分を脱する事は出來さうにもない。是は方法がわるかつた。氣狂を標準にして自分を其方へ引きつけて解釋するからこんな結論が出るのである。もし健康な人を本位にして其傍へ自分を置いて考へて見たら或は反對の結果が出るかも知れない。夫には先づ手近から始めなくてはいかん。第一に今日來たフロックコートの伯父さんはどうだ。心をどこに置かうぞ……あれも少々怪しい様だ。第二は寒月はどうだ。朝から晩迄辨當持參で珠ばかり磨いて居る。これも棒組だ。第三にと……

迷亭？あれはふざけ廻るのを天職の様に心得て居る。全く陽性の氣狂に相違ない。第四はと……
 金田の妻君。あの毒悪な根性は全く常識をはづれて居る。純然たる氣狂に極つて居る。第五は
 金田君の番だ。金田君には御目に懸つた事はないが、先づあの細君を恭しくおつ立て、琴瑟調
 和して居る所を見ると非凡の人間と見立て、差支あるまい。非凡は氣狂の異名であるから、先づ
 是も同類にして置いて構はない。夫からと、——まだあるある。落雲館の諸君子だ、年齢から云
 ふとまだ芽生へだが、躁狂の點に於ては一世を空しうするに足る天晴な豪のものである。かう數
 へ立て、見ると大抵のものは同類の様である。案外心丈夫になつて來た。ことによると社會は
 みんな氣狂の寄り合ひも知れない。氣狂が集合して鎗を削つてつかみ合ひ、いがみ合ひ、罵り合
 ひ、奪ひ合つて、其全體が團體として細胞の様に崩れたり、持ち上つたり、持ち上つたり、崩れ
 たりして暮して行くのを社會と云ふのではないか知らん。其中で多少理窟がわかつて、分別のあ
 る奴は却つて邪魔になるから、瘋癲院といふものを作つて、こゝへ押し込めて出られない様にす
 るのではないかしらん。すると瘋癲院に幽閉されて居るものは普通の人で、院外にあれば居る
 ものは却つて氣狂である。氣狂も孤立して居る間はどこ迄も氣狂にされて仕舞ふが、團體となつ

て勢力が出ると、健全の人間になつて仕舞ふのかも知れない。大きな氣狂が金力や威力を濫用し
 て多くの小氣狂を役使して亂暴を働いて、人から立派な男だと云はれて居る例は少くない。何
 が何だか分らなくなつた」

以上は主人が當夜癡々たる孤燈の下で沈思熟慮した時の心的作用を有の儘に描き出したもので
 ある。彼の頭腦の不透明なる事はこゝにも著るしくあらはれて居る。彼はカイゼルに似た八字髯
 を蓄ふるにも係らず狂人と常人の差別さへなし得ぬ位の凡倉である。のみならず彼は折角此問題
 を提供して自己の思索力に訴へながら、遂に何等の結論に達せずしてやめて仕舞つた。何事によ
 らず彼れは徹底的に考へる腦力のない男である。彼の結論の茫漠として、彼の鼻孔から迸出する
 朝日の烟の如く、捕捉しがたきは、彼の議論に於る唯一の特色として記憶すべき事實である。

吾輩は猫である。猫の癖にどうして主人の心中をかく精密に記述し得るかと疑ふものがあるか
 も知れんが、此位な事は猫にとつて何でもない。吾輩は是で讀心術を心得て居る。いつ心得たな
 んて、そんな餘計な事は聞かんでもいい。ともかくも心得て居る。人間の膝の上へ乗つて眠つて
 ゐるうちに、吾輩は吾輩の柔かな毛衣をそつと人間の腹にこすり付ける。すると一道の電氣が起

「あなた、もう七時ですよ」と襖越しに細君が聲を掛けた。主人は眼がさめて居るのだから、寐て居るのだから、向うむきになつたぎり返事もしない。返事をしないのは此男の癖である。是非何とか口を切らなければならぬ時はうんと云ふ。此うんも容易な事では出てこない。人間も返事がうるさくなる位無精になると、どこもなく趣があるが、こんな人に限つて女に好かれた試しがない。現在連れ添ふ細君ですら、あまり珍重して居らん様だから、其他は推して知るべしと云つても大した間違はなからう。親兄弟に見離され、あかの他人の傾城に、可愛がられやう筈がない、とある以上は、細君にさへ持てない主人が、世間一般の淑女に氣に入る筈がない。何も異性間にも人望な主人を此際ことさらに暴露する必要もないのだが、本人に於て存外な考へ違をして、全く年廻りのせゐで細君に好かれないのだ杯と理窟をつけて居ると、迷の種であるから、自覺の一助にもならうかとの親切心から一寸申し添へる迄である。

十

つて彼の腹の中に行きさつが手にとる様に吾輩の心眼に映する。先達て杯は主人がやさしく吾輩の頭を撫で廻しながら、突然此猫の皮を剥いでちやん／＼にしたら嘸あたくかでよからうと飛んでもない了見をむら／＼と起したのを即座に氣取つて覺えずひやつとした事さへある。怖い事だ。當夜主人の頭のなかに起つた以上の思想もそんな譯合で幸にも諸君に御報道する事が出来る様に相成つたのは吾輩の大に榮譽とする所である。但し主人は「何が何だか分らなくなつた」迄考へて其あととはぐ／＼寐て仕舞つたのである、あすになれば何をどこ迄考へたか丸で忘れてしまふに違ない。向後もし主人が氣狂に就て考へる事があるとするれば、もう一返出直して頭から考へ始めなければならぬ。さうすると果してこんな徑路を取つて、こんな風に「何が何だか分らなくなる」かどうだか保證出来ない。然し何返考へ直しても、何條の徑路をとつて進まうとも、遂に「何が何だか分らなくなる」丈は慥かである。

言ひつけられた時刻に、時刻がきたと注意しても、先方が其注意を無にする以上は、向をむいてうんざへ發せざる以上は、其曲は夫にあつて、妻にあらずと論定したる細君は、遅くなつても知りませんよと云ふ姿勢で箒とはたきを擔いで書齋の方へ行つてしまつた。やがてはたき書齋中を叩き散らす音がするのは例によつて例の如き掃除を始めたのである。一體掃除の目的は運動の爲か、遊戯の爲か、掃除の役目を帯びぬ吾輩の關知する所でないから、知らん顔をして居れば差し支ない様なものゝ、こゝの細君の掃除法の如きに至つては頗る無意義のものと云はざるを得ない。何が無意義であると云ふと、此細君は單に掃除の爲めに掃除をして居るからである。はたきを一通り障子へかけて、箒を一應疊の上へ滑らせる。夫で掃除は完成した者と解釋して居る。掃除の原因及び結果に至つては微塵の責任だに脊負つて居らん。かるが故に奇麗な所は毎日奇麗だが、ごみのある所、ほこりの積つて居る所はいつでもごみが溜つてほこりが積つて居る。告朔の餼羊と云ふ故事もある事だから、是でもやらんよりはましかも知れない。然しやつても別段主人の爲にはならない。ならない所を毎日御苦勞にもやる所が細君のえらい所である。細君と掃除とは多年の習慣で、器械的の連想をかたちづくつて頑として結びつけられて居るにもかゝらず、掃除の實に至つては、妻君が未だ生れざる以前の如く、はたきと箒が發明せられざる昔の如く、毫も擧つて居らん。思ふに此兩者の關係は形式論理學の命題に於ける名辭の如く其内容の如何にかゝはらず結合せられたものであらう。

吾輩は主人と違つて、元來が早起の方だから、此時既に空腹になつて參つた。到底うちのものさへ膳に向はぬさきから、猫の身分を以て朝めしに有りつける譯のものではないが、そこが猫の淺ましきで、もしや烟の立つた汗の香が鮑貝の中から、うまさうに立ち上つて居りはすまいかと思ふと、じつとして居られなくなつた。はかない事を、果敢ないと知りながら頼みにするときは、只其頼み丈を頭の中に描いて、動かすに落ち付いて居る方が得策であるが、さてさうは行かぬ者で、心の願と實際が、合ふか合はぬか是非共試験して見たくなる。試験して見れば必ず失望するにきまつてる事ですら、最後の失望を自ら事實の上を受取る迄は承知出来んものである。吾輩は堪らなくなつて臺所へ這出した。先づへつゝの影にある鮑貝の中を覗いて見ると案に違はず、夕べ舐め盡した儘、闕然として、怪しき光が引窓を洩る初秋の日影にかゞやいて居る。御三は既に炊き立の飯を、御櫃に移して、今や七輪にかけた鍋の中をかきまぜつゝある。釜の周圍には沸

言ひつけられた時刻に、時刻がきたと注意しても、先方が其注意を無にする以上は、向をむいてうんざへ發せざる以上は、其曲は夫にあつて、妻にあらずと論定したる細君は、遅くなつても知りませんよと云ふ姿勢で箒とはたきを擔いで書齋の方へ行つてしまつた。やがてはたき書齋中を叩き散らす音がするのは例によつて例の如き掃除を始めたのである。一體掃除の目的は運動の爲か、遊戯の爲か、掃除の役目を帯びぬ吾輩の關知する所でないから、知らん顔をして居れば差し支ない様なものゝ、こゝの細君の掃除法の如きに至つては頗る無意義のものと云はざるを得ない。何が無意義であると云ふと、此細君は單に掃除の爲めに掃除をして居るからである。はたきを一通り障子へかけて、箒を一應疊の上へ滑らせる。夫で掃除は完成した者と解釋して居る。掃除の原因及び結果に至つては微塵の責任だに脊負つて居らん。かるが故に奇麗な所は毎日奇麗だが、ごみのある所、ほこりの積つて居る所はいつでもごみが溜つてほこりが積つて居る。告朔の餼羊と云ふ故事もある事だから、是でもやらんよりはましかも知れない。然しやつても別段主人の爲にはならない。ならない所を毎日御苦勞にもやる所が細君のえらい所である。細君と掃除とは多年の習慣で、器械的の連想をかたちづくつて頑として結びつけられて居るにもかゝらず、掃除の實に至つては、妻君が未だ生れざる以前の如く、はたきと箒が發明せられざる昔の如く、毫も擧つて居らん。思ふに此兩者の關係は形式論理學の命題に於ける名辭の如く其内容の如何にかゝはらず結合せられたものであらう。

吾輩は主人と違つて、元來が早起の方だから、此時既に空腹になつて參つた。到底うちのものさへ膳に向はぬさきから、猫の身分を以て朝めしに有りつける譯のものではないが、そこが猫の淺ましきで、もしや烟の立つた汗の香が鮑貝の中から、うまさうに立ち上つて居りはすまいかと思ふと、じつとして居られなくなつた。はかない事を、果敢ないと知りながら頼みにするときは、只其頼み丈を頭の中に描いて、動かすに落ち付いて居る方が得策であるが、さてさうは行かぬ者で、心の願と實際が、合ふか合はぬか是非共試験して見たくなる。試験して見れば必ず失望するにきまつてる事ですら、最後の失望を自ら事實の上を受取る迄は承知出来んものである。吾輩は堪らなくなつて臺所へ這出した。先づへつゝの影にある鮑貝の中を覗いて見ると案に違はず、夕べ舐め盡した儘、闕然として、怪しき光が引窓を洩る初秋の日影にかゞやいて居る。御三は既に炊き立の飯を、御櫃に移して、今や七輪にかけた鍋の中をかきまぜつゝある。釜の周圍には沸

上がりつて流れだした米の汁が、かさ／＼に幾條となくこびり付いて、あるものは吉野紙を貼り
 つけた如くに見える。もう飯も汁も出来て居るのだから食はせてもよさうなものだと思つた。
 こんな時に遠慮するのは詰らない話だ、よしんば自分の望通りにならなくつたつて元々で損は行
 かないのだから、思ひ切つて朝飯の催促をしてやらう、いくら居候の身分だつてひもじいに變り
 はない。と考へ定めた吾輩はにやあく／＼と甘へる如く訴ふるが如く、或は又怨するが如く泣いて
 見た。御三は一向顧みる景色がない。生れ付いての御多角だから人情に疎いのはとうから承知の
 上だが、そこをうまく泣き立て、同情を起させるのが、こつちの手際である。今度はにや／＼
 とやつて見た。其泣き聲は吾ながら悲壯の音を帯びて天涯の遊子をして斷腸の思あらしむるに足
 ると信ずる。御三は恬として顧みない。此女は聾なのかも知れない。聾では下女が勤まる譯がな
 いが、ことによると猫の聲丈には聾なのだらう。世の中には色盲といふのがあつて、當人は完全
 な視力を具へて居る積でも、醫者から云はせると片輪ださうだが、此御三は聾盲なのだらう。聾
 盲だつて片輪に違ない。片輪のくせにいやに横風なものだ。夜中などでも、いくら此方が用があ
 るから開けてくれると云つても決して開けてくれた事がない。たまに出してくれたいと思ふと今度
 はどうしても入れて呉れない。夏だつて夜露は毒だ。況んや霜に於てをやで、軒下に立ち明かし
 て日の出を待つのは、どんなに辛いか到底想像が出来るものではない。此間しめ出しを食つた時
 などは野良犬の襲撃を蒙つて、既に危うく見えた所を、漸くの事で物置の家根へかけ上つて、終
 夜顛へつゞけた事さへある。是等は皆御三の不人情から胚胎した不都合である。こんなものを相
 手にして泣いて見せたつて、感應のある筈はないのだが、そこが、ひもじい時の神頼み、貧のぬ
 すみに戀のふみと云ふ位だから、大抵の事ならやる氣になる。にや／＼と三度目には、注
 意を喚起する爲めにことさらに複雑なる泣き方をして見た。自分ではベトエンのシンフォニーに
 も劣らざる美妙の音と確信して居るのだが御三には何等の影響も生じない様だ。御三は突然膝を
 ついて、揚げ板を一枚はね除けて、中から堅炭の四寸許り長いのを一本つかみ出した。それから
 其長い奴を七輪の角でぼん／＼と敲いたら、長いのが三つ程に碎けて近所は炭の粉で眞黒くなつ
 た。少々は汁の中へ這入つたらしい。御三はそんな事に頓着する女ではない。直ちにくだけた
 る三個の炭を鍋の尻から七輪の中へ押し込んだ。到底吾輩のシンフォニーには耳を傾けさうにも
 ない。仕方がないから悄然と茶の間の方へ引きかへさうとして風呂場の横を通り過ぎると、こゝ

き上がりつて流れだした米の汁が、かさ／＼に幾條となくこびり付いて、あるものは吉野紙を貼り
 つけた如くに見える。もう飯も汁も出来て居るのだから食はせてもよさうなものだと思つた。
 こんな時に遠慮するのは詰らない話だ、よしんば自分の望通りにならなくつたつて元々で損は行
 かないのだから、思ひ切つて朝飯の催促をしてやらう、いくら居候の身分だつてひもじいに變り
 はない。と考へ定めた吾輩はにやあく／＼と甘へる如く訴ふるが如く、或は又怨するが如く泣いて
 見た。御三は一向顧みる景色がない。生れ付いての御多角だから人情に疎いのはとうから承知の
 上だが、そこをうまく泣き立て、同情を起させるのが、こつちの手際である。今度はにや／＼
 とやつて見た。其泣き聲は吾ながら悲壯の音を帯びて天涯の遊子をして斷腸の思あらしむるに足
 ると信ずる。御三は恬として顧みない。此女は聾なのかも知れない。聾では下女が勤まる譯がな
 いが、ことによると猫の聲丈には聾なのだらう。世の中には色盲といふのがあつて、當人は完全
 な視力を具へて居る積でも、醫者から云はせると片輪ださうだが、此御三は聾盲なのだらう。聾
 盲だつて片輪に違ない。片輪のくせにいやに横風なものだ。夜中などでも、いくら此方が用があ
 るから開けてくれると云つても決して開けてくれた事がない。たまに出してくれたいと思ふと今度

は今女の子が三人で顔を洗つてる最中で、なか／＼繁昌して居る。

顔を洗ふと云つた所で、上の二人が幼稚園の生徒で、三番目は姉の尻についてさへ行かれない位小さいのだから、正式に顔が洗へて器用に御化粧が出来る筈がない。一番小さいのがバケツの中から濡れ雑巾を引きずり出して頻りに顔中撫で廻はして居る。雑巾で顔を洗ふのは定めし心持ちがわるからうけれども、地震がゆる度におもしろいわと云ふ子だから此位の事はあつても驚るくに足らん。ことによると八木獨仙君より悟つて居るかも知れない。さすがに長女は長女丈に、姉を以て自ら任じて居るから、うがひ茶碗をから／＼かんと抛出して「坊やちゃん、それは雑巾よ」と雑巾をとりにかゝる。坊やちゃんも中々自信家だから容易に姉の云ふ事なんか聞きさうにもない。「いやーよ、ばぶ」と云ひながら雑巾を引つ張り返した。此ばぶなる語は如何なる意義で、如何なる語源を有して居るか、誰も知つて居るものがない。只此坊やちゃんが痲癩を起した時に折々御使用になる許りだ。雑巾は此時姉の手と坊やちゃんの手で左右に引つ張られるから、水を含んだ真中からぼた／＼雫が垂れて、容赦なく坊やの足にかゝる、足丈なら我慢するが膝のあたりがしたゝか濡れる。坊やは是でも元祿を着て居るのである。元祿とは何の事だとだん／＼聞

いて見ると、中形の模様なら何でも元祿ださうだ。一體だれに教はつて来たものか分らない。

「坊やちゃん、元祿が濡れるから御よしなさい、ね」と姉が洒落れた事を云ふ。其癖此姉はついで此間迄元祿と雙六とを間違へて居た物識りである。

元祿で思ひ出したから序に喋舌つて仕舞ふが、この子供の言葉ちがひをやる事は夥しいもので、折々人を馬鹿にした様な間違を云つて居る。火事で葺が飛んで来たり、御茶の味噌の女學校へ行つたり、恵比壽、臺所と並べたり、或る時杯は「わたしや薬店の子ぢやないわ」と云ふから、よく聞き糺して見ると裏店と薬店を混同して居たりする。主人はこんな間違を聞く度に笑つて居るが、自分が學校へ出て英語を教へる時杯は、是よりも滑稽な誤謬を眞面目になつて、生徒に聞かせるのだらう。

坊やは——當人は坊やとは云はない、いつでも坊ばと云ふ——元祿が濡れたのを見て「元どこがべたい」と云つて泣き出した。元祿が冷たくては大變だから、御三が臺所から飛び出して来て、雑巾を取上げて着物を拭いてやる。此騒動中比較的静かであつたのは、次女のすん子嬢である。すん子嬢は向ふむきになつて棚の上から轉がり落ちた、御白粉の瓶をあけて、しきりに御化粧を

なければ、見逃してくれる事もあらうと、詰まらない事を頼みにして寝て居た所、中々許しさうもない。然し第一回の聲は敷居の上で、少くとも一間の間隔があつたから、まづ安心と腹のうちで思つて居ると、とんと突いた筈が何でも三尺位の距離に迫つて居たには一寸驚いた。のみならず第二の「まだなんですか、あなた」が距離に於ても音量に於ても前よりも倍以上の勢を以て夜具のなか迄聞えたから、こいつは駄目だと覺悟をして、小さな聲でうんと返事をした。

「九時迄に入らつしやるのでせう。早くなさらないと間に合ひませんよ」

「そんなには言はなくても今起きる」と夜着の袖口から答へたのは奇觀である。妻君はいつでも此手を食つて起きるかと思つて安心してゐると、又寝込まれつけて居るから、油断は出来ない。「さあ御起きなさい」とせめ立てる。起ると云ふのに、猶起きると責めるのは氣に食はん者だ。主人の如き我儘者には猶氣に食はん。是に於てか主人は今迄頭から被つて居た夜着を一度に跳ねのけた。見ると大きな眼を二つとも開いて居る。

「何だ騒々しい。起きると云へば起きるのだ」

「起きると仰やつても御起きなさらんぢやありませんか」

施して居る。第一に突つ込んだ指を以て鼻の頭をキューと撫でたから堅に一本白い筋が通つて、鼻のありかど聊か分明になつて來た。次に塗りつけた指を轉じて頬の上を摩擦したから、そこへもつてきて、是亦白いかたまりが出来上つた。是丈裝飾が整つた所へ、下女が這入つて來て坊ばの着物を拭いた序に、すん子の顔もふいて仕舞つた。すん子は少々不満の體に見えた。

吾輩は此光景を横に見て、茶の間から主人の寢室迄來てもう起きたかとひそかに様子をやうかどつて見ると、主人の頭がどこにも見えない。其代り十文半の甲の高い足が、夜具の裾から一本食み出して居る。頭が出て居て起こされる時に迷惑だと思つて、かくもぐり込んだのであらう。龜の子の様な男である。所へ書齋の掃除をしてしまつた妻君が又筈とはたきを擔いでやつてくる。最前の様に襖の入口から

「まだ御起きにならないのですか」と聲をかけたまゝ、しばらく立つて、首の出ない夜具を見つめて居た。今度も返事がない。細君は入口から二歩ばかり進んで、筈をとんと突きながら「まだなんですか、あなた」と重ねて返事を承はる。此時主人は既に目が覺めて居る。覺めて居るから、細君の襲撃にそなふる爲め、あらかじめ夜具の中に首諸共立て籠つたのである。首さへ出さ

八つちやんの泣き聲を聞いた主人は、朝つばらから餘程癩癩が起つたと見えて、忽ちがばと蒲團の上に取り直つた。かうなると精神修養も八木獨仙も何もあつたものぢやない。起き直りながら両方の手でゴシ／＼と表皮のむける程、頭中引き掻き廻はす。一ヶ月も溜つて居るフケは遠慮なく、頸筋やら、寝巻の襟へ飛んでくる。非常な壯觀である。髯はどうだを見ると是は又驚ろくべく、びん然とおつ立つて居る。持主が怒つて居るのに髯丈落ち付いて居ては濟まない

早手廻しに八つちやんは泣いて居るのである。かうなると主人が八つちやんだか、八つちやんが主人だか判然しなくなる。主人にあてつけるに手数は掛らない、一寸八つちやんに劍突を食はせれば何の苦もなく、主人の横面を張つた譯になる。昔し西洋で犯罪者を所刑にする時に、本人が國境外に逃亡して、捕へられん時は、偶像をつくつて人間の代りに火あぶりにしたと云ふが、彼等のうちにも西洋の故事に通曉する軍師があると見えて、うまい計略を授けたものである。落雲館といひ、八つちやんの御袋と云ひ、腕のきかぬ主人にとつては定めし苦手であらう。其外苦手は色々ある。或は町内中悉く苦手かも知れんが、只今は關係がないから、漸々成し崩しに紹介致す事にする。

「誰がいつ、そんな嘘をついた」

「いつでもですわ」

「馬鹿を云へ」

「どつちが馬鹿だか分りやしない」と妻君ぶんとして箒を突いて枕元に立つて居る所は勇ましかつた。此時裏の車屋の子供、八つちやんが急に大きな聲をしてワ一と泣き出す。八つちやんは主人が怒り出しさへすれば必ず泣き出すべく、車屋のかみさんから命ぜられるのである。かみさんは主人が怒るたんびに八つちやんを泣かして小遣になるかも知れんが、八つちやんこそいゝ迷惑だ。こんな御袋を持つたが最後朝から晩迄泣き通しに泣いて居なくてはならない。少しは此邊の事情を察して主人も少々怒るのを差し控へてやつたら、八つちやんの壽命が少しは延びるだらうに、いくら金田君から頼まれたつて、こんな愚な事をするのは、天道公平君よりもはげしく御出になつて居る方だと鑑定してもよからう。怒るたんびに泣かせられる丈なら、まだ餘裕もあるけれども、金田君が近所のゴロツキを備つて今戸焼をきめ込むたびに、八つちやんは泣かねばならぬのである。主人が怒るか怒らぬか、まだ判然しないうちから、必ず怒るべきものと豫想して、

でも心得たものか、一本々に痛癢を起して、勝手次第の方角へ猛烈なる勢を以て突進して居る。是とても中々の見物である。昨日は鏡の手前もある事だから、大人しく獨乙皇帝陛下の眞似をして整列したのであるが、一晚寐れば訓練も何もあつた者ではない、直ちに本来の面目に歸つて思ひ思ひの出で立に居るのである。恰も主人の一夜作りの精神修養が、あくる日になると拭ふが如く奇麗に消え去つて、生れ付いての野猪的本領が直ちに全面を暴露し來るのと一般である。こんな亂暴な髻をもつて居る、こんな亂暴な男が、よくまあ今迄免職にもならず教師が勤まつたものだと思ふと、始めて日本の廣い事がわかる。廣ければこそ金田君や金田君の犬が人間として通用して居るのでもあらう。彼等が人間として通用する間は主人も免職になる理由がないと確信して居るらしい。いざとなれば巢鴨へ端書を飛ばして天道公平君に聞き合せて見ればすぐ分る事だ。此時主人は、昨日紹介した混沌たる太古の眼を精一杯に見張つて、向ふの戸棚を屹と見た。是は高さ一間を横に仕切つて上下共各二枚の袋戸をはめたものである。下の方の戸棚は、蒲團の裾とすれ／＼の距離にあるから、起き直つた主人が眼をあきさへすれば、天然自然こゝに視線がむく様に出來て居る。見ると模様を置いた紙が所々破れて妙な腸があからさまに見える。腸には

色々なのがある。あるものは活版摺で、あるものは肉筆である。あるものは裏返しで、あるものは逆さまである。主人は此腸を見ると同時に、何がかいてあるか讀みたくなつた。今迄は車屋のかみさんでも捕へて、鼻づらを松の木へこすりつけてやらう位に迄怒つて居た主人が、突然此反古紙を讀んで見たくなるのは不思議の様であるが、かう云ふ陽性の痛癢持ちには珍らしくない事だ。小供が泣くときに最中の一つもあてがへばすぐ笑ふと一般である。主人が昔し去る所の御寺に下宿してゐる時、襖一と重を隔て、尼が五六人居た。尼杯と云ふものは元來意地のわるい女のうちに尤も意地のわるいものであるが、この尼が主人の性質を見抜いたものと見えて自炊の鍋をたゞきながら、今泣いた鳥がもう笑つたと拍子を取つて歌つたさうだ、主人が尼が大嫌になつたのは此時からだと云ふが、尼は嫌にせよ全くそれに違ない。主人は泣いたり、笑つたり、嬉しがつたり、悲しがつたり人一倍もする代りに何れも長く續いた事がない。よく云へば執着がなく、心掛がむやみに轉ずるのだらうが、之を俗語に翻譯してやさしく云へば奥行のない、薄っ片の鼻つ張文強いだゞつ子である。既にだゞつ子である以上は、喧嘩をする勢で、むつくと刎ね起きた主人が急に氣を換へて袋戸の腸を讀みにかゝるのも尤と云はねばなるまい。第一に眼にとま

つたのが伊藤博文の逆か立ちである。上を見ると明治十一年九月廿八日とある。韓國統監も此時代から御布令の尻尾を追つ懸けてあるいて居たと見える。大將此時分は何をして居たんだらうと、讀めさうにない所を無理によむと大藏卿とある。成程えらいものだ。いくら逆か立ちしても大藏卿である。少し左の方を見ると今度は大藏卿横になつて晝寐をして居る。尤もだ。逆か立ちではさう長く続く氣遣はない。下の方に大きな木板で汝はと二字丈見える、あとが見たいが生憎露出して居らん。次の行には早くの二字丈出てゐる。こいつも讀みたいがそれぎりで手掛りがない。もし主人が警視廳の探偵であつたら、人のものでも構はずに引つべがすかも知れない。探偵と云ふものには高等な教育を受けたものがないから事實を擧げる爲には何でもする。あれは始末に行かないものだ。願くばもう少し遠慮をしてもらひたい。遠慮をしなければ事實は決して擧げさせない事にしたらよからう。聞く所によると彼等は羅織虚構を以て良民を罪に陥れる事さへあるさうだ。良民が金を出して雇つて置く者が、雇主を罪にする杯ときては是亦立派な氣狂である。次に眼を轉じて真中を見ると真中には大分縣が宙返りをしてゐる。伊藤博文でさへ逆か立ちをする位だから、大分縣が宙返りをするのは當然である。主人はこゝ迄讀んで来て、雙方へ握り拳をこしらへて、之を高く天井に向けて突きあげた。あくびの用意である。

此あくびが又鯨の遠吠の様に頗る變調を極めた者であつたが、それが一段落を告げると、主人はそのく〜と着物をきかへて顔を洗ひに風呂場へ出掛けて行つた。待ちかねた細君はいきなり蒲團をまくつて夜着を疊んで、例の通り掃除を始める。掃除が例の通りである如く、主人の顔の洗ひ方も十年一日の如く例の通りである。先日紹介をした如く依然としてが〜、げ〜、げ〜を持續して居る。やがて頭を分け終つて、西洋手拭を肩へかけて、茶の間へ出御になると、超然として長火鉢の横に座を占めた。長火鉢と云ふと櫛の如輪木か、銅の總落しで、洗髮の姉御が立膝で、長烟管を黒柿の縁へ叩きつける様を想見する諸君もないと限らないが、わが苦沙彌先生の長火鉢に至つては決してそんな意氣なものではない。何で造つたものか素人には見當のつかぬ位古雅なものである。長火鉢は拭き込んで、たら〜光る所が身上なのだが、此代物は櫛か櫻か桐か元來不明瞭な上に、殆んど布巾をかけた事がないのだから陰氣で引き立たざる事夥しい。こんなものを何處から買つて來たかと云ふと、決して買つた覺はない。そんなら貰つたのかと聞くと、誰も呉れた人はないさうだ。然らば盗んだのかと糺して見ると、何だか其邊が曖昧である。昔し

つたのが伊藤博文の逆か立ちである。上を見ると明治十一年九月廿八日とある。韓國統監も此時代から御布令の尻尾を追つ懸けてあるいて居たと見える。大將此時分は何をして居たんだらうと、讀めさうにない所を無理によむと大藏卿とある。成程えらいものだ。いくら逆か立ちしても大藏卿である。少し左の方を見ると今度は大藏卿横になつて晝寐をして居る。尤もだ。逆か立ちではさう長く続く氣遣はない。下の方に大きな木板で汝はと二字丈見える、あとが見たいが生憎露出して居らん。次の行には早くの二字丈出てゐる。こいつも讀みたいがそれぎりで手掛りがない。もし主人が警視廳の探偵であつたら、人のものでも構はずに引つべがすかも知れない。探偵と云ふものには高等な教育を受けたものがないから事實を擧げる爲には何でもする。あれは始末に行かないものだ。願くばもう少し遠慮をしてもらひたい。遠慮をしなければ事實は決して擧げさせない事にしたらよからう。聞く所によると彼等は羅織虚構を以て良民を罪に陥れる事さへあるさうだ。良民が金を出して雇つて置く者が、雇主を罪にする杯ときては是亦立派な氣狂である。次に眼を轉じて真中を見ると真中には大分縣が宙返りをしてゐる。伊藤博文でさへ逆か立ちをする位だから、大分縣が宙返りをするのは當然である。主人はこゝ迄讀んで来て、雙方へ握り拳をこしらへて、之を高く天井に向けて突きあげた。あくびの用意である。

此あくびが又鯨の遠吠の様に頗る變調を極めた者であつたが、それが一段落を告げると、主人はそのく〜と着物をきかへて顔を洗ひに風呂場へ出掛けて行つた。待ちかねた細君はいきなり蒲團をまくつて夜着を疊んで、例の通り掃除を始める。掃除が例の通りである如く、主人の顔の洗ひ方も十年一日の如く例の通りである。先日紹介をした如く依然としてが〜、げ〜、げ〜を持續して居る。やがて頭を分け終つて、西洋手拭を肩へかけて、茶の間へ出御になると、超然として長火鉢の横に座を占めた。長火鉢と云ふと櫛の如輪木か、銅の總落しで、洗髮の姉御が立膝で、長烟管を黒柿の縁へ叩きつける様を想見する諸君もないと限らないが、わが苦沙彌先生の長火鉢に至つては決してそんな意氣なものではない。何で造つたものか素人には見當のつかぬ位古雅なものである。長火鉢は拭き込んで、たら〜光る所が身上なのだが、此代物は櫛か櫻か桐か元來不明瞭な上に、殆んど布巾をかけた事がないのだから陰氣で引き立たざる事夥しい。こんなものを何處から買つて來たかと云ふと、決して買つた覺はない。そんなら貰つたのかと聞くと、誰も呉れた人はないさうだ。然らば盗んだのかと糺して見ると、何だか其邊が曖昧である。昔し

親類に隠居が居つて、其隠居が死んだ時、當分留守番を頼まれた事がある。所が其後一戸を構へて、隠居所を引き拂ふ際に、そこで自分のものゝ様に使つて居た火鉢を何の氣もなく、つい持つて来てしまつたのださうだ。少々たちが悪い様だ。考へるとたちが悪い様だがこんな事は世間に往々ある事だと思ふ。銀行家杯は毎日人の金をあつかひつけて居るうちに人の金が、自分の金の様に見えてくるさうだ。役人は人民の召使である。用事を辨じさせる爲めに、ある権限を委託した代理人の様なものだ。所が委任された権力を笠に着て毎日事務を處理して居ると、是は自分が所有して居る権力で、人民杯は之に就て何等の喙を容るゝ理由がないものだ杯と狂つてくる。こんな人が世の中に充滿して居る以上は長火鉢事件を以て主人に泥棒根性があると斷定する譯には行かぬ。もし主人に泥棒根性があるとすれば、天下の人にはみんな泥棒根性がある。

長火鉢の傍に陣取つて、食卓を前に控へたる主人の三面には、先刻雑巾で顔を洗つた坊ばと、御茶の味噌の學校へ行くといふと、御白粉蠟に指を突き込んだすん子が、既に勢揃をして朝飯を食つて居る。主人は一應此三女子の顔を公平に見渡した。とん子の顔は南蠻鐵の刀の鏢の様な輪廓を有して居る。すん子も妹丈に多少姉の面影を存して琉球塗の朱盆位な資格はある。只坊ばに至つては獨り異彩を放つて、面長に出来上つて居る。但し豎に長いのなら世間に其例もすくないが、此子のは横に長いのである。如何に流行が變化し易くつたつて、横に長い顔がはやる事はなからう。主人は自分の子ながらも、つくづく考へる事がある。これでも生長しなければならぬ。生長する所ではない、其生長の速かなる事は禪寺の筍が若竹に變化する勢で大きくなる。主人は又大きくなつたなと思ふたんに、後ろから追手にせまられる様な氣がしてひやくする。如何に空漠なる主人でも此三令嬢が女である位は心得て居る。女である以上はどうか片付なくてはならん位も承知して居る。承知して居る丈で片付ける手腕のない事も自覺して居る。そこで自分の子ながらも少しく持て餘して居る所である。持て餘す位なら製造しなければいゝのだが、そこが人間である。人間の定義を云ふと外に何にもない。只入らざる事を捏造して自ら苦しんで居る者だと云へば、夫で充分だ。

さすがに子供はえらい。是程おやぢが處置に窮してゐるとは夢にも知らず、樂しさうに御飯をたべる。所が始末におえないのは坊ばである。坊ばは當年とつて三歳であるから、細君が氣を利かして、食事のときには、三歳然たる小形の箸と茶碗をあてがふのだが、坊ばは決して承知しな

親類に隠居が居つて、其隠居が死んだ時、當分留守番を頼まれた事がある。所が其後一戸を構へて、隠居所を引き拂ふ際に、そこで自分のものゝ様に使つて居た火鉢を何の氣もなく、つい持つて来てしまつたのださうだ。少々たちが悪い様だ。考へるとたちが悪い様だがこんな事は世間に往々ある事だと思ふ。銀行家杯は毎日人の金をあつかひつけて居るうちに人の金が、自分の金の様に見えてくるさうだ。役人は人民の召使である。用事を辨じさせる爲めに、ある権限を委託した代理人の様なものだ。所が委任された権力を笠に着て毎日事務を處理して居ると、是は自分が所有して居る権力で、人民杯は之に就て何等の喙を容るゝ理由がないものだ杯と狂つてくる。こんな人が世の中に充滿して居る以上は長火鉢事件を以て主人に泥棒根性があると斷定する譯には行かぬ。もし主人に泥棒根性があるとすれば、天下の人にはみんな泥棒根性がある。

長火鉢の傍に陣取つて、食卓を前に控へたる主人の三面には、先刻雑巾で顔を洗つた坊ばと、御茶の味噌の學校へ行くといふと、御白粉蠟に指を突き込んだすん子が、既に勢揃をして朝飯を食つて居る。主人は一應此三女子の顔を公平に見渡した。とん子の顔は南蠻鐵の刀の鏢の様な輪廓を有して居る。すん子も妹丈に多少姉の面影を存して琉球塗の朱盆位な資格はある。只坊ばに至つては獨り異彩を放つて、面長に出来上つて居る。但し豎に長いのなら世間に其例もすくないが、此子のは横に長いのである。如何に流行が變化し易くつたつて、横に長い顔がはやる事はなからう。主人は自分の子ながらも、つくづく考へる事がある。これでも生長しなければならぬ。生長する所ではない、其生長の速かなる事は禪寺の筍が若竹に變化する勢で大きくなる。主人は又大きくなつたなと思ふたんに、後ろから追手にせまられる様な氣がしてひやくする。如何に空漠なる主人でも此三令嬢が女である位は心得て居る。女である以上はどうか片付なくてはならん位も承知して居る。承知して居る丈で片付ける手腕のない事も自覺して居る。そこで自分の子ながらも少しく持て餘して居る所である。持て餘す位なら製造しなければいゝのだが、そこが人間である。人間の定義を云ふと外に何にもない。只入らざる事を捏造して自ら苦しんで居る者だと云へば、夫で充分だ。

さすがに子供はえらい。是程おやぢが處置に窮してゐるとは夢にも知らず、樂しさうに御飯をたべる。所が始末におえないのは坊ばである。坊ばは當年とつて三歳であるから、細君が氣を利かして、食事のときには、三歳然たる小形の箸と茶碗をあてがふのだが、坊ばは決して承知しな

い。必ず姉の茶碗を奪ひ、姉の箸を引つたくつて、持ちあつかひ悪い奴を無理に持ちあつかつて居る。世の中を見渡すと無能無才の小人程、いやにのさばり出て柄にもない官職に登りたがるものだが、あの性質は全く此坊ば時代から萌芽して居るのである。其因つて来る所はかくの如く深いのだから、決して教育や薰陶で廢せる者ではないと、早くあきらめてしまふのがいい。

坊ばは隣りから分捕つた長大なる茶碗と、長大なる箸を専有して、しきりに暴威を擅にして居る。使ひこなせない者を無暗に使はうとするのだから、勢暴威を逞しくせざるを得ない。坊ばは先づ箸の根元を二本一所に握つた儘うんと茶碗の底へ突込んだ。茶碗の中は飯が八分盛り込まれて、其上に味噌汁が一面に漲つて居る。箸の力が茶碗へ傳はるや否や、今迄どうか、かうか、平均を保つて居たのが、急に襲撃を受けたので三十度許り傾いた。同時に味噌汁は容赦なくだら／＼と胸のあたりへこぼれだす。坊ばは其位な事で辟易する譯がない。坊ばは暴君である。今度は突き込んだ箸を、うんと力一杯茶碗の底から匆ね上げた。同時に小さな口を縁迄持つて行つて、匆ね上げられた米粒を這入る丈口の中へ受納した。打ち洩らされた米粒は黄色な汁と相和して鼻のあたまと頬つペタと頰とへ、やつと掛聲をして飛び付いた。飛び付き損じて疊の上へこぼれたものは打算の限りでない。随分無分別な飯の食ひ方である。吾輩は謹んで有名なる金田君及び天下の勢力家に忠告する。公等の他をあつかふ事、坊ばの茶碗と箸をあつかふが如くんば、公等の口へ飛び込む米粒は極めて僅少のものである。必然の勢を以て飛び込むにあらず、戸迷をして飛び込むのである。どうか御再考を煩はしたい。世故にたけた敏腕家にも似合しからぬ事だ。姉のとん子は、自分の箸と茶碗を坊ばに掠奪されて、不相應に小さな奴を以てさつきから我慢して居たが、もと／＼小さ過ぎるのだから、一杯にもつた積りでも、あんとあけると三口程で食つて仕舞ふ。従つて頻繁に御はちの方へ手が出る。もう四膳かへて、今度は五杯目である。とん子は御はちの蓋をあけて大きなしやもじを取り上げて、しばらく眺めて居た。是を食はうか、よさうかと迷つてゐたものらしいが、終に決心したものと見えて、焦げのなさうな所を見計つて一掬ひしやもじの上へ乗せた迄は無難であつたが、それを裏返して、ぐいと茶碗の上をこいたら、茶碗に入りきらん飯は塊まつた儘疊の上へ轉がり出した。とん子は驚ろく氣色もなく、こぼれた飯を鄭寧に拾ひ始めた。拾つて何にするかと思つたら、みんな御はちの中へ入れてしまつた。少しきたない様だ。

い。必ず姉の茶碗を奪ひ、姉の箸を引つたくつて、持ちあつかひ悪い奴を無理に持ちあつかつて居る。世の中を見渡すと無能無才の小人程、いやにのさばり出て柄にもない官職に登りたがるものだが、あの性質は全く此坊ば時代から萌芽して居るのである。其因つて来る所はかくの如く深いのだから、決して教育や薰陶で廢せる者ではないと、早くあきらめてしまふのがいい。

坊ばは隣りから分捕つた長大なる茶碗と、長大なる箸を専有して、しきりに暴威を擅にして居る。使ひこなせない者を無暗に使はうとするのだから、勢暴威を逞しくせざるを得ない。坊ばは先づ箸の根元を二本一所に握つた儘うんと茶碗の底へ突込んだ。茶碗の中は飯が八分盛り込まれて、其上に味噌汁が一面に漲つて居る。箸の力が茶碗へ傳はるや否や、今迄どうか、かうか、平均を保つて居たのが、急に襲撃を受けたので三十度許り傾いた。同時に味噌汁は容赦なくだら／＼と胸のあたりへこぼれだす。坊ばは其位な事で辟易する譯がない。坊ばは暴君である。今度は突き込んだ箸を、うんと力一杯茶碗の底から匆ね上げた。同時に小さな口を縁迄持つて行つて、匆ね上げられた米粒を這入る丈口の中へ受納した。打ち洩らされた米粒は黄色な汁と相和して鼻のあたまと頬つペタと頰とへ、やつと掛聲をして飛び付いた。飛び付き損じて疊の上へこぼれたものは打算の限りでない。随分無分別な飯の食ひ方である。吾輩は謹んで有名なる金田君及び天下の勢力家に忠告する。公等の他をあつかふ事、坊ばの茶碗と箸をあつかふが如くんば、公等の口へ飛び込む米粒は極めて僅少のものである。必然の勢を以て飛び込むにあらず、戸迷をして飛び込むのである。どうか御再考を煩はしたい。世故にたけた敏腕家にも似合しからぬ事だ。姉のとん子は、自分の箸と茶碗を坊ばに掠奪されて、不相應に小さな奴を以てさつきから我慢して居たが、もと／＼小さ過ぎるのだから、一杯にもつた積りでも、あんとあけると三口程で食つて仕舞ふ。従つて頻繁に御はちの方へ手が出る。もう四膳かへて、今度は五杯目である。とん子は御はちの蓋をあけて大きなしやもじを取り上げて、しばらく眺めて居た。是を食はうか、よさうかと迷つてゐたものらしいが、終に決心したものと見えて、焦げのなさうな所を見計つて一掬ひしやもじの上へ乗せた迄は無難であつたが、それを裏返して、ぐいと茶碗の上をこいたら、茶碗に入りきらん飯は塊まつた儘疊の上へ轉がり出した。とん子は驚ろく氣色もなく、こぼれた飯を鄭寧に拾ひ始めた。拾つて何にするかと思つたら、みんな御はちの中へ入れてしまつた。少しきたない様だ。

坊ばが一大活躍を試みて箸を刎ね上げた時は、丁度とん子が飯をよそひ了つた時である。さすがに姉は姉だけで、坊ばの顔の如何にも亂雑なのを見かねて「あら坊ばちゃん、大變よ、顔が御ぜん粒だらけよ」と云ひながら、早速坊ばの顔の掃除にとりかゝる。第一に鼻のあたりに寄寓して居たのを取拂ふ。取拂つて捨てると思の外、すぐ自分の口のなかへ入れて仕舞つたのには驚いた。それから頬つぺたにかゝる。こゝには大分群をなして數にしたなら、兩方を合せて約二十粒もあつたらう。姉は丹念に一粒づゝ取つては食ひ、取つては食ひ、とう／＼妹の顔中にある奴を一つ残らず食つてしまつた。此の時只今迄は大人しく澤庵をかぢつて居たすん子が、急に盛り立ての味噌汁の中から薩摩芋のくづれたのをしやくひ出して、勢よく口の内へ抛り込んだ。諸君も御承知であらうが、汁にした薩摩芋の熱したの程口の中に答へる者はない。大人ですら注意しないと火傷をした様な心持ちがする。ましてすん子の如き、薩摩芋に経験の乏しい者は無論狼狽する譯である。すん子はワツと云ひながら口中の芋を食卓の上へ吐き出した。その二三片がどう云ふ拍子か、坊ばの前迄すべつて来て、丁度いゝ加減な距離でとまる。坊ばは固より薩摩芋が大好きである。大好きな薩摩芋が眼の前へ飛んで来たのだから、早速箸を抛り出して、手攫みにしてむしやく／＼食つて仕舞つた。

先刻から此體たらくを目撃して居た主人は、一言も云はずに専心自分の飯を食ひ、自分の汁を飲んで此時は既に楊枝を使つて居る最中であつた。主人は娘の教育に關して絶體的放任主義を執る積りと見える。今に三人が海老茶式部か鼠式部かになつて、三人とも申し合せた様に情夫をこしらへて出奔しても、矢張り自分の飯を食つて、自分の汁を飲んで澄まして見て居るだらう。働きのない事だ。然し今の世の働きのあると云ふ人を拜見すると、嘘をついて人を釣る事と、先へ廻つて馬の眼玉を抜く事と、虚勢を張つて人をおどかす事と、鎌をかけて人を陥れる事より外に何も知らない様だ。中學杯の少年輩迄が見様見真似に、かうしなくては幅が利かないと心得違ひをして、本来なら赤面して然る可きのを得々と履行して未來の紳士だと思つて居る。是は働き手と云ふのではない。ごろつき手と云ふのである。吾輩も日本の猫だから多少の愛國心はある。こんな働き手を見る度に撲つてやりたくなる。こんなものが一人でも殖えれば國家はそれ丈け衰へる譯である。こんな生徒の居る學校は、學校の恥辱であつて、こんな人民の居る國家は國家の恥辱である。恥辱であるにも關らず、ごろ／＼世間にごろついて居るのは心得がたいと思ふ。日本

坊ばが一大活躍を試みて箸を刎ね上げた時は、丁度とん子が飯をよそひ了つた時である。さすがに姉は姉だけで、坊ばの顔の如何にも亂雑なのを見かねて「あら坊ばちゃん、大變よ、顔が御ぜん粒だらけよ」と云ひながら、早速坊ばの顔の掃除にとりかゝる。第一に鼻のあたりに寄寓して居たのを取拂ふ。取拂つて捨てると思の外、すぐ自分の口のなかへ入れて仕舞つたのには驚いた。それから頬つぺたにかゝる。こゝには大分群をなして數にしたなら、兩方を合せて約二十粒もあつたらう。姉は丹念に一粒づゝ取つては食ひ、取つては食ひ、とう／＼妹の顔中にある奴を一つ残らず食つてしまつた。此の時只今迄は大人しく澤庵をかぢつて居たすん子が、急に盛り立ての味噌汁の中から薩摩芋のくづれたのをしやくひ出して、勢よく口の内へ抛り込んだ。諸君も御承知であらうが、汁にした薩摩芋の熱したの程口の中に答へる者はない。大人ですら注意しないと火傷をした様な心持ちがする。ましてすん子の如き、薩摩芋に経験の乏しい者は無論狼狽する譯である。すん子はワツと云ひながら口中の芋を食卓の上へ吐き出した。その二三片がどう云ふ拍子か、坊ばの前迄すべつて来て、丁度いゝ加減な距離でとまる。坊ばは固より薩摩芋が大好きである。大好きな薩摩芋が眼の前へ飛んで来たのだから、早速箸を抛り出して、手攫みにしてむしやく／＼食つて仕舞つた。

先刻から此體たらくを目撃して居た主人は、一言も云はずに専心自分の飯を食ひ、自分の汁を飲んで此時は既に楊枝を使つて居る最中であつた。主人は娘の教育に關して絶體的放任主義を執る積りと見える。今に三人が海老茶式部か鼠式部かになつて、三人とも申し合せた様に情夫をこしらへて出奔しても、矢張り自分の飯を食つて、自分の汁を飲んで澄まして見て居るだらう。働きのない事だ。然し今の世の働きのあると云ふ人を拜見すると、嘘をついて人を釣る事と、先へ廻つて馬の眼玉を抜く事と、虚勢を張つて人をおどかす事と、鎌をかけて人を陥れる事より外に何も知らない様だ。中學杯の少年輩迄が見様見真似に、かうしなくては幅が利かないと心得違ひをして、本来なら赤面して然る可きのを得々と履行して未來の紳士だと思つて居る。是は働き手と云ふのではない。ごろつき手と云ふのである。吾輩も日本の猫だから多少の愛國心はある。こんな働き手を見る度に撲つてやりたくなる。こんなものが一人でも殖えれば國家はそれ丈け衰へる譯である。こんな生徒の居る學校は、學校の恥辱であつて、こんな人民の居る國家は國家の恥辱である。恥辱であるにも關らず、ごろ／＼世間にごろついて居るのは心得がたいと思ふ。日本

の人間は猫程の氣概もないと見える。情ない事だ。こんなごろつき手に比べると主人杯は遙かに上等な人間と云はなくてはならん。意氣地のない所が上等なのである。無能な所が上等なのである。猪口才でない所が上等なのである。

かくの如く働きのない食ひ方を以て、無事に朝食を済したる主人は、やがて洋服を着て、車へ乗つて、日本堤分署へ出頭に及んだ。格子をあけた時、車夫に日本堤といふ所を知つてるかと思つたら、車夫はへへと笑つた、あの遊廓のある吉原の近邊の日本堤だぜと念を押したのは少々滑稽であつた。

主人が珍らしく車で玄關から出掛けたあとで、妻君は例の如く食事を済ませて「さあ學校へ御いで。遅くなりませよ」と催促すると、小供は平氣なもので「あら、でも今日は御休みよ」と支度をする氣色がない。「御休みなもんですか、早くなさい」と叱かるように言つて聞かせると「それでも昨日、先生が御休だつて仰つてよ」と姉は中々動じない。妻君もこゝに至つて多少變に思つたものか、戸棚から曆を出して繰り返して見ると赤い字でちやんと御祭日と出て居る。主人は祭日とも知らずに學校へ缺勤届を出したのだらう。細君も知らずに郵便箱へ抛り込んだのだ

らう。但し迷亭に至つては實際知らなかつたのか、知つて知らん顔をしたのか、そこは少々疑問である。此發明におやと驚ろいた妻君は夫ちや、みんなで大人しく御遊びなさいと平生の通り針箱を出して仕事に取りかゝる。

其後三十分間は家内平穩、別段吾輩の材料になる様な事件も起らなかつたが、突然妙な人が御客に來た。十七八の女學生である。踵のまがつた靴を穿いて、紫色の袴を引きすつて、髪を算盤珠の様にふくらまして勝手口から案内も乞はずに上つて來た。是は主人の姪である。學校の生徒ださうだが、折々日曜にやつて來て、よく叔父さんと喧嘩をして歸つて行く雪江とか云ふ奇麗な名の御嬢さんである。尤も顔は名前程でもない、一寸表へ出て一二町あるけば必ず逢へる人相である。「叔母さん今日は」と茶の間へつかく這入つて來て、針箱の横へ尻を卸した。

「おや、早くから……」

「今日は大祭日ですから、朝のうちに一寸上がらうと思つて、八時半頃から家を出て急いで來たの」

「さう、何か用があるの？」

「いゝえ、たゞあんまり御無沙汰をしたから、一寸上がつたの」

「一寸でなくつていゝから、緩くり遊んで入らつしやい。今に叔父さんが歸つて來ますから」

「叔父さんは、もう、どこへか入らしたの。珍らしいのね」

「えゝ今日はね、妙な所へ行つたのよ。……警察へ行つたの、妙でせう」

「あら何で？」

「此春這入つた泥棒がつかまつたんだつて」

「夫で引き合に出されるの？いゝ迷惑ね」

「なあに品物が戻るのよ。取られたものが出たから取りに來いつて、昨日巡査がわざ／＼來たもんですから」

「おや、さう、それでなくつちや、こんなに早く叔父さんが出掛ける事はないわね、いつもなら今時分はまだ寝て入らつしやるんだわ」

「叔父さん程、寝坊はないんですから……さうして起こすとぶん／＼怒るのよ。今朝なんか七時迄に是非おこせと云ふから、起こしたんでせう。すると夜具の中へ潜つて返事もしないんで

すもの。こつちは心配だから二度目に又おこすと、夜着の袖から何か云ふのよ。本當にあきれ返つてしまふの」

「なぜそんなに眠いでせう。屹度神經衰弱なんでせう」

「何ですか」

「本當にむやみに怒る方ね。あれでよく學校が勤まるのね」

「なに學校ぢや大人しいんですつて」

「ぢや猶悪るいわ。まるで菟藟閣魔ね」

「なぜ？」

「なぜでも菟藟閣魔なの。だつて菟藟閣魔の様ぢやありませんか」

「只怒るばかりぢやないのよ。人が右と云へば左、左と云へば右で、何でも人の言ふ通りにした事がない、——そりや強情ですよ」

「天探女でせう。叔父さんはあれが道樂なのよ。だから何かさせ様と思つたら、うらを云ふと、此方の思ひ通りになるのよ。此間蝙蝠傘を買つてもらふ時にも、入らない、入らないつて、態と

云つたら、入らない事があるものかつて、すぐ買つて下すつたの」

「ホ、旨いのね。わたしも是からさうしやう」

「さうなさいよ。それでなくつちや損だわ」

「此間保険會社の人が来て、是非御這入んなさいつて、勧めて居るんでせう、——色々譯を言つて、かう云ふ利益があるの、あゝ云ふ利益があるのつて、何でも一時間も話をしたんですが、どうしても這入らないの。うちだつて貯蓄はなし、かうして小供は三人もあるし、せめて保険へでも這入つて呉れると餘つ程心丈夫なんですけれども、そんな事は少しも構はないんですもの」

「さうね、もしもの事があると不安心だわね」と十七八の娘に似合しからん世帯染みた言を云ふ。

「その談判を蔭で聞いて居ると、本當に面白いのよ。成程保険の必要も認めないではない。必要なものだから會社も存立して居るのだらう。然し死なゝい以上は保険に這入る必要はないぢやないかつて強情を張つて居るんです」

「叔父さんが？」

「えゝ、すると會社の男が、それは死なゝければ無論保險會社は要りません。然し人間の命と云ふものは丈夫な様で脆いもので、知らないうちに、いつ危険が逼つて居るかわかりませんと云ふとね、叔父さんは、大丈夫僕は死なゝい事に決心をして居るつて、まあ無法な事を云ふんですよ」

「決心したつて、死ぬわねえ。わたしなんか是非及第する積だつたけれども、とう／＼落第して仕舞つたわ」

「保險社員もさう云ふのよ。壽命は自分の自由にはなりません。決心で長が生きが出来るものなら、誰も死ぬものは御座いませんつて」

「保險會社の方が至當ですわ」

「至當でせう。夫がわからないの。いえ決して死なゝい。誓つて死なゝいつて威張るの」

「妙ね」

「妙ですとも、大妙ですわ。保險の掛金を出す位なら銀行へ貯金する方が遙かにましだつて澄まし切つて居るんですよ」

「貯金があるの？」

「あるもんですか。自分が死んだあとなんか、ちつとも構ふ考なんかないんですよ」
「本當に心配ね。なぜあんなんでせう、こゝへ入らつしやる方だつて、叔父さんの様なのは一人も居ないわね」
「居るものですか。無類ですよ」
「ちつと鈴木さんにでも頼んで意見でもして貰ふといふんですよ。あゝ云ふ穩やかな人だと餘つ程樂ですがねえ」
「所が鈴木さんは、うちぢや評判がわるいのよ」
「みんな逆なのね。それぢやあの方はいゝでせう——ほらあの落ち付いてる——」
「八木さん？」
「えゝ」
「八木さんには大分閉口して居るんですがね。昨日迷亭さんが来て悪口をいつたものだから、思つた程利かないかも知れない」
「だつていゝぢやありませんか。あんな風に鷹揚に落ち付いて居れば、——此間學校で演説をなすつたわ」
「八木さんが？」
「えゝ」
「八木さんは雪江さんの學校の先生なの」
「いゝえ、先生ぢやないけども、淑徳婦人會のときに招待して演説をして頂いたの」
「面白かつて？」
「さうね、そんなに面白くもなかつたわ。けども、あの先生が、あんな長い顔なんでせう。さうして天神様の様な髯を生やして居るもんだから、みんな感心して聞いて居てよ」
「御話つて、どんな御話なの」と妻君が聞きかけて居ると椽側の方から、雪江さんの話し聲をきゝつけて、三人の子供がどたばた茶の間へ亂入して來た。今迄は竹垣の外空地へ出て遊んで居たものであらう。

「あら雪江さんが來た」と二人の姉さんは嬉しさうに大きな聲を出す。妻君は「そんなに騒がないで、みんな静かにして御坐はりなさい。雪江さんが今面白い話をなさる所だから」と仕事を

隅へ片付ける。

「雪江さん何の御話し、わたし御話しが大好き」と云つたのはとん子で「矢つ張りかち／＼山の御話し？」と聞いたのはすん子である。「坊ばも御はなち」と云ひ出した三女は姉と姉の間から膝を前の方に出す。但し是は御話を承はると云ふのではない、坊ばも亦御話を仕ると云ふ意味である。「あら、又坊ばちゃんの話だ」と姉さんが笑ふと、妻君は「坊ばはあとでなさい。雪江さんの御話がすんでから」と嫌かして見る。坊ばは中々聞きさうにない。「いやーよ、ばぶ」と大きな聲を出す。「お、よし／＼坊ばちゃんからなさい。何と云ふの？」と雪江さんは謙遜した。

「あのね。坊たん、坊たん、どこ行くのつて」

「面白いのね。夫から？」

「わたちは田圃へ稲刈りに」

「さうよく知つてる事」

「御前がくうと邪魔になる」

「あら、くうとぢやないわ、くるとだわね」ととん子が口を出す。坊ばは相變らず「ばぶ」と一喝して直ちに姉を辟易させる。然し中途で口を出されたものだから、續きを忘れて仕舞つて、あとが出て来ない。「坊ばちゃん、それぎりなの？」と雪江さんが聞く。

「あのね。あとでおならは御免だよ。ぶう、ぶう／＼つて」

「ホ、ホ、いやだ事、誰にそんな事を、教はつたの？」

「御三に」

「わるい御三ね、そんな事を教へて」と妻君は苦笑をして居たが「さあ今度は雪江さんの番だ。坊ばは大人しく聞いて居るのですよ」と云ふと、流石の暴君も納得したと見えて、それ限り當分の間は沈黙した。

「八木先生の演説はこんなだよ」と雪江さんがとう／＼口を切つた「昔ある辻の真中に大きな石地藏があつたんですつてね。所がそこが生憎馬や車を通る大變賑やかな場所だもんだから邪魔になつて仕様がないでね、町内のものが大勢寄つて、相談をしてどうして此石地藏を隅の方へ片付けたらよからうつて考へたんですつて」

「そりや本當にあつた話なの？」

「どうですか、そんな事は何とも仰しやらなくつてよ。——でみんなが色々相談をしたら、其町内で一番強い男が、そりや譯はありませんが、わたしが屹度片づけて見せますつて、一人で其辻へ行つて、兩肌を抜いで汗を流して引つ張つたけれども、どうしても動かないんですつて」

「餘つ程重い石地藏なのね」

「え、夫で其男が疲れて仕舞つて、うちへ歸つて寝て仕舞つたから、町内のものは又相談をしたんですね。すると今度は町内で一番利口な男が、私に任せて御覽なさい、一番やつて見ますからつて、重箱のなかへ牡丹餅を一杯入れて地藏の前へ来て、「こゝ迄御出で」と云ひながら牡丹餅を見せびらかしたんだつて、地藏だつて食意地が張つてるから牡丹餅で釣れるだらうと思つたら、少しも動かないんだつて。利口な男はこれではいけないと思つてね。今度は瓢箪へ御酒を入れて、其瓢箪を片手へぶら下げて、片手へ猪口を持つて又地藏さんの前へ来て、さあ飲みたくはないかね、飲みたければこゝ迄御出でと三時間ばかり、からかつて見たが矢張り動かないんですつて」

「雪江さん、地藏様は御腹が減らないの」ととん子がきくと「牡丹餅が食べたいな」とすん子が云つた。

「利口な人は二度共しくぢつたから、其次には質札を澤山こしらへて、さあ欲しいだらう、欲しければ取りに御出でと札を出したり引つ込ましたりしたが是も丸で盆に立たないんですつて。餘つ程頑固な地藏様なのよ」

「さうね。すこし叔父さんに似て居るわ」

「え、丸で叔父さんよ。仕舞に利口な人も愛想をつかしてやめて仕舞つたんですとさ。夫で其あとからね、大きな法螺を吹く人が出て、私なら屹度片づけて見せますから御安心なさいと左も容易い事の様に受合つたさうです」

「其法螺を吹く人は何をしたんです」

「それが面白いのよ。最初にはね巡査の服をきて、付け髭をして、地藏様の前へきて、こちらら、動かんと其方の爲にならんぞ、警察で棄て、置かんぞと威張つて見せたんですとさ。今の世に警察の假聲なんか使つたつて誰も聞きやしないわね」

「本當ね、それで地藏様は動いたの？」

「動くもんですか、叔父さんですもの」

「でも叔父さんは警察には大變恐れ入つて居るのよ」

「あらさう、あんな顔をして？それぢや、そんなに怖い事はないわね。けれども地藏様は動かないんですつて、平氣で居るんですとさ。それで法螺吹は大變怒つて、巡査の服を脱いで、付け髻を紙屑籠へ抛り込んで、今度は大金持ちの服装をして出て來たさうです。今の世で云ふと岩崎男爵の様な顔をするんですとさ。可笑しいわね」

「岩崎の様な顔つてどんな顔なの？」

「只大きな顔をするんでせう。さうして何もしないで、又何も云はないで地藏の周りを、大きな巻烟草をふかしながら歩行いて居るんですとさ」

「それが何になるの？」

「地藏様を烟に捲くんです」

「丸で嘶し家の洒落の様ね。首尾よく烟に捲いたの？」

「駄目ですわ、相手が石ですもの。胡魔化しも大抵にすればいゝのに、今度は殿下さまに化けて來たんだつて。馬鹿ね」

「へえ、其時分にも殿下さまがあるの？」

「有るんでせう。八木先生はさう仰やつてよ。慥かに殿下様に化けたんだつて、恐れ多い事だ化けて來たつて——第一不敬ぢやありませんか、法螺吹きの分際で」

「殿下つて、どの殿下さまなの？」

「どの殿下さまですか、どの殿下さまだつて不敬ですわ」

「さうね」

「殿下さまでも利かないでせう。法螺吹きも仕様がなから、とても私の手際では、あの地藏はどうする事も出來ませんと降參をしたさうです」

「いゝ氣味ね」

「えゝ、序に懲役にやればいゝのに。——でも町内のものは大層氣を揉んで、又相談を開いたんですが、もう誰も引き受けるものがないんで弱つたさうです」

「それで御仕舞？」

「まだあるのよ。一番仕舞に車屋とゴロツキを大勢雇つて、地藏様の周りをわい／＼騒いであ
るいたんです。只地藏様をいぢめて、居た／＼まれない様にすればい／＼と云つて、夜晝交替で騒ぐ
んだつて」

「御苦勞ですこと」

「それでも取り合はないんですとさ。地藏様の方も随分強情ね」

「それから、どうして？」と、心子が熱心に聞く。

「それからね、いくら毎日々々騒いでも験が見えないので、大分みんなが厭になつて来たんで
すが、車夫やゴロツキは幾日でも日當になる事だから喜んで騒いで居ましたとさ」

「雪江さん、日當つてなに？」と、心子が質問をする。

「日當と云ふのはね、御金の事なの」

「御金をもらつて何にするの？」

「御金を貰つてね。……ホ、ホ、いやな心子さんだ。——それで叔母さん、毎日毎晩から騒

ぎを爲て居ますとね。其時町内に馬鹿竹と云つて、何も知らない、誰も相手にしない馬鹿が居た
んですつてね。其馬鹿が此騒ぎを見て御前方は何でそんなに騒ぐんだ、何年か／＼つても地藏一つ
動かす事が出来ないのか、可哀想なものだ、と云つたさうですつて——」

「馬鹿の癖にえらいのね」

「中々えらい馬鹿なのよ。みんなが馬鹿竹の云ふ事を聞いて、物はためしだ、どうせ駄目だら
うが、まあ竹にやらして見様ぢやないかとそれから竹に頼むと、竹は一も二もなく引き受けたが、
そんな邪魔な騒ぎをしないでまあ静かにしろと車引やゴロツキを引き込まして飄然と地藏様の前
へ出て来ました」

「雪江さん飄然と、馬鹿竹の御友達？」と、心子が肝心な所で奇問を放つたので、細君と雪江

さんはどつと笑ひ出した。

「いゝえ御友達ぢやないのよ」

「ぢやなに？」

「飄然と云ふのはね。——云ひ様がないわ」

「飄然て、云ひ様がないの？」

「さうぢやないのよ、飄然と云ふのはね——」

「え、」

「そら多々良三平さんを知つてるでせう」

「え、山の芋を呉れてよ」

「あの多々良さん見た様子を云ふのよ」

「多々良さんは飄然なの？」

「え、まあさうよ。——夫で馬鹿竹が地藏様の前へ来て懐手をして、地藏様、町内のものが、あなたに動いてくれと云ふから動いてやんなさいと云つたら、地藏様は忽ちさうか、そんなら早くさう云へばいゝのに、とこのく動き出したさうです」

「妙な地藏様ね」

「夫れからが演説よ」

「まだあるの？」

「え、夫から八木先生がね、今日は御婦人の會であります、私が斯様な御話をわざ／＼致したのは少々考がある、かう申すと失禮かも知れませんが、婦人といふものは兎角物をするの正面から近道を通つて行かないで、却つて遠方から廻りくどい手段をとる弊がある。尤も是は御婦人に限つた事でない。明治の代は男子と雖、文明の弊を受けて多少女性的になつて居るから、よく入らざる手段と努力を費やして、是が本筋である、紳士のやるべき方針であると誤解して居るものが多い様だが、是等は開化の業に束縛された畸形兒である。別に論ずるに及ばん。只御婦人に在つては可成只今申した昔話を御記憶になつて、いざと云ふ場合にはどうか馬鹿竹の様な正直な了見で物事を處理して戴きたい。あなた方が馬鹿竹になれば夫婦の間、嫁姑の間に起る忌はしき葛藤の三分一は慥かに減ぜられるに相違ない。人間は魂膽があればある程、其魂膽が崇つて不幸の源をなすので、多くの婦人が平均男子より不幸なのは、全く此魂膽があり過ぎるかである。どうか馬鹿竹になつて下さい、と云ふ演説なの」

「へえ、それで雪江さんは馬鹿竹になる氣なの」

「やだわ、馬鹿竹だなんて。そんなものになり度はないわ。金田の富子さんなんぞは失敬だつ

て大變怒つてよ」

「金田の富子さんて、あの向横町の？」

「え、あのハイカラさんよ」

「あの人も雪江さんの學校へ行くの？」

「い、え、只婦人會だから傍聴に來たの。本當にハイカラね。どうも驚ろいちまふわ」

「でも大變いゝ器量だつて云ふぢやありませんか」

「並ですわ。御自慢程ぢやありませんよ。あんなに御化粧をすれば大抵の人はよく見えるわ」

「それぢや雪江さんなどは其かたの様に御化粧をすれば金田さんの倍位美しくなるでせう」

「あらいやだ。よくつてよ。知らないわ。だけど、あの方は全くつくり過ぎるのね。なんぼ御

金があつたつて——」

「つくり過ぎてても御金のある方がいゝぢやありませんか」

「それもさうだけれども——あの方こそ、少し馬鹿竹になつた方がいゝでせう。無暗に威張るんですもの。此間もなんとか云ふ詩人が新體詩集を捧げたつて、みんなに吹聴して居るんですもの」

の」

「東風さんでせう」

「あら、あの方が捧げたの、餘つ程物數奇ね」

「でも東風さんは大變眞面目なんですよ。自分ぢや、あんな事をするのが當前だと迄思つてるんですもの」

「そんな人があるから、いけないんですよ。——夫からまだ面白い事があるの。此間だれか、

あの方の所へ艶書を送つたものがあるんだつて」

「おや、いやらしい。誰なの、そんな事をしたのは」

「誰だかわからないんだつて」

「名前はないの？」

「名前はちやんと書いてあるんだけれども聞いた事もない人だつて、さうして夫が長い——一
間許もある手紙でね。色々な妙な事がかいてあるんですとさ。私があなを戀つて居るのは、丁
度宗教家が神にあこがれて居る様なものだの、あなたの爲ならば祭壇に供へる小羊となつて屠ら

れるのが無上の名譽であるの、心臓の形が三角で、三角の中心にキューピッドの矢が立つて、吹き矢なら大當りであるの……」

「そりや眞面目なの？」

「眞面目なんですとさ。現にわたしの御友達のうちで其手紙を見たものが三人あるんですもの」「いやな人ね、そんなものを見せびらかして。あの方は寒月さんの所へ御嫁に行く積なんだから、そんな事が世間へ知れちや困るでせうにね」

「困るどころですか大得意よ。こんだ寒月さんが來たら知らして上げたらいゝでせう。寒月さんも丸で御存じないんでせう」

「どうですか、あの方は學校へ行つて球ばかり磨いて居らつしやるから、大方知らないでせう」

「寒月さんは本當にあの方を御貰になる氣なんでせうかね。御氣の毒だわね」

「なぜ？御金があつて、いざつて時に力になつて、いゝぢやありませんか」

「叔母さんは、ぢきに金、金つて品がわるいのね。金より愛の方が大事ぢやありませんか。愛がなければ夫婦の關係は成立しやしないわ」

「さう、それぢや雪江さんは、どんな所へ御嫁に行くの？」

「そんな事知るもんですか、別に何もありませんもの」

雪江さんと叔母さんは結婚事件に就て何か辯論を逞しくして居ると、さつきから、分らないなりに謹聽して居るとん子が突然口を開いて「わたしも御嫁に行きたいな」と云ひだした。此無鐵砲な希望には、さすが青春の氣に満ちて、大に同情を寄すべき雪江さんも一寸毒氣を抜かれた體であつたが、細君の方は比較的平氣に構へて「どこへ行きたいの」と笑ながら聞いて見た。

「わたしねえ、本當はね、招魂社へ御嫁に行きたいんだけど、水道橋を渡るのがいやだから、どうしやうかと思つてるの」

細君と雪江さんは此名答を得て、あまりの事に問ひ返す勇氣もなく、どつと笑ひ崩れた時に、次女のすん子が姉さんに向つて斯様な相談を持ちかけた。

「御ねえ様も招魂社がすき？わたしも大すき。一所に招魂社へ御嫁に行きませう。ね？いや？いやなら好いわ。わたし一人で車へ乗つてさつきと行つちまふわ」

「坊ばも行くの」と遂には坊ばさん迄が招魂社へ嫁に行く事になつた。斯様に三人が顔を揃へ

て招魂社へ嫁に行けたら、主人も嘸樂であらう。

所へ車の音ががら／＼と前に留つたと思つたら、忽ち威勢のいゝ御歸りと云ふ聲がした。主人は日本堤分署から戻つたと見える。車夫が差出す大きな風呂敷包を下女に受け取らして、主人は悠然と茶の間へ這入つて来る。「やあ、来たね」と雪江さんに挨拶しながら、例の有名人長火鉢の傍へばかりと手に携へた徳利様のものを抛り出した。徳利様と云ふのは純然たる徳利では無論ない、と云つて花活とも思はれない、只一種異様の陶器であるから、已を得ず暫らくかやうに申したのである。

「妙な徳利ね、そんなものを警察から貰つて入らしつたの」と雪江さんが、倒れた奴を起しながら叔父さんに聞いて見る。叔父さんは、雪江さんの顔を見ながら、「どうだ、いゝ恰好だらう」と自慢する。

「いゝ恰好なの？それが？あんまりよかあないわ？油壺なんか何で持つて入らつしたの？」

「油壺なものか。そんな趣味のない事を云ふから困る」

「ぢや、なあに？」

「花活さ」

「花活にしちや、口が小さ過ぎて、いやに胴が張つてるわ」

「そこが面白いんだ。御前も無風流だな。丸で叔母さんと撰ぶ所なした。困つたものだな」と獨りで油壺を取り上げて、障子の方へ向けて眺めて居る。

「どうせ無風流ですわ。油壺を警察から貰つてくる様な真似は出来ないわ。ねえ叔母さん」叔母さんは夫れ所ではない、風呂敷包を解いて血眼になつて、盗難品を調べて居る。「おや驚ろいた泥棒も進歩したのね。みんな、解いて洗ひ張をしてあるわ。ねえちよいと、あなた」

「誰が警察から油壺を貰つてくるものか。待つてるのが退屈だから、あすこいらを散歩してゐるうちに掘り出して来たんだ。御前なんぞには分るまいが夫でも珍品だよ」

「珍品過ぎるわ。一體叔父さんはどこを散歩したの」

「どこつて日本堤界限さ。吉原へも這入つて見た。中々盛な所だ。あの鐵の門を觀た事があるかい。ないだらう」

「だれが見るもんですか。吉原なんて賤業婦の居る所へ行く因縁がありませんわ。叔父さんは

教師の身で、よくまあ、あんな所へ行かれたものねえ。本當に驚ろいてしまふわ。ねえ叔母さん、叔母さん」

「え、さうね。どうも品數が足りない様だ事。是でみんな戻つたんでせうか」

「戻らんのは山の芋ばかりさ。元來九時に出頭しろと云ひながら十一時迄待たせる法があるものか、是だから日本の警察はいかん」

「日本の警察がいけないつて、吉原を散歩しちや猶いけなわ。そんな事が知れると免職になつてよ。ねえ叔母さん」

「え、なるでせう。あなた、私の帯の片側がないんです。何だか足りないと思つたら」

「帯の片側位あきらめるさ。こつちは三時間も待たされて、大切な時間を半日潰してしまつた」と日本服に着替へて平氣に火鉢へもたれて油壺を眺めて居る。細君も仕方がないと諦めて、戻つた品を其儘戸棚へ仕舞込んで座に歸る。

「叔母さん此油壺が珍品ですとさ。きたないぢやありませんか」

「それを吉原で買つて入らしつたの？まあ」

「何がまあだ。分りもしない癖に」

「それでもそんな壺なら吉原へ行かなくつても、どこにだつて有るぢやありませんか」

「所がないんだよ。滅多に有る品ではないんだよ」

「叔父さんは随分石地藏ね」

「又子供の癖に生意氣を云ふ。どうも此頃の女學生は口が悪くつていかん。ちと女大學でも

讀むがい」

「叔父さんは保険が嫌でせう。女學生と保険とどつちが嫌なの？」

「保険は嫌ではない。あれは必要なものだ。未來の考のあるものは、誰でも這入る。女學生は

無用の長物だ」

「無用の長物でもいゝ事よ。保険へ這入つても居ない癖に」

「來月から這入る積だ」

「屹度？」

「屹度だとも」

人だつてそんな不人情な事は云やしない。ちつと馬鹿竹の眞似でもなさい」

「よくつてよ、どうせ無教育なんですから、何とでも仰しやい。人のものを還せだなんて、他

「驚ろいたな。没分曉で強情なんだから仕方がない。お前の學校ぢや論理學を教へないのか」

「そりや云ひましたわ。入らない事は入らないんですけれども、還すのは厭ですもの」

「お前が繰り返すから仕方がないさ。現に入らないと云つたぢやないか」

「叔父さんだつて同じ事はばかり繰り返して居るぢやありませんか」

「愚だな、同じ事はばかり繰り返して居る」

「だつて苛いわ」

「だつて、どうしたんだ」

「だつて」

「分らん事を言ふ奴だな。入らないと云ふから還せと云ふのに苛い事があるものか」

「入らない事は入らないんですけれども、苛いわ」

「入らないと云ふから、還せと云ふのさ。些とも苛くはない」

「あら、そりや、あんまりだわ。だつて苛いちやありませんか、折角買つて下すつて置きながら、還せなんて」

「そんなに入らなかつたのか？」

「え、蝙蝠傘なんか欲しくないわ」

「そんなら還すがい。丁度とん子が欲しがつてるから、あれを此方へ廻してやらう。今日持つて来たか」

「あら、そりや、あんまりだわ。だつて苛いちやありませんか、折角買つて下すつて置きながら、還せなんて」

「そんなに入らなかつたのか？」

「え、蝙蝠傘なんか欲しくないわ」

「そんなら還すがい。丁度とん子が欲しがつてるから、あれを此方へ廻してやらう。今日持つて来たか」

「あら、そりや、あんまりだわ。だつて苛いちやありませんか、折角買つて下すつて置きながら、還せなんて」

「そんなに入らなかつたのか？」

「え、蝙蝠傘なんか欲しくないわ」

「そんなら還すがい。丁度とん子が欲しがつてるから、あれを此方へ廻してやらう。今日持つて来たか」

「あら、そりや、あんまりだわ。だつて苛いちやありませんか、折角買つて下すつて置きながら、還せなんて」

「そんなに入らなかつたのか？」

「え、蝙蝠傘なんか欲しくないわ」

「そんなら還すがい。丁度とん子が欲しがつてるから、あれを此方へ廻してやらう。今日持つて来たか」

「あら、そりや、あんまりだわ。だつて苛いちやありませんか、折角買つて下すつて置きながら、還せなんて」

「そんなに入らなかつたのか？」

「え、蝙蝠傘なんか欲しくないわ」

「そんなら還すがい。丁度とん子が欲しがつてるから、あれを此方へ廻してやらう。今日持つて来たか」

「何の眞似をしる？」

「ちと正直に淡泊になさいと云ふんです」

「お前は愚物の癖に、いやに強情だよ。夫だから落第するんだ」

「落第したつて叔父さんに學資は出して貰やしないわ」

雪江さんは茲に至つて感に堪へざるものゝ如く、潸然として一掬の涙を紫の袴の上に落した。主人は茫乎として、其涙が如何なる心理作用に起因するかを研究するものゝ如く、袴の上と、俯つ向いた雪江さんの顔を見詰めて居た。所へお三が臺所から赤い手を敷居越に揃へて「お客さまが入らつしやいました」と云ふ。「誰が来たんだ」と主人が聞くと「學校の生徒さんで御座います」とお三は雪江さんの泣顔を横目に睨めながら答へた。主人は客間へ出て行く。吾輩も種取り兼人間研究の爲め、主人に尾して忍びやかに椽へ廻つた。人間を研究するには何か波瀾がある時を擇ばないと一向結果が出て來ない。平生は大方の人が大方の人であるから、見ても聞いても張合のない位平凡である。然しいざとなると此平凡が急に靈妙なる神秘的作用の爲にむくくと持ち上がつて奇な者、變なもの、妙な者、異な者、一と口に云へば吾輩猫共から見ても頗る後學にな

る様な事件が至る所に横風にあらはれてくる。雪江さんの紅涙の如きは正しく其現象の一つである。かくの如く不可思議、不可測の心を有して居る雪江さんも、細君と話をして居るうちは左程とも思はなかつたが、主人が歸つてきて油壺を抛り出すや否や、忽ち死龍に蒸汽唧筒を注ぎかけたる如く、勃然として其深奥にして窺知すべからざる、巧妙なる、美妙なる、奇妙なる、靈妙なる、麗質を、惜気もなく發揚し了つた。而して其麗質は天下の女性に共通なる麗質である。只惜しい事には容易にあらはれて來ない。否あらはれる事は二六時中間断なくあらはれて居るが、斯の如く顯著に灼然炳乎として遠慮なくあらはれて來ない。幸にして主人の様に吾輩の毛を稍ともすると逆さに撫でたがる旋毛曲りの奇特家が居つたから、かゝる狂言も拜見が出來たのであらう。主人のあとさへ付いてあるけば、どこへ行つても舞臺の役者は吾知らず動くに相違ない。面白い男を旦那様に戴いて、短かい猫の命のうちにも、大分多くの經驗が出來る。難有い事だ。今度のお客は何者であらう。

見ると年頃は十七八、雪江さんと追つゝ、返つゝの書生である。大きな頭を地の隙いて見える程刈り込んで團子つ鼻を顔の眞中にかためて、座敷の隅の方に控へて居る。別に是と云ふ特徴も

ないが頭蓋骨丈は頗る大きい。青坊主に刈つてさへ、あゝ大きく見えるのだから、主人の様に長く延ばしたら定めし人目を惹く事だらう。こんな頭にかぎつて學問はあまり出来ない者だとは、かねてより主人の持説である。事實はさうかも知れないが一寸見るとナポレオンの様で頗る偉観である。着物は通例の書生の如く、薩摩絣か、久留米がすりか又伊豫絣か分らないが、ともかくも絣と名づけられたる袴を袖短かに着こなして、下には襯衣も襦袢もない様だ。素裕や素足は意氣なものださうだが、此男のは甚だむさ苦しい感じを興へる。ことに疊の上に泥棒の様な親指を歴然と三つ迄印して居るのは全く素足の責任に相違ない。彼は四つ目の足跡の上へちやんと坐つて、さも窮屈さうに長しこまつて居る。一體かしてまるべきものが大人しく控へるのは別段氣にするにも及ばんが、毬栗頭のつんつるてんの亂暴者が恐縮して居る所は何となく不調和なものだ。途中で先生に逢つてさへ禮をしないのを自慢にする位の連中が、たとひ三十分でも人並に坐るのは苦しいに違ない。所を生れ得て恭謙の君子、盛徳の長者であるかの如く構へるのだから、當人の苦しいにかゝはらず傍から見ると大分可笑しいのである。教場もしくは運動場であんなに騒々しいものが、どうして斯様に自己を箝束する力を具へて居るかと思ふと、隣れにもあるが滑稽でもある。かうやつて一人宛相對になると、如何に愚駭なる主人と雖、生徒に對して幾分かの重みがある様に思はれる。主人も定めし得意であらう。塵積つて山をなすと云ふから、微々たる一生徒も多勢が聚合すると侮る可らざる團體となつて、排斥運動やストライキをし出かすかも知れない。是は丁度臆病者が酒を飲んで大膽になる様な現象であらう。衆を頼んで騒ぎ出すのは、人の氣に酔つ拂つた結果、正氣を取り落したるものと認めて差支あるまい。夫でなければ斯様に恐れ入ると云はんより寧ろ悄然として、自ら襖に押し付けられて居る位な薩摩絣が、如何に老朽だと云つて、苟めにも先生と名のつく主人を輕蔑し様がない。馬鹿に出来る譯がない。

主人は座布團を押しやりながら、「さあお敷き」と云つたが毬栗先生はかたくなつた儘「へえ」と云つて動かない。鼻の先に剝げかゝつた更紗の座布團が「御乗んなさい」とも何とも云はずに着席して居る後ろに、生きた大頭がつくねんと着席して居るのは妙なものだ。布團は乗る爲めの布團で見詰める爲に細君が勸工場から仕入れて來たのではない。布團にして敷かれずんば、布團は正しく其名譽を毀損せられたるもので、之を勧めたる主人も亦幾分か顔が立たない事になる。主人の顔を潰して迄、布團と睨めくらをして居る毬栗君は決して布團其物が嫌なのではない。實

ないが頭蓋骨丈は頗る大きい。青坊主に刈つてさへ、あゝ大きく見えるのだから、主人の様に長く延ばしたら定めし人目を惹く事だらう。こんな頭にかぎつて學問はあまり出来ない者だとは、かねてより主人の持説である。事實はさうかも知れないが一寸見るとナポレオンの様で頗る偉観である。着物は通例の書生の如く、薩摩絣か、久留米がすりか又伊豫絣か分らないが、ともかくも絣と名づけられたる袴を袖短かに着こなして、下には襯衣も襦袢もない様だ。素裕や素足は意氣なものださうだが、此男のは甚だむさ苦しい感じを興へる。ことに疊の上に泥棒の様な親指を歴然と三つ迄印して居るのは全く素足の責任に相違ない。彼は四つ目の足跡の上へちやんと坐つて、さも窮屈さうに長しこまつて居る。一體かしてまるべきものが大人しく控へるのは別段氣にするにも及ばんが、毬栗頭のつんつるてんの亂暴者が恐縮して居る所は何となく不調和なものだ。途中で先生に逢つてさへ禮をしないのを自慢にする位の連中が、たとひ三十分でも人並に坐るのは苦しいに違ない。所を生れ得て恭謙の君子、盛徳の長者であるかの如く構へるのだから、當人の苦しいにかゝはらず傍から見ると大分可笑しいのである。教場もしくは運動場であんなに騒々しいものが、どうして斯様に自己を箝束する力を具へて居るかと思ふと、隣れにもあるが滑稽でもある。かうやつて一人宛相對になると、如何に愚駭なる主人と雖、生徒に對して幾分かの重みがある様に思はれる。主人も定めし得意であらう。塵積つて山をなすと云ふから、微々たる一生徒も多勢が聚合すると侮る可らざる團體となつて、排斥運動やストライキをし出かすかも知れない。是は丁度臆病者が酒を飲んで大膽になる様な現象であらう。衆を頼んで騒ぎ出すのは、人の氣に酔つ拂つた結果、正氣を取り落したるものと認めて差支あるまい。夫でなければ斯様に恐れ入ると云はんより寧ろ悄然として、自ら襖に押し付けられて居る位な薩摩絣が、如何に老朽だと云つて、苟めにも先生と名のつく主人を輕蔑し様がない。馬鹿に出来る譯がない。

主人は座布團を押しやりながら、「さあお敷き」と云つたが毬栗先生はかたくなつた儘「へえ」と云つて動かない。鼻の先に剝げかゝつた更紗の座布團が「御乗んなさい」とも何とも云はずに着席して居る後ろに、生きた大頭がつくねんと着席して居るのは妙なものだ。布團は乗る爲めの布團で見詰める爲に細君が勸工場から仕入れて來たのではない。布團にして敷かれずんば、布團は正しく其名譽を毀損せられたるもので、之を勧めたる主人も亦幾分か顔が立たない事になる。主人の顔を潰して迄、布團と睨めくらをして居る毬栗君は決して布團其物が嫌なのではない。實

る様なものだと気が付いた主人は漸く口を開いた。

「君は何とか云つたけな」

「古井……」

「古井？古井何とかだね。名は」

「古井武右衛門」

「古井武右衛門——なる程、大分長い名だな。今の名ぢやない、昔の名だ。四年生だつたね」

「いゝえ」

「三年生か？」

「いゝえ、二年生です」

「甲組かね」

「乙です」

「乙なら、わたしの監督だね。さうか」と主人は感心して居る。實は此大頭は入學の當時から主人の眼について居るんだから、決して忘れる所ではない。のみならず、時々夢に見る位感銘

を云ふと、正式に坐つた事は祖父さんの法事の時の外は生れてから滅多にないので、先つきから既にしびれが切れかゝつて少々足の先は困難を訴へて居るのである。夫れにもかゝらず敷かない。布團が手持無沙汰に控へて居るにもかゝらず敷かない。主人がさあお敷きと云ふのに敷かない。厄介な毬栗坊主だ。此位遠慮するなら多人數集まつた時もう少し遠慮すればいゝのに、學校でもう少し遠慮すればいゝのに、下宿屋でもう少し遠慮すればいゝのに。すまじき所へ氣兼ねして、すべき時には謙遜しない、否大に狼藉を働らく。たちの悪い毬栗坊主だ。

所へ後ろの襖をすうと開けて、雪江さんが一碗の茶を恭しく坊主に供した。平生ならそらサエヂ、チーが出たと冷やかすのだが、主人一人に對してすら痛み入つて居る上へ、妙齡の女性が學校で覺え立ての小笠原流で、乙に氣取つた手つきをして茶碗を突き付けたのだから、坊主は大に苦悶の體に見える。雪江さんは襖をしめる時に後ろからにや／＼と笑つた。して見ると女は同年輩でも中々えらいものだ。坊主に比すれば遙かに度胸が据はつて居る。ことに先刻の無念にはらはらと流した一滴の紅涙のあとだから、此にや／＼が更に目立つて見えた。

雪江さんの引き込んだあとは、雙方無言の儘、しばらくの間は辛抱して居たが、是では業をす

した頭である。然し呑氣な主人は此頭と此古風な姓名とを連結して、其連結したものを又二年乙組に連結する事が出来なかつたのである。だから此夢に見る程感心した頭が自分の監督組の生徒である聞いて、思はずさうかと心の裏で手を拍つたのである。然し此大きな頭の、古い名の、而も自分の監督する生徒が何の爲めに今頃やつて来たのか頓と推諒出来ない。元來不人望な主人の事だから、學校の生徒杯は正月だらうが暮だらうが殆んど寄り付いた事がない。寄り付いたのは古井武右衛門君を以て嚙矢とする位な珍客であるが、其來訪の主意がわからんには主人も大に閉口して居るらしい。こんな面白くない人の家へ只遊びにくる譯もなからうし、又辭職勸告ならもう少し昂然と構へ込みさうだし、と云つて武右衛門君杯が一身上の用事相談がある筈がないし、どつちからどう考へても主人には分らない。武右衛門君の様子を見ると或は本人自身にすら、何でこゝ迄參つたのか判然しないかも知れない。仕方がないから主人からとう／＼表向に聞き出した。

「君遊びに来たのか」

「さうぢやないんです」

「それぢや用事かね」

「えゝ」

「學校の事かい」

「えゝ少し御話ししやうと思つて……」

「うむ。どんな事かね。さあ話し玉へ」と云ふと武右衛門君下を向いたぎり何にも言はない。元來武右衛門君は中學の二年生にしてよく辯ずる方で、頭の大きい割に腦力は發達して居らんが、喋舌る事に於ては乙組中鏘々たるものである。現に先達てコロンバスの日本譯を教へると云つて大に主人を困らしたは正に此武右衛門君である。其鏘々たる先生が、最前から吃の御姫様の様にもぢ／＼して居るのは、何か云はくのある事ではなくてはならん。單に遠慮のみとは到底受け取れない。主人も少々不審に思つた。

「話す事があるなら、早く話したらいゝぢやないか」

「少し話しにくい事で……」

「話しにくい？」と云ひながら主人は武右衛門君の顔を見たが、先方は依然として俯向になつ

「濱田に下宿料でも貸したのかい」
「何そんなものを貸したんぢやありません」
「ぢや何を貸したんだい」
「名前を貸したんです」
「濱田が君の名前を借りて何をしたんだい」
「艶書を送つたんです」
「何を送つた？」
「だから名前は廢して、投函役になると云つたんです」
「何だか要領を得んぢやないか。一體誰が何をしたんだい」
「艶書を送つたんです」
「艶書を送つた？誰に？」
「だから、話しにくいと云ふんです」
「ぢや君が、どこかの女に艶書を送つたのか」

てるから、何事とも鑑定が出来ない。已を得ず、語勢を變へて「いゝさ。何でも話すがいゝ。外に誰も聞いて居やしない。わたしも他言はしないから」と穩やかにつけ加へた。「話してもいゝでせうか？」と武右衛門君はまだ迷つて居る。
「いゝだらう」と主人は勝手な判断をする。
「では話しますが」と云ひかけて、毬栗頭をむくりと持ち上げて主人の方を一寸まぼしさうに見た。其眼は三角である。主人は頬をふくらまして朝日の煙を吹き出しながら一寸横を向いた。
「實はその……困つた事になつちまつて……」
「何が？」
「何がつて、甚だ困るもんですから、來たんです」
「だからさ、何が困るんだよ」
「そんな事をする考はなかつたんですけれども、濱田が貸せくと云ふもんですから……」
「濱田と云ふのは濱田平助かい」
「えゝ」

來たんです

「ぢや三人で共同してやつたんだね」
「え、ですけれども、あとから考へると、もしあらはれて退學にでもなると大變だと思つて、

「いゝえ、僕ぢやないんです」

「濱田が送つたのかい」

「濱田でもないんです」

「ぢや誰が送つたんだい」

「誰だか分らないんです」

「些とも要領を得ないな。では誰も送らんのかい」

「名前丈は僕の名なんです」

「名前丈は君の名だつて、何の事だか些とも分らんぢやないか。もつと條理を立てゝ話すがいい。元來其艶書を受けた當人はだれか」

「金田つて向横丁に居る女です」

「あの金田といふ實業家か」

「えゝ」

「で、名前丈貸したとは何の事だい」

「あすこの娘がハイカラで生意氣だから艶書を送つたんです。——濱田が名前がなくちやいけないつて云ひますから、君の名前をかけたつて云つたら、僕のぢやつまらない。古井武右衛門の方がいゝつて——それで、とう／＼僕の名を貸して仕舞つたんです」

「で、君はあすこの娘を知つてるのか。交際でもあるのか」

「交際も何もありやしません。顔なんか見た事ありません」

「亂暴だな。顔も知らない人に艶書をやるなんて、まあどう云ふ了見で、そんな事をしたんだい」

い

「只みんながあいつは生意氣で威張つてゐるつて云ふから、からかつてやつたんです」

「益、亂暴だな。ぢや君の名を公然とかいて送つたんだな」

「えゝ文章は濱田が書いたんです。僕が名前を貸して遠藤が夜あすこのうち迄行つて投函して

非常に心配して二三日は寐られないんで、何だか茫やりして仕舞ました」

「そりや又飛んでもない馬鹿をしたもんだ。それで文明中學二年生古井武右衛門とでもかいたのかい」

「いゝえ、學校の名なんか書きやしません」

「學校の名を書かない丈まあよかつた。是で學校の名が出て見るがいゝ。夫こそ文明中學の名譽に關する」

「どうでせう退校になるでせうか」

「さうさな」

「先生、僕のおやぢさんは大變八釜しい人で、夫にお母さんが繼母ですから、もし退校にでもならうもんなら、僕あ困つちまふです。本當に退校になるでせうか」

「だから滅多な眞似をしないがいゝ」

「する氣でもなかつたんですが、ついやつて仕舞つたんです。退校にならない様に出来ないでせうか」と武右衛門君は泣き出しさうな聲をして頻りに哀願に及んで居る。襖の蔭では最前から

細君と雪江さんがくすくす笑つて居る。主人は飽く迄も勿體ぶつて「さうさな」を繰り返して居る。中々面白い。

吾輩が面白いといふと、何がそんなに面白いと聞く人があるかも知れない。聞くのは尤もだ。

人間にせよ、動物にせよ、己を知るのは生涯の大事である。己を知る事が出来さへすれば人間も人間として猫より尊敬を受けてよらしい。其時は吾輩もこんないたづらを書くのは氣の毒だからすぐさま已めて仕舞ふ積りである。然し自分で自分の鼻の高さが分らないと同じ様に、自己の何物かは中々見當がつき悪くいと見えて、平生から輕蔑して居る猫に向つてさへ斯様な質問をかけるのであらう。人間は生意氣な様でも矢張り、どこか抜けて居る。萬物の靈だ杯とどこへでも萬物の靈を擔いであるかと思ふと、是しきの事實が理解出来ない。而も恬として平然たるに至つては些と一嘘を催したくなる。彼は萬物の靈を脊中へ擔いで、おれの鼻はどこにあるか教へてくれ、教へてくれと騒ぎ立てゝ居る。それなら萬物の靈を辭職するかと思ふと、どう致して死んでも放しさうにしない。此位公然と矛盾をして平氣で居られゝば愛嬌になる。愛嬌になる代りには馬鹿を以て甘じなくてはならん。

吾輩が此際武右衛門君と、主人と細君及雪江嬢を面白がるのは、單に外部の事件が鉢合せをして、其鉢合せが波動を乙な所に傳へるからではない。實は其鉢合せの反響が人間の心に個々別々の音色を起すからである。第一主人は此事件に對して寧ろ冷淡である。武右衛門君のおやぢさんが如何に八釜しくつて、おつかさんが如何に君を繼子あつかひに仕様とも、あんまり驚ろかない。驚ろく筈がない。武右衛門君が退校になるのは、自分が免職になるのは大に趣が違ふ。千人近くの生徒がみんな退校になつたら、教師も衣食の途に窮するかも知れないが、古井武右衛門君一人の運命がどう變化しやうと、主人の朝夕には殆んど關係がない。關係の薄い所には同情も自から薄い譯である。見ず知らずの人の爲めに眉をひそめたり、鼻をかんだり、嘆息をするのは、決して自然の傾向ではない。人間がそんなに情深い、思ひやりのある動物であるとは甚だ受け取りにくい。只世の中に生れて來た賦税として、時々交際の爲めに涙を流して見たり、氣の毒な顔を作つて見せたりする許りである。云はゞ胡魔化し性表情で、實を云ふと大分骨が折れる藝術である。此胡魔化しをうまくやるものを藝術的良心の強い人と云つて、是は世間から大變珍重される。だから人から珍重される人間程怪しいものはない。試して見ればすぐ分る。此點に於て主人は寧ろ拙な部類に屬すると云つてよろしい。拙だから、珍重されない。珍重されないから、内部の冷淡を存外隠す所もなく發表して居る。彼が武右衛門君に對して「さうさな」を繰り返して居るのでも這裏の消息はよく分る。諸君は冷淡だからと云つて、決して主人の様な善人を嫌つてはいけない。冷淡は人間の本來の性質であつて、其性質をかくさうと力めないのは正直な人である。もし諸君がかゝる際に冷淡以上を望んだら、夫こそ人間を買ひ被つたと云はなければならぬ。正直ですら拂底な世にそれ以上を豫期するのは、馬琴の小説から志乃や小文吾が抜けだして、向ふ三軒兩隣へ八犬傳が引き越した時でなくては、あてにならない無理な注文である。主人はまづ此位にして次には茶の間で笑つて居る女連に取りかゝるが、是は主人の冷淡を一步向へ跨いで、滑稽の領分に躍り込んで嬉しがつて居る。此女達には武右衛門君が頭痛に病んで居る艶書事件が、佛陀の福音の如く難有く思はれる。理由はない只難有い。強ひて解剖すれば武右衛門君が困るのが難有いのである。諸君、女に向つて聞いて御覽、「あなたは人が困るのを面白がつて笑ひますか」と。聞かれた人は此間を呈出した者を馬鹿と云ふだらう、馬鹿と云はなければ、わざとこんな問をかけて淑女の品性を侮辱したと云ふだらう。侮辱したと思ふのは事實かも知れないが、人

吾輩が此際武右衛門君と、主人と細君及雪江嬢を面白がるのは、單に外部の事件が鉢合せをして、其鉢合せが波動を乙な所に傳へるからではない。實は其鉢合せの反響が人間の心に個々別々の音色を起すからである。第一主人は此事件に對して寧ろ冷淡である。武右衛門君のおやぢさんが如何に八釜しくつて、おつかさんが如何に君を繼子あつかひに仕様とも、あんまり驚ろかない。驚ろく筈がない。武右衛門君が退校になるのは、自分が免職になるのは大に趣が違ふ。千人近くの生徒がみんな退校になつたら、教師も衣食の途に窮するかも知れないが、古井武右衛門君一人の運命がどう變化しやうと、主人の朝夕には殆んど關係がない。關係の薄い所には同情も自から薄い譯である。見ず知らずの人の爲めに眉をひそめたり、鼻をかんだり、嘆息をするのは、決して自然の傾向ではない。人間がそんなに情深い、思ひやりのある動物であるとは甚だ受け取りにくい。只世の中に生れて來た賦税として、時々交際の爲めに涙を流して見たり、氣の毒な顔を作つて見せたりする許りである。云はゞ胡魔化し性表情で、實を云ふと大分骨が折れる藝術である。此胡魔化しをうまくやるものを藝術的良心の強い人と云つて、是は世間から大變珍重される。だから人から珍重される人間程怪しいものはない。試して見ればすぐ分る。此點に於て主人

の困るのを笑ふのも事實である。であるとすれば、是から私の品性を侮辱する様な事を自分でして御目にかけますから、何とか云つちやいやよと断はるのと一般である。僕は泥棒をする。然し決して不道德と云つてはならん、若し不道德だ杯と云へば僕の顔へ泥を塗つたものである、僕を侮辱したものである、と主張する様なものだ。女は中々利口だ、考へに筋道が立つて居る。苟も人間に生れる以上は踏んだり、蹴たり、どやされたりして、而も人が振りむきもせぬ時、平気で居る覺悟が必用であるのみならず、唾を吐きかけられ、糞をたれかけられた上に、大きな聲で笑はれるのを快く思はなくしてはならない。それでなくては斯様に利口な女と名のつくものと交際出来ぬ。武右衛門先生も一寸したはづみから、飛んだ間違をして大に恐れ入つては居る様なものの、斯様に恐れ入つて居るものを蔭で笑ふのは失敬だと位は思ふかも知れないが、それは年が行かない稚氣といふもので、人が失禮をした時に怒るのを氣が小さいと先方では名づけるさうだから、さう云はれるのがいやなら大人しくするがよろしい。最後に武右衛門君の心行きを一寸紹介する。君は心配の權化である。彼の偉大なる頭腦はナポレオンのそれが功名心を以て充滿せるが如く、正に心配を以てはちきれんとして居る。時々其團子つ鼻がびく／＼動くのは心配が顔面

神経に傳つて、反射作用の如く無意識に活動するのである。彼は大きな鐵砲丸を飲み下した如く、腹の中に奈何ともすべからざる塊まりを抱いて、此兩三日處置に窮して居る。其切なさの餘り、別に分別の出所もないから監督と名のつく先生の所へ出向いたら、どうか助けてくれるだらうと思つて、いやな人の家へ大きな頭を下げにまかり越したのである。彼は平生學校で主人にからかつたり、同級生を煽動して主人を困らしたりした事は丸で忘れて居る。如何にからかはうとも困らせ様とも監督と名のつく以上は心配して呉れるに相違ないと信じて居るらしい。随分單純なものだ。監督は主人が好んでなつた役ではない。校長の命によつて已を得ず頂いて居る、云はゞ迷亭の叔父さんの山高帽子の種類である。只名前である。只名前ではどうする事も出来ない。名前がいざと云ふ場合に役に立つなら雪江さんは名前丈で見合が出来た譯だ。武右衛門君は嘗に我儘なるのみならず、他人は己れに向つて必ず親切でなくてはならんと云ふ、人間を買ひ被つた假定から出立して居る。笑はれる杯とは思ひも寄らなかつたらう。武右衛門君は監督の家へ来て、屹度人間について、一の眞理を發明したに相違ない。彼は此眞理の爲に將來益本當の人間になるだらう、人の心配には冷淡になるだらう、人の困る時には大きな聲で笑ふだらう。かくの如く

「虎の鳴き聲を聞いたつて詰らないぢやないか」

と云つて武右衛門君に軽く會釋をして椽側へ近い所へ座をしめた。

「上野へ行つて虎の鳴き聲を聞かうと思ふんです」

「つまらんぢやないか、夫より一寸御上り」

寒月君は到底遠方では談判不調と思つたものか、靴を脱いでのをく／＼上がつて來た。例の如く鼠色の、尻につきの中つたづぼんを穿いて居るが、是は時代の爲め、若しくは尻の重い爲めに破れたのではない、本人の辯解によると近頃自轉車の稽古を始めて局部に比較的多くの摩擦を興へるからである。未來の細君を以て矚目された本人へ文をつけた戀の仇とは夢にも知らず、「やあ」と云つて武右衛門君に軽く會釋をして椽側へ近い所へ座をしめた。

「實は一寸先生を誘ひに來たんですがね」

「どこへ行くんだい。又赤坂かい。あの方面はもう御免だ。先達は無闇にあるかせられて、足が棒の様になつた」

「今日は大丈夫です。久し振りに出ませんか」

「どこへ出るんだい。まあ御上がり」

主人は武右衛門君に「さうさな」を繰り返して居た所へ、先生と玄關から呼ばれたので、誰だらうと其方を見ると半分程筋違に障子から食み出して居る顔は正しく寒月君である。「おい、御這入り」と云つたぎり坐つて居る。

「御客ですか」と寒月君は矢張り顔半分で聞き返して居る。

「なに構はん、まあ御上がり」

にして天下は未來の武右衛門君を以て充たされるであらう。金田君及び金田令夫人を以て充たされるであらう。吾輩は切に武右衛門君の爲に瞬時も早く自覺して眞人間になられん事を希望するのである。然らずんば如何に心配するとも、如何に後悔するとも、如何に善に移るの心が切實なりとも、到底金田君の如き成功は得られんのである。否社會は遠からずして君を人間の居住地以外に放逐するであらう。文明中學の退校どころではない。

斯様に考へて面白いなと思つて居ると、格子ががら／＼とあいて、玄關の障子の蔭から顔が半分ぬうと出た。

「え、今ぢやいけません、是から方々散歩して夜十一時頃になつて、上野へ行くんです」
「へえ」

「すると公園内の老木は森々として物凄いでせう」

「さうさな、晝間より少しは淋しいだらう」

「夫で何でも成るべく樹の茂つた、晝でも人の通らない所を擇つてあるいて居ると、いつの間にか紅塵萬丈の都會に住んでる氣はなくなつて、山の中へ迷ひ込んだ様な心持ちになるに相違ないです」

「そんな心持ちになつてどうするんだい」

「そんな心持ちになつて、しばらく佇んで居ると忽ち動物園のうちで、虎が鳴くんです」

「さう旨く鳴くかい」

「大丈夫鳴きます。あの鳴き聲は晝でも理科大學へ聞える位なんですから、深夜閑寂として、四望人なく、鬼氣肌に逼つて、魑魅鼻を衝く際に……」

「魑魅鼻を衝くとは何の事だい」

「そんな事を云ふぢやありませんか、怖い時に」

「さうかな。あんまり聞かない様だが。夫で」

「夫で虎が上野の老杉の葉を悉く振ひ落す様な勢で鳴くでせう。物凄いでさあ」

「夫りや物凄いだらう」

「どうです冒険に出掛けませんか。屹度愉快だらうと思ふんです。どうしても虎の鳴き聲は夜なかに聞かなくつちや、聞いたとはいはれないだらうと思ふんです」

「さうさな」と主人は武右衛門君の哀願に冷淡である如く、寒月君の探検にも冷淡である。

此時迄黙然として虎の話に羨ましさうに聞いて居た武右衛門君は主人の「さうさな」で再び自分の身の上を思ひ出したと見えて、「先生、僕は心配なんです、どうしたらいいでせう」と又聞き返す。寒月君は不審な顔をして此大きな頭を見た。吾輩は思ふ仔細あつて一寸失敬して茶の間へ廻る。

茶の間では細君がくすくす笑ひながら、京焼の安茶碗に番茶を浪々と注いで、アンチモニの茶托の上へ載せて、

寒月君は夫とも知らず座敷で妙な事を話して居る。
 「先生障子を張り易へましたね。誰が張つたんです」
 「女が張つたんだ。よく張れて居るだらう」
 「え、中々うまい。あの時々御出になる御嬢さんが御張りになつたんですか」
 「うんあれも手傳つたのさ。此位障子が張れば嫁に行く資格はあると云つて威張つてるぜ」
 「へえ、成程」と云ひながら寒月君障子を見詰めて居る。
 「こつちの方は平ですが、右の端は紙が餘つて波が出来て居ますね」
 「あそこが張りたての所で、尤も経験の乏しい時に出来上つた所さ」
 「なる程、少し御手際が落ちますね。あの表面は超絶的曲線で到底普通のファンクションでは
 あらはせないです」と、理學者丈に六づかしい事を云ふと、主人は
 「さうさね」と好い加減な挨拶をした。
 此様子ではいつ迄嘆願をして居ても、到底見込がないと思ひ切つた武右衛門君は突然彼の偉大
 なる頭蓋骨を疊の上に押しつけて、無言の裡に暗に訣別の意を表した。主人は「歸るかい」と云

「雪江さん、憚りさま、之を出して来て下さい」
 「わたし、いやよ」
 「どうして」と細君は少々驚ろいた體で、笑ひをはたと留める。
 「どうしてでも」と雪江さんはいやに澄した顔を即席にこしらへて、傍にあつた讀賣新聞の上
 にのしかゝる様に眼を落した。細君はもう一應協商を始める。
 「あら妙な人ね。寒月さんですよ。構やしないわ」
 「でもわたし、いやなんですもの」と讀賣新聞の上から眼を放さない。こんな時に一字も讀め
 るものではないが、讀んで居ない杯とあばかれたら又泣き出すだらう。
 「ちつとも恥かしい事はないぢやありませんか」と今度は細君笑ひながら、わざと茶碗を讀賣
 新聞の上へ押しやる。雪江さんは「あら人の悪い」と新聞を茶碗の下から、抜かうとする拍子
 に茶托に引きかゝつて、番茶は遠慮なく新聞の上から疊の目へ流れ込む。「それ御覽なさい」と
 細君が云ふと、雪江さんは「あら大變だ」と臺所へ馳け出して行つた。雑巾でも持つてくる了見
 だらう。吾輩には此狂言が一寸面白かつた。

つた。武右衛門君は悄然として薩摩下駄を引きずつて門を出た。可愛想に、打ちやつて置くと巖頭の吟でも書いて華嚴瀧から飛び込むかも知れない。元を糺せば金田令嬢のハイカラと生意氣から起つた事だ。もし武右衛門君が死んだら、幽霊になつて令嬢を取り殺してやるがい。あんなものが世界から一人や二人消えてなくなつたつて、男子はすこしも困らない。寒月君はもつと令嬢らしいのを貰ふがい。

「先生ありや生徒ですか」

「うん」

「大變大きな頭ですね。學問は出来ますか」

「頭の割には出来ないがね、時々妙な質問をするよ。此間コロンバスを譯して下さいつて大に弱つた」

「全く頭が大きい過ぎますからそんな餘計な質問をするんでせう。先生何と仰やいました」

「えゝ？なあに好い加減な事を云つて譯してやつた」

「夫でも譯す事は譯したんですか、こりやえらい」

「小供は何でも譯してやらないと信用せんからね」

「先生も中々政治家になりましたね。然し今の様子では何だか非常に元氣がなくなつて、先生を困らせる様には見えないぢやありませんか」

「今日は少し弱つてるんだよ。馬鹿な奴だよ」

「どうしたんです。何だか一寸見た許りで非常に可哀想になりました。全體どうしたんです」

「なに愚な事さ。金田の娘に艶書を送つたんだ」

「え？あの頭がですか。近頃の書生は中々えらいもんですね。どうも驚ろいた」

「君も心配だらうが……」

「何些とも心配ぢやありません。却つて面白いです。いくら艶書が降り込んだつて大丈夫です」

「さう君が安心して居れば構はないが……」

「構はんですとも私は一向構ひません。然しあの頭が艶書をかいたと云ふには、少し驚ろきますね」

「それがさ冗談にしたんだよ。あの娘がハイカラで生意氣だからからかつてやらうつて、三人

が共同して……」

「三人が一本の手紙を金田の令嬢にやつたんですか。益奇談ですね。一人前の西洋料理を三人で食ふ様なものぢやありませんか」

「所が手分けがあるんだ。一人が文章をかく、一人が投函する、一人が名前を貸す。で今来たのが名前を貸した奴なんだがね。是が一番愚だね。しかも金田の娘の顔も見た事がないつて云ふんだぜ。どうしてそんな無茶な事が出来たものだらう」

「夫りや、近來の大出来ですよ。傑作ですね。どうもあの大頭が、女に文をやるなんて面白いぢやありませんか」

「飛んだ間違にならあね」

「なになつたつて構やしません、相手が金田ですもの」

「だつて君が貰ふかも知れない人だぜ」

「貰ふかも知れないから構はないんです。なあに、金田なんか、構やしません」

「君は構はなくつても……」

「なに金田だつて構やしません、大丈夫です」

「それなら夫でいゝとして、當人があとに成つて、急に良心に責められて、恐ろしくなつたものだから、大に恐縮して僕のうちへ相談に来たんだ」

「へえ、夫であんなに悄悄として居るんですか、氣の小さい子と見えますね。先生何とか云つて御遣んなすつたんでせう」

「本人は退校になるでせうかつて、夫を一番心配して居るのさ」

「何で退校になるんです」

「そんな悪い、不道德な事をしたから」

「何、不道德と云ふ程でもありませんやね。構やしません。金田ぢや名譽に思つて屹度吹聴して居ますよ」

「まさか」

「兎に角可愛想ですよ。そんな事をするのがわるいとしても、あんなに心配させちや、若い男を一人殺してしまひますよ。ありや頭は大きいが人相はそんなにわるくありません。鼻なんかび

くびくさせて可愛いです」

「君も大分迷亭見た様に呑気な事を云ふね」

「何、是が時代思潮です、先生はあまり昔し風だから、何でも六づかしく解釋なさるんです」

「然し愚ぢやないか、知りもしない所へ、いたづらに艶書を送るなんて、丸で常識をかい
ぢやないか」

「いたづらは、大概常識をかい居まさあ。救つて御やんなさい。功德になりますよ。あの容
子ぢや華嚴の瀧へ出掛ますよ」

「さうだな」

「さうなさい。もつと大きな、もつと分別のある大僧共がそれ所ぢやない、わるいたづらをし
て知らん面をして居ますよ。あんな子を退校させる位なら、そんな奴等を片つ端から放逐でもし
なくつちや不公平でさあ」

「それもさうだね」

「夫でどうです上野へ虎の鳴き聲をきゝに行くのは」

「虎かい」

「えゝ、聞きに行きませう。實は二三日中に一寸歸國しなければならぬ事が出来ましたから、
當分どこへも御伴は出来ませんから、今日は是非一所に散歩をしやうと思つて來たんです」

「さうか歸るのかい、用事でもあるのかい」

「えゝ一寸用事が出来たんです。——ともかくも出やうぢやありませんか」

「さう。それぢや出様か」

「さあ行きませう。今日は私が晚餐を奢りますから、——夫から運動をして上野へ行くと丁度
好い刻限です」と頻りに促がすものだから、主人も其氣になつて、一所に出掛けて行つた。あと
では細君と雪江さんが遠慮のない聲でげらげらからからと笑つて居た。

床の間の前に碁盤を中に据ゑて迷亭君と獨仙君が對坐して居る。

「たゞは遣らない。負けた方が何か奢るんだぜ。いゝかい」と迷亭君が念を押すと、獨仙君は例の如く山羊髯を引つ張りながら、かう云つた。

「そんな事をする、折角の清戯を俗了して仕舞ふ。かけ杯で勝負に心を奪はれては面白くない。成敗を度外に置いて、白雲の自然に岫を出で、冉冉たる如き心持ちで一局を了してこそ、個中の味はわかるものだよ」

「また来たね。そんな仙骨を相手にしちや少々骨が折れ過ぎる。宛然たる列仙傳中の人物だね」

「無絃の素琴を弾じさ」

「無線の電信をかけかね」

「とにかく、やらう」

「君が白を持つのかい」

「どつちでも構はない」

「流石に仙人丈あつて鷹揚だ。君が白なら自然の順序として僕は黒だね。さあ、來給へ。どこからでも來給へ」

「黒から打つのが法則だよ」

「成程。然らば謙遜して、定石にこゝいらから行かう」

「定石にそんなのはないよ」

「なくつても構はない。新奇發明の定石だ」

吾輩は世間が狭いから碁盤と云ふものは近來になつて始めて拜見したのだが、考へれば考へる程妙に出來て居る。廣くもない四角な板を狭苦しく四角に仕切つて、目が眩む程ごた／＼と黒白の石をならべる。さうして勝つたとか、負けたとか、死んだとか、生きたとか、あぶら汗を流して騒いで居る。高が一尺四方位の面積だ。猫の前足で掻き散らしても滅茶々々になる。引き寄せて結べば草の庵にて、解くればもとの野原なりけり。入らざるいたづらだ。懷手をして盤を眺め

て居る方が遙かに氣樂である。未も最初の三四十目は、石の並べ方では別段目障りにもならないが、いざ天下わけ目と云ふ間に覗いて見ると、いやはや御氣の毒な有様だ。白と黒が盤から、こぼれ落ちる迄に押し合つて、御互にギュー／＼云つて居る。窮屈だからと云つて、隣の奴にどいて貰ふ譯にも行かず、邪魔だと申して前の先生に退去を命ずる権利もなし、天命とあきらめて、ぢつとして身動きもせず、すくんで居るより外に、どうする事も出来ない。碁を發明したものは人間で、人間の嗜好が局面にあらはれるものとすれば、窮屈なる碁石の運命はせゝこましい人間の性質を代表して居ると云つても差支ない。人間の性質が碁石の運命で推知する事が出来るものとすれば、人間とは天空海淵の世界を、我からと縮めて、己れの立つ兩足以外には、どうあつても踏み出せぬ様に、小刀細工で自分の領分に繩張りをするのが好きなんだと斷言せざるを得ない。人間とは強ひて苦痛を求めるものであると一言に評してもよからう。

呑氣なる迷亭君と、禪機ある獨仙君とは、どう云ふ了見か、今日に限つて戸棚から古碁盤を引きずり出して、此暑苦しいいたづらを始めたのである。さすがに御兩人御揃ひの事だから、最初のうちは各自任意の行動をとつて、盤の上を白石と黒石が自由自在に飛び交はして居たが、盤の

廣さには限りがあつて、横堅の目盛りは一手毎に埋つて行くのだから、いかに呑氣でも、いかに禪機があつても、苦しくなるのは當り前である。

「迷亭君、君の碁は亂暴だよ。そんな所へ這入つてくる法はない」

「禪坊主の碁にはこんな法はないかも知れないが、本因坊の流儀ぢや、あるんだから仕方がないわ」

「然し死ぬ許りだぜ」

「臣死をだも辭せず、況んや幾肩をやと、一つ、かう行くかな」

「さう御出になつたと、よろしい。薫風南より來つて、殿閣微涼を生ず。かう、ついで置けば大丈夫なものだ」

「おや、ついでなのは、さすがにえらい。まさか、つぐ氣遣はなからうと思つた。ついで、くりやるな八幡鐘をと、かうやつたら、どうするかね」

「どうするも、かうするもないさ。一劔天に倚つて寒し——えゝ、面倒だ。思ひ切つて、切つて仕舞へ」

「やゝ、大變々々。そこを切られちや死んで仕舞ふ。おい冗談ぢやない。一寸待つた」

「それだから、先つきから云はん事ぢやない。かうなつてゐる所へは這入れるものぢやないんだ」

「這入つて失敬 仕り候。一寸此白をとつて呉れ玉へ」

「それも待つのかい」

「序に其隣りのも引き揚げて見てくれ給へ」

「Do you see the boy か。——なに君と僕の間柄ぢやないか。そんな水臭い事を言はずに、引き揚げてくれ給へな。死ぬか生きるかと云ふ場合だ。しばらく、しばらくつて花道から馳け出してくる所だよ」

「そんな事は僕は知らんよ」

「知らなくつてもいゝから、一寸どけ給へ」

「君さつきから、六返待つたをしたぢやないか」

「記憶のいゝ男だな。向後は舊に倍し待つたを仕り候。だから一寸どけ給へと云ふのだあね。」

君も餘ッ程強情だね。座禪なんかしたら、もう少し捌けさうなものだ」

「然し此石でも殺さなければ、僕の方は少し負けになりさうだから……」

「君は最初から負けても構はない流ぢやないか」

「僕は負けても構はないが、君には勝たしたくない」

「飛んだ悟道だ。相變らず春風影裏に電光をきつてるね」

「春風影裏ぢやない、電光影裏だよ。君のは逆だ」

「ハ、もう大抵逆になつていゝ時分だと思つたら、矢張り慥かな所があるね。それぢや仕方がないあきらめるかな」

「生死事大、無常迅速、あきらめるさ」

「アーメン」と迷亭先生今度は丸で關係のない方面へびしやりと一石を下した。

床の間の前で迷亭君と獨仙君が一生懸命に輸贏を争つて居ると、座敷の入口には、寒月君と東風君が相ならんで其傍に主人が黄色い顔をして坐つてゐる。寒月君の前に鯉節が三本、裸の儘の壘の上に行儀よく排列してゐるのは奇観である。

此鯨節の出處は寒月君の懷で、取り出した時は暖たかく、手のひらに感じた位、裸ながらぬくもつて居た。主人と東風君は妙な眼をして視線を鯨節の上に注いで居ると、寒月君はやがて口を開いた。

「實は四日許り前に國から歸つて來たのですが、色々用事があつて、方々馳けあるいてゐたものですから、つい上がられなかつたのです」

「さう急いでくるには及ばないさ」と主人は例の如く無愛嬌な事を云ふ。

「急いで來んでもいゝのですけれども、此おみやげを早く獻上しないと心配ですから」

「鯨節ぢやないか」

「え、國の名産です」

「名産だつて東京にもそんなのは有りさうだぜ」と主人は一番大きな奴を一本取り上げて、鼻の先へ持つて行つて臭ひをかいで見ると

「かいだつて、鯨節の善悪はわかりませんよ」

「少し大きいのが名産たる所以かね」

「まあ食べて御覽なさい」

「食べる事はどうせ食べるが、こいつは何だか先が缺けてるぢやないか」

「それだから早く持つて來ないと心配だと云ふのです」

「なぜ？」

「なぜつて、そりや鼠が食つたのです」

「そいつは危険だ。滅多に食ふとペストになるぜ」

「なに大丈夫、その位かぢつたつて害はありません」

「全體どこで噛つたんだい」

「船の中で」

「船の中？ どうして」

「入れる所がなかつたから、ヴィオリンと一所に袋のなかへ入れて、船へ乗つたら、其晩にやられました。鯨節だけなら、いゝのですけれども、大切なヴィオリンの胴を鯨節と間違へて矢張り少々噛りました」

「そゝつかしい鼠だね。船の中に住んでると、さう見境がなくなるものかな」と主人は誰にも分らん事を云つて依然として鯉節を眺めて居る。

「なに鼠だから、どこに住んでもそゝつかしいのでせう。だから下宿へ持つて来ても又やられさうでね。劍呑だから夜るは寢床の中へ入れて寢ました」

「少しきたない様だぜ」

「だから食べる時には一寸御洗ひなさい」

「一寸位ぢや奇麗にやなりさうもない」

「それぢや灰汁でもつけて、ごしく磨いたらいゝでせう」

「ヴィオリンも抱いて寢たのかい」

「ヴィオリンは大き過ぎるから抱いて寢る譯には行かないんですが……」と云ひかけると

「なんだつて？ヴィオリンを抱いて寢たつて？夫は風流だ。行く春や重たき琵琶のだき心と云ふ句もあるが、夫は遠きその上の事だ。明治の秀才はヴィオリンを抱いて寢なくつちや古人を凌ぐ譯には行かないよ。かい巻に長き夜守るやヴィオリンはどうだい。東風君、新體詩でそんな事

が云へるかい」と向ふの方から迷亭先生大きな聲でこつちの談話にも關係をつける。

東風君は眞面目で「新體詩は俳句と違つてさう急には出来ません。然し出来た曉にはもう少し生靈の機微に觸れた妙音が出ます」

「さうかね、生靈はおがらを焚いて迎へ奉るものと思つてたが、矢つ張り新體詩の力でも御來臨になるかい」と迷亭はまだ碁をそつちのけにして調戲てゐる。

「そんな無駄口を叩くと又負けるぜ」と主人は迷亭に注意する。迷亭は平氣なもので

「勝ちたくても、負けたくても、相手が釜中の章魚同然手も足も出せないのだから、僕も無駄で已むを得ずヴィオリンの御仲間を仕るのさ」と云ふと、相手の獨仙君は聊か激した調子で

「今度は君の番だよ。こつちで待つてるんだ」と云ひ放つた。

「え？もう打つたのかい」

「打つたとも、とうに打つたさ」

「どこへ」

「此白をはすに延ばした」

「なある程。此白をはすに延ばして負けにけりか、そんなら此方とは——此方は——此方は此方とはとて暮れにけりと、どうもいゝ手が無いね。君もう一返打たしてやるから勝手な所へ一目打ち玉へ」

「そんな碁があるものか」

「そんな碁があるものかなら打ちませう。——それぢやこのかど地面へ一寸曲がつて置くかな。寒月君、君のヴィオリンはあんまり安いから鼠が馬鹿にして嚙るんだよ、もう少しいゝのを奮發して買ふさ、僕が以太利亞から三百年前の古物を取り寄せてやらうか」

「どうか願ひます。序に御拂ひの方も願ひたいもので」

「そんな古いものが役に立つものか」と何にも知らない主人は一喝にして迷亭君を極めつけた。「君は人間の古物とヴィオリンの古物と同一視して居るんだらう。人間の古物でも金田某の如きものは今だに流行してゐる位だから、ヴィオリンに至つては古い程がいゝのさ。——さあ、獨仙君どうか御早く願はう。けいまさのせりふぢやないが秋の日は暮れ易いからね」

「君の様なせわしない男と碁を打つのは苦痛だよ。考へる暇も何もありません。仕方がないから、こゝへ一目入れて目にして置かう」

「おやく、とうく生かしてしまつた。惜しい事をしたね。まさかそこへは打つまいと思つて、聊か駄辯を振つて肝膽を碎いて居たが、矢ツ張り駄目か」

「當り前さ。君のは打つのがやない。胡魔化すのだ」

「夫が本因坊流、金田流、當世紳士流さ。——おい苦沙彌先生、さすがに獨仙君は鎌倉へ行つて萬年漬を食つた丈あつて、物に動じないね。どうも敬々服々だ。碁はまづいが、度胸は据つてゐる」

「だから君の様な度胸のない男は、少し眞似をするがいゝ」と主人が後ろ向のまゝで答へるや否や、迷亭君は大きな赤い舌をべろりと出した。獨仙君は毫も關せざるものゝ如く、「さあ君の番だ」と又相手を促した。

「君はヴィオリンをいつ頃から始めたのかい。僕も少し習はうと思ふのだが、よつほど六づかしいものださうだね」と東風君が寒月君に聞いて居る。

「うむ、一通りなら誰にでも出来るさ」

「同じ藝術だから詩歌の趣味のあるものは矢張り音楽の方でも上達が早いだらうと、ひそかに恃む所があるんだが、どうだらう」

「いゝだらう。君なら屹度上手になるよ」

「君はいつ頃から始めたのかね」

「高等學校時代さ。——先生私しのバイオリンを習ひ出した顛末を御話しました事がありましたかね」

「いゝえ、まだ聞かない」

「高等學校時代に先生でもあつてやり出したのかい」

「なあに先生も何もありません。獨習さ」

「全く天才だね」

「獨習なら天才と限つた事もなからう」と寒月君はつんとする。天才と云はれてつんとするのは寒月君丈だらう。

「そりや、どうでもいゝが、どう云ふ風に獨習したのか一寸聞かし玉へ。参考にしたいから」

「話してもいゝ。先生話させようかね」

「あゝ話し玉へ」

「今では若い人がバイオリンの箱をさげて、よく往來杯をあるいて居りますが、其時分は高等學校生で西洋の音楽杯をやつたものは殆んどなかつたのです。ことに私の居つた學校は田舎の田舎で麻裏草履さへないと云ふ位な質朴な所でしたから、學校の生徒でバイオリン杯を弾くものは勿論一人もありません。……」

「何だか面白い話に向ふで始まつた様だ。獨仙君いゝ加減に切り上げ様ぢやないか」

「まだ片付かない所が二三箇所ある」

「あつてもいゝ。大概な所なら、君に進上する」

「さう云つたつて、貰ふ譯にも行かない」

「禪學者にも似合はん几帳面な男だ。それぢや一氣呵成にやつちまはう。——寒月君何だか餘つ程面白さうだね。——あの高等學校だらう、生徒が裸足で登校するのは……」

「そんな事はありません」

「でも、皆なはだして兵式體操をして、廻れ右をやるんで足の皮が大變厚くなつてると云ふ話だぜ」

「まさか。だれがそんな事を云ひました」

「だれでもいゝよ。さうして辨當には偉大なる握り飯を一個、夏蜜柑の様に腰へぶら下げて来て、夫を食ふんだつて云ふぢやないか。食ふと云ふより寧ろ食ひ付くんだね。すると中心から梅干が一個出て来るさうだ。此梅干が出るのを楽しみに鹽氣のない周圍を一心不亂に食ひ缺いて突進するんだと云ふが、成程元氣旺盛なものだね。獨仙君、君の氣に入りさうな話だぜ」

「質朴剛健でたのもししい氣風だ」

「まだたのもししい事がある。あすこには灰吹きがないさうだ。僕の友人があすこへ奉職をして居る頃吐月峯の印のある灰吹きを買ひに出た所が、吐月峯所か、灰吹と名づくべきものが一個もない。不思議に思つて、聞いて見たら、灰吹き杯は裏の藪へ行つて切つて来れば誰にでも出来るから、賣る必要はないと澄まして答へたさうだ。是も質朴剛健の氣風をあらはす美譚だらう、ねえ獨仙君」

「うむ、そりや夫でいゝが、こゝへ駄目を一つ入れなくちやいけない」

「よろしい。駄目、駄目、駄目と。夫で片付いた。——僕は其話を聞いて、實に驚いたね。そんな所で君がヴィオリンを獨習したのは見上げたものだ。惺獨にして不羣なりと楚辭にあるが寒月君は全く明治の屈原だよ」

「屈原はいやですよ」

「それぢや今世紀のエルテルさ。——なに石を上げて勘定をしる？やに物堅い性質だね。勘定しなくつても僕は負けてるから慥かだ」

「然し極りがつかないから……」

「それぢや君やつてくれ給へ。僕は勘定所ぢやない。一代の才人エルテル君がヴィオリンを習ひ出した逸話を聞かなくつちや、先祖へ濟まないから失敬する」と席をはづして、寒月君の方へすり出して来た。獨仙君は丹念に白石を取つては白の穴を埋め、黒石を取つては黒の穴を埋めて、しきりに口の内で計算をして居る。寒月君は話をつゞける。

「土地柄が既に土地柄なのに、私の國のものが又非常に頑固なので、少しでも柔弱なものが居

つては、他縣の生徒に外聞がわるいと云つて、無暗に制裁を嚴重にしましたから、随分厄介でした

「君の國の書生と來たら、本當に話せないね。元來何だつて、紺の無地の袴なんぞ穿くんだい。第一あれからして乙だね。さうして鹽風に吹かれ付けてゐるせゐか、どうも、色が黒いね。男だからあれで濟むが女があれぢや嘸かし困るだらう」と迷亭君が一人這入ると肝心の話はどつかへ飛んで行つて仕舞ふ。

「女もあの通り黒いのです」

「それでよく貰ひ手があるね」

「だつて一國中悉く黒いのだから仕方がありません」

「因果だね。ねえ苦沙彌君」

「黒い方がいゝだらう。生じ白いと鏡を見るたんびに己惚が出ていけない。女と云ふものは始末におへない物件だからなあ」と主人は喟然として大息を洩らした。

「だつて一國中悉く黒ければ、黒い方で己惚はしませんか」と東風君が尤もな質問をかけた。

た。

「とも角も女は全然不必要な者だ」と主人が云ふと、

「そんな事を云ふと妻君が後で御機嫌がわるいぜ」と笑ひながら迷亭先生が注意する。

「なに大丈夫だ」

「居ないのかい」

「小供を連れて、さつき出掛けた」

「どうれで静かだと思つた。どこへ行つたのだい」

「どこだか分らない。勝手に出てあるくのだ」

「さうして勝手に歸つてくるのかい」

「まあさうだ。君は獨身でいゝなあ」と云ふと東風君は少々不平な顔をする。寒月君はにやに

やと笑ふ。迷亭君は

「妻を持つとみんなさう云ふ氣になるのさ。ねえ獨仙君、君杯も妻君難の方だらう」

「えゝ？一寸待つた。四六二十四、二十五、二十六、二十七と。狹いと思つたら、四十六目あ

るか。もう少し勝つた積りだったが、こしらへて見ると、たつた十八目の差か。——何だつて？」

「君も妻君難だらうと云ふのさ」

「アハ、別段難でもないさ。僕の妻は元來僕を愛して居るのだから」

「そいつは少々失敬した。夫でこそ獨仙君だ」

「獨仙君ばかりぢやありません。そんな例はいくらでもありますよ」と寒月君が天下の妻君に代つて一寸辯護の勞を取つた。

「僕も寒月君に賛成する。僕の考では人間が絶對の域に入るには、只二つの道がある許りで、其二つの道とは藝術と戀だ。夫婦の愛は其一つを代表するものだから、人間は是非結婚をして、此幸福を完ふしなければ天意に背く譯だと思ふんだ。——がどうでせう先生」と東風君は相變らず眞面目で迷亭君の方へ向き直つた。

「御名論だ。僕等は到底絶對の境に這入れさうもない」

「妻を貰へば猶這入れやしない」と主人はむづかしい顔をして云つた。

「とも角も我々未婚の青年は藝術の靈氣にふれて向上の一路を開拓しなければ人生の意義が分

からないですから、先づ手始めにヴァイオリンでも習はうと思つて寒月君にさつきから經驗譚をきいてゐるのです」

「さうく、エルテル君のヴァイオリン物語を拜聴する筈だつたね。さあ話し給へ。もう邪魔はしないから」と迷亭君が漸く鋒銚を收めると、

「向上の一路はヴァイオリン杯で開ける者ではない。そんな遊戯三昧で宇宙の眞理が知れては大變だ。這裡の消息を知らうと思へば矢張り懸崖に手を撒して、絶後に再び蘇へる底の氣魄がなければ駄目だ」と獨仙君は勿體振つて、東風君に訓戒じみた説教をしたのはよかつたが、東風君は禪宗のぞの字も知らない男だから頓と感心した容子もなく

「へえ、さうかも知れませんが、矢張り藝術は人間の渴仰の極致を表はしたものだと思ひますから、どうしても之を捨てる譯には参りません」

「捨てる譯に行かなければ、御望み通り僕のヴァイオリン談をして聞かせる事に仕様、で今話す通りの次第だから僕もヴァイオリンの稽古をはじめめる迄には大分苦心をしたよ。第一買ふのに困りましたよ先生」

「さうだらう麻裏草履がない土地にヴァイオリンがある筈がない」
「いえ、ある事はあるんです。金も前から用意して溜めたから差支ないのですが、どうも買へないのです」

「なぜ？」

「狭い土地だから、買って居ればすぐ見つかります。見付ければ、すぐ生意氣だと云ふので制裁を加へられます」

「天才は昔から迫害を加へられるものだからね」と東風君は大に同情を表した。

「又天才か、どうか天才呼ばはり丈は御免蒙りたいね。それでね毎日散歩をしてヴァイオリンのある店先を通るたびにあれが買へたら好からう、あれを手に抱へた心持ちはどんなだらう、あゝ欲しい、あゝ欲しいと思はない日は一日もなかつたのです」

「尤もだ」と評したのは迷亭で、「妙に凝つたものだね」と解しかねたのが主人で、「矢張り君、天才だよ」と敬服したのは東風君である。只獨仙君許りは超然として髯を捋してゐる。

「そんな所にどうしてヴァイオリンがあるか？第一御不審かも知れないですが、是は考へて見る

と當り前の事です。なぜと云ふと此地方でも女學校があつて、女學校の生徒は課業として毎日ヴァイオリンを稽古しなければならぬのですから、ある筈です。無論いゝのはありません。只ヴァイオリンと云ふ名が辛うじてつく位のものであります。だから店でもあまり重きを置いて居ないので、二三艇一所に店頭へ吊して置くのです。夫がね、時々散歩をして前を通るときに風が吹きついたり、小僧の手が障つたりして、そら音を出す事があります。其音を聞くと急に心臓が破裂しさうな心持で、居ても立つても居られなくなるんです」

「危険だね。水癩癩、人癩癩と癩癩にも色々種類があるが君のはエルテル丈あつて、ヴァイオリン癩癩だ」と迷亭君が冷やかすと、

「いや其位感覚が鋭敏でなければ眞の藝術家にはなれないですよ。どうしても天才肌だ」と東風君は愈々感心する。

「えゝ實際癩癩かも知れませんが、然しあの音色丈は奇體ですよ。其後今日迄随分ひきましたがああ位の美しい音が出た事がありません。さうさ何と形容していゝでせう。到底言ひあらはせな

「琳琅瑯鏘として鳴るぢやないか」とむづかしい事を持ち出したのは獨仙君であつたが、誰も取り合はなかつたのは氣の毒である。

「私が毎日々々店頭を散歩して居るうちにとう／＼此靈異な音を三度きゝました。三度目にどうあつても是は買はなければならぬと決心しました。假令國のものから譴責されても、他縣のものから輕蔑されても——よし鐵拳制裁の爲めに絶息しても——まかり間違つて退校の處分を受けても——是許りは買はずに居られないと思ひました」

「夫が天才だよ。天才でなければ、そんなに思ひ込める譯のものぢやない。羨しい。僕もどうかして、それ程猛烈な感じを起して見たいと年來心掛けて居るが、どうもいけないね。音樂會杯へ行つて出来る丈熱心に聞いて居るが、どうも夫程に感興が乗らない」と東風君はしきりに羨やましがつてゐる。

「乗らない方が仕合せだよ。今でこそ平氣で話す様なものゝ其時の苦しみは到底想像が出来る様な種類のものではなかつた。——それから先生とう／＼奮發して買ひました」

「ふむ、どうして」

「丁度十一月の天長節の前の晩でした。國のものは揃つて泊りがけに温泉に行きましたから、一人も居ません。私は病氣だと云つて、其日は學校も休んで居ました。今晚こそ一つ出て行つて兼て望みのヴィオリンを手に入れようと、床の中で其事ばかり考へて居ました」

「僞病をつかつて學校迄休んだのかい」

「全くさうです」

「成程少し天才だね、是や」と迷亭君も少々恐れ入つた様子である。

「夜具の中から首を出して居ると、日暮れが待遠でたまりません。仕方がないから頭からもぐり込んで、眼を眠つて待つて見ましたが、矢張り駄目です。首を出すと烈しい秋の日は、六尺の障子へ一面にあたつて、かん／＼するには痛癢が起りました。上の方に細長い影がかたまつて、時々秋風にゆすれるのが眼につきます」

「何だい、其細長い影と云ふのは」

「澁柿の皮を剥いて、軒へ吊るして置いたのです」

「ふん、それから」

「仕方がないから、床を出て障子をあけて椽側へ出て、澁柿の甘干しを一つ取って食ひました」
「うまかつたかい」と主人は小供見た様な事を聞く。

「うまいですよ、あの邊の柿は、到底東京杯ちやあの味はわかりませんね」

「柿はいゝが夫れから、どうしたい」と今度は東風君がきく。

「夫れから又もぐつて眼をふさいで、早く日が暮れゝばいゝがと、ひそかに神佛に念じて見た。約三四時間も立たと思ふ頃、もうよからうと、首を出すと豈計らんや烈しい秋の日は依然として六尺の障子を照らしてかんくする、上の方に細長い影がかたまつて、ふわくする」

「そりや、聞いたよ」

「何返もあるんだよ。夫れから床を出て、障子をあけて、甘干しの柿を一つ食つて、又寢床へ這入つて、早く日が暮れゝばいゝと、ひそかに神佛に祈念をこらした」

「矢つ張りもとの所ぢやないか」

「まあ先生さう焦かずに聞いて下さい。夫から約三四時間夜具の中で辛抱して、今度こそもうよからうとぬつと首を出して見ると、烈しい秋の日は依然として六尺の障子へ一面にあたつて、

上の方に細長い影がかたまつて、ふわくして居る」

「いつ迄行つても同じ事ぢやないか」

「夫れから床を出て障子を開けて、椽側へ出て甘干しの柿を一つ食つて……」

「又柿を食つたのかい。どうもいつ迄行つても柿ばかり食つて、際限がないね」

「私もぢれつたくてね」

「君より聞いてる方が餘つ程ぢれつたいぜ」

「先生はどうも性急だから、話がしにくくつて困ります」

「聞く方も少しは困るよ」と東風君も暗に不平を洩らした。

「さう諸君が御困りとある以上は仕方がない。大抵にして切り上げませう。要するに私は甘干しの柿を食つてはもぐり、もぐつては食ひ、とうく軒端に吊るした奴をみんな食つて仕舞ひました」

「みんな食つたら日も暮れたらう」

「所がさう行かないので、私が最後の甘干しを食つて、もうよからうと首を出して見ると、相

變らず烈しい秋の日は六尺の障子へ一面にあたつて……」

「僕あ、もう御免だ。いつ迄行つても果てしが無い」

「話す私も飽き／＼します」

「然し其位根氣があれば大抵の事業は成就するよ。だまつてたら、あしたの朝迄秋の日はかかんするんだらう。全體いつ頃にヴァイオリンを買ふ氣なんだい」と流石の迷亭君も少し辛抱し切れなくなつたと見える。只獨仙君のみは泰然として、あしたの朝迄でも、あさつての朝まででも、いくら秋の日はかかん／＼しても動する氣色は更でない。寒月君も落ち付き拂つたもので

「いつ買ふ氣だと仰しやるが、晩になりさへすれば、すぐ買ひに出掛ける積りなのです。只残念な事には、いつ頭を出して見ても秋の日はかかん／＼して居るものですから——いえ其時の私しの苦しみと云つたら、到底今あなた方の御ぢれになる所の騒ぎぢやないです。私は最後の甘干を食つても、まだ日が暮れないのを見て、泣然として思はず泣きました。東風君、僕は實に情けなくつて泣いたよ」

「さうだらう、藝術家は本來多情多恨だから、泣いた事には同情するが、話をもつと早く進行

させたいものだね」と東風君は人がいゝから、どこ迄も眞面目で滑稽な挨拶をして居る。

「進行させたいのは山々だが、どうしても日が暮れてくれないものだから困るのさ」

「さう日が暮れなくちや聞く方も困るからやめやう」と主人がとう／＼我慢がし切れなくなつたと見えて云ひ出した。

「やめちや猶困ります。是からが愈佳境に入る所ですから」

「夫ぢや聞くから、早く日が暮れた事にしたらよからう」

「では、少し御無理な御注文ですが、先生の事ですから、枉げて、こゝは日が暮れた事に致しませう」

「それは好都合だ」と獨仙君が澄まして述べられたので一同は思はずどつと噴き出した。

「愈夜に入つたので、まづ安心とほつと一息ついて鞍懸村の下宿を出ました。私は性來騒騒敷い所が嫌ですから、わざと便利な市内を避けて、人迹稀な寒村の百姓家にしばらく蝸牛の庵を結んで居たのです……」

「人迹の稀なあんまり大袈裟だね」と主人が抗議を申し込むと「蝸牛の庵も仰山だよ。床の

間なしの四疊半位にして置く方が寫生的で面白い」と迷亭君も苦情を持ち出した。東風君は「事實はどうでも言語が詩的で感じがいゝ」と褒めた。獨仙君は眞面目な顔で「そんな所に住んで居ては學校へ通ふのが大變だらう。何里位あるんですか」と聞いた。

「學校迄はたつた四五丁です。元來學校からして寒村にあるんですから……」

「夫ぢや學生は其邊に大分宿をとつて居るんでせう」と獨仙君は中々承知しない。

「えゝ、大抵な百姓家には一人や二人は必ず居ます」

「それで人迹稀なんですか」と正面攻撃を喰はせる。

「えゝ學校がなかつたら、全く人迹は稀ですよ。……で當夜の服装と云ふと、手織木綿の縮入の上へ金釦の制服外套を着て、外套の頭巾をすぼりと被つて可成人の目につかない様な注意をしました。折柄柿落葉の時節で宿から南郷街道へ出る迄は木の葉で路が一杯です。一步運ぶ毎にさがさするのが氣にかゝります。誰かあとをつけて來さうでたまりません。振り向いて見ると東嶺寺の森がこんもりと黒く、暗い中に暗く寫つて居ます。この東嶺寺と云ふのは松平家の菩提所で、庚申山の麓にあつて、私の宿とは一丁位しか隔つてゐない、頗る幽邃な梵刹です。森から上

はのべつ幕なしの星月夜で、例の天の河が長瀬川を筋違に横切つて末は——末は、さうですね、まづ布哇の方へ流れて居ます……」

「布哇は突飛だね」と迷亭君が云つた。

「南郷街道を遂に二丁來て、鷹臺町から市内に這入つて、古城町を通つて、仙石町を曲つて、喰代町を横に見て、通町を一丁目、二丁目、三丁目と順に通つて、夫から尾張町、名古屋町、鯉鉾町、蒲鉾町……」

「そんなに色々な町を通らなくてもいゝ。要するにバイオリンを買つたのか、買はないのか」と主人がぢれつたさうに聞く。

「樂器のある店は金善即ち金子善兵衛方ですから、まだ中々です」

「中々でもいゝから早く買ふがいゝ」

「かしこまりました。それで金善方へ來て見ると、店にはランプがかんくともつて……」

「又かんくか、君のかんくは一度や二度で濟まないんだから難澁するよ」と今度は迷亭が豫防線を張つた。

「どれつたい男だな。買ふなら早く買ふさ。いやならいやでいゝから、早く方をつけたらよささうなものだ」

「いえ、買ったのです」

「それぢや、とう／＼買はずに已めたんだね」と主人が念を押す。

「弾かずに生きてる方が樂ですよ」
「それぢや、とう／＼買はずに已めたんだね」と主人が念を押す。
「只の人なら千が二千でも構ひませんがね、學校の生徒が腕まくりをして、大きなステッキを持つて徘徊して居るんだから容易に手を出せませんよ。中には沈澱黨杯と號して、いつまでもクラスの底に溜まつて喜んでるのがありますからね。そんなのに限つて柔道は強いのですよ。滅多にヴィオリン杯に手出しは出来ません。どんな目に逢ふかわかりません。私だつてヴィオリンは欲しいに相違ないですけども、命は是でも惜しいですからね。ヴィオリンを弾いて殺されるよりも、弾かずに生きてる方が樂ですよ」

「なぜつて、また宵の口で人が大勢通るんですもの」
「構はんぢやないか、人が二百や三百通つたつて、君は餘つ程妙な男だ」と主人はぶん／＼して居る。

「只の人なら千が二千でも構ひませんがね、學校の生徒が腕まくりをして、大きなステッキを持つて徘徊して居るんだから容易に手を出せませんよ。中には沈澱黨杯と號して、いつまでもクラスの底に溜まつて喜んでるのがありますからね。そんなのに限つて柔道は強いのですよ。滅多にヴィオリン杯に手出しは出来ません。どんな目に逢ふかわかりません。私だつてヴィオリンは欲しいに相違ないですけども、命は是でも惜しいですからね。ヴィオリンを弾いて殺されるよりも、弾かずに生きてる方が樂ですよ」

「いえ、今度のかん／＼は、ほんの通り一返のかん／＼ですから、別段御心配には及びません。灯影にすかして見ると例のヴィオリンが、ほのかに秋の灯を反射して、くり込んだ胴の丸みに冷たい光を帯びて居ます。つよく張つた琴線の一部丈がきら／＼と白く眼に映ります。……」

「中々敘述がうまいや」と東風君がほめた。

「あれだな。あのヴィオリンだなと思ふと、急に動悸がして足がふら／＼します……」

「ふん」と獨仙君が鼻で笑つた。

「思はず馳け込んで、隠袋から蝦蟇口を出して、蝦蟇口の中から五圓札を二枚出して……」

「とう／＼買ったかい」と主人がきく。

「買はうと思ひましたが、ましてはばし、こゝが肝心の所だ。滅多な事をしては失敗する。まあよさうと、際どい所で思ひ留まりました」

「なんだ、まだ買はないのかい。ヴィオリン一挺で中々人を引つ張るぢやないか」

「引つ張る譯ぢやないんですが、どうも、まだ買へないんですから仕方がありません」

「なぜ」

「えへムム、世の中の事はさう、こつちの思ふ様に埒があくもんぢやありませんよ」と云ひながら寒月君は冷然と「朝日」へ火をつけてふかし出した。

主人は面倒になつたと見えて、ついと立つて書齋へ這入つたと思つたら、何だか古ぼけた洋書を一冊持ち出して来て、ごろりと腹這になつて読み始めた。獨仙君はいつの間にやら、床の間の前へ退去して、獨りで碁石を並べて一人相撲をとつてゐる。折角の逸話もあまり長くかゝるので聴手が一人減り二人減つて、残るは藝術に忠實なる東風君と、長い事にかつて辟易した事のない迷亭先生のみとなる。

長い烟をふうと世の中へ遠慮なく吹き出した寒月君は、やがて前同様の速度を以て談話をつとける。

「東風君、僕は其の時から思つたね。到底こりや宵の口は駄目だ、と云つて眞夜中に來れば金善は寐て仕舞ふから猶駄目だ。何でも學校の生徒が散歩から歸りつくして、さうして金善がまだ寐ない時を見計らつて來なければ、折角の計畫が水泡に歸する。けれども其時間をうまく見計らふのが六づかしい」

「成程是りや六づかしからう」

「で僕は其時間をまあ十時頃と見積つたね。夫で今から十時頃迄どこかで暮さなければならぬ。うちへ歸つて出直すのは大變だ。友達のうちへ話しに行くのは何だか氣が咎める様で面白くない、仕方がないから相當の時間がくる迄市中を散歩する事にした。所が平生ならば二時間や三時間はぶら／＼あるいて居るうちに、いつの間にか經つてしまふのだが其夜に限つて、時間のたつのが遅いの何のつて、——千秋の思とはあんな事を云ふのだらうと、しみ／＼感じました」と左も感じたらしい風をしてわざと迷亭先生の方を向く。

「古人も待つ身につらき置炬燵と云はれた事があるからね、又待たるゝ身より待つ身はつらいともあつて軒に吊られたワイオリンもつらかつたらうが、あてのない探偵の様にうろ／＼、まごついて居る君は猶更つらいだらう。累々として喪家の犬の如し。いや宿のない犬程氣の毒なものは實際ないよ」

「犬は残酷ですね。犬に比較された事は是でもまだありませんよ」

「僕は何だか君の話をきくと、昔しの藝術家の傳を讀む様な氣持がして同情の念に堪へない。

犬に比較したのは先生の冗談だから氣に掛けずに話を進行し玉へ」と東風君は慰藉した。慰藉されなくても寒月君は無論話をつゞける積りである。

「夫から徒町から百騎町を通つて、兩替町から鷹匠町へ出て、縣廳の前で枯柳の數を勘定して病院の横で窓の灯を計算して、紺屋橋の上で巻烟草を二本ふかして、さうして時計を見た。……」

「十時になつたかい」

「惜しい事にならないね。——紺屋橋を渡り切つて川添に東へ上つて行くと、按摩に三人あつた。さうして犬がしきりに吠えましたよ先生……」

「秋の夜長に川端で犬の遠吠をきくのは一寸芝居がゝりだね。君は落人と云ふ格だ」

「何かわるい事でもしたんですか」

「是からしやうと云ふ所さ」

「可哀相にヴィオリンを買ふのが悪い事ぢや、音楽學校の生徒はみんな罪人ですよ」

「人が認めない事をすれば、どんないゝ事をしても罪人さ、だから世の中に罪人程あてにならないものはない。耶穌もあんな世に生れゝば罪人さ。好男子寒月君もそんな所でヴィオリンを買

へば罪人さ」

「それぢや負けて罪人として置きませう。罪人はいゝですが十時にならないのには弱りました」

「もう一返、町の名を勘定するさ。それで足りなければ又秋の日をかん／＼させるさ。夫でも追付かなければ又甘干しの澁柿を三ダースも食ふさ。いつ迄でも聞くから十時になる迄やり給へ」

寒月先生はにや／＼と笑つた。

「さう先を越されては降参するより外はありません。それぢや一足飛びに十時にして仕舞ませう。儲御約束の十時になつて金善の前へ来て見ると、夜寒の頃ですから、さすが目貫の兩替町も殆んど人通りが絶えて、向からくる下駄の音さへ淋しい心持ちです。金善ではもう大戸をたてて、僅かに潜り戸丈を障子にして居ます。私は何となく犬に尾けられた様な心持で、障子をあけて這入るのに少々薄氣味がわるかつたです……」

此時主人はきたならしい本から一寸眼をはづして、「おいもうヴィオリンを買つたかい」と聞いた。「是から買ふ所です」と東風君が答へると「まだ買はないのか、實に永いな」と獨り言の様に云つて又本を讀み出した。獨仙君は無言の儘、白と黒で碁盤を大半埋めて了つた。

「思ひ切つて飛び込んで、頭巾を被つた儘ヴァイオリンを呉れと云ひますと、火鉢の周圍に四五人小僧や若僧がかたまつて話をして居たのが驚いて、申し合せた様に私の顔を見ました。私は思はず右の手を舉げて頭巾をぐいと前の方に引きました。おいヴァイオリンを呉れと二度目に云ふと、一番前に居て、私の顔を覗き込む様にして居た小僧がへえと覺束ない返事をして、立ち上がつて例の店先に吊るしてあつたのを三四挺一度に卸して來ました。いくらかと聞くと五圓二十錢だと云ひます……」

「おいそんな安いヴァイオリンがあるのかい。おもちゃやぢやないか」

「みんな同價かと聞くと、へえ、それでも變りは御座いませぬ。みんな丈夫に念を入れて拵らへて御座いますと云ひますから、蝦蟇口のなかゝら五圓札と銀貨を二十錢出して用意の大風呂敷を出してヴァイオリンを包みました。此間、店のものは話を中止してぢつと私の顔を見て居ます。顔は頭巾でかくしてあるから分る氣遣はないのですけれども何だか氣がせいと一刻も早く往來へ出たくて堪りません。漸くの事風呂敷包を外套の下へ入れて、店を出たら、番頭が聲を揃へて難有うと大きな聲を出したのにはひやつとしました。往來へ出て一寸見廻して見ると、幸誰も居

ない様ですが、一丁許り向から二三人して町内中に響けとばかり詩吟をして來ます。こいつは大變だと金善の角を西へ折れて濠端を樂王師道へ出て、はんの木村から庚申山の裾へ出て漸く下宿へ歸りました。下宿へ歸つて見たらもう二時十分前でした」

「夜通しあるいて居た様なものだね」と東風君が氣の毒さうに云ふと「やつと上がった。やれやれ長い道中雙六だ」と迷亭君はほつと一息ついた。

「是からが聞き所ですよ。今迄は單に序幕です」

「まだあるのかい。こいつは容易な事ぢやない。大抵のものは君に逢つちや根氣負けをするね」

「根氣はとにかく、こゝでやめちや佛作つて魂入れずと一般ですから、もう少し話します」

「話すのは無論隨意さ。聞く事は聞くよ」

「どうです苦沙彌先生も御聞きになつては。もうヴァイオリンは買つて仕舞ひましたよ。えゝ先生」